Re:俺!?

かみかみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅ：俺！？

【Ｎコード】
Ｎ９０３５Ｒ

【作者名】
かみかみん

【あらすじ】
気が付いたら……俺誰？自分の名前だけが思い出せないんですが！？
しかも、何で赤ん坊なの！！更に、俺の目の前にいる女性は誰ですか！？
そして始まる俺のＲｅ：生活〜

第一幕　気が付いて（前書き）

ノリで書いてみました！
更新は超不定期ですが、ヨロシクお願いします～

第一幕　気が付いて

別段つまらないと言う訳では無い人生だった。
それよか、普通に友人と一緒になりバカをしたり、普通に…とは違うかもしれないけれど恋もしたことだってある。寧ろ充実した人生だったと自負できる。
…まぁ、あまり感情を表に出す事が無い顔の為に傍から見たら友人だけが騒いでいるだけのようにも見えたかもしれないけれどな。
それに、恋と言っても何故か初恋が近所の人妻と言う時点で普通の恋ではないけれど…
……ゲフンゲフン。そ、それにだ！決して善人と言う訳でもなく悪人と言う訳でも無い位何もしていないと自信を持って言える。
…いや、自信を持って言える内容でも無いんだけれどさ。
しかしながら…――――――――――――　だからこそ
問いたい。

「ふむ、この子は俺に似て強くなりそうだな」

「…………（何故俺は知らない人にあやされているのかを！！）」

おはよう、こんにちは、こんばんは。
何故だか気が付いたら赤ん坊になっていた以前の名前がわからない俺です。
俺の記憶が正しければ普通に一日を終えて普通に自分の家でご飯を食べて普通に自分の部屋のベッドで寝た……筈なんだが、気が付いたら見知らぬ人に…

「しかし…この子は殆ど泣かぬから手が掛らんな。俺はてっきりガキは泣いてばかりだと思っていたんだが…」

と言う感じであやされてる状態だ。
状況がまるっと理解できないと？　大丈夫だ。当事者の俺ですら一ミリたりとも理解できないし、理解しようとも思わない状況だ。
…ん？　夢オチとかそういうのではないのかとな？　…うん、俺も始めはそういう路線から攻めようと思ったんだが……何て言うんだろう？
感覚がリアルすぎるんだよね。具体的に言うと……

「（――――――グシャ）……あ、力加減間違えた」

まぁ、こんな感じでさっきから抱っこされる度に力加減をニアミスって明らかに赤ん坊の身体からは出てはいけない音と言うか…手を滑らされていると言いますか…その度にすっごく痛いのが全身に押し寄せていると言う軽く拷問まがいな事を受けているのだ。
しかし、身体が赤ん坊でも中身が大人な俺なのでおいそれと泣くと言う選択肢が出てこないんだ。しかも、この赤ん坊の身体自体がやけにスペックが高いか知らないけれど、殆ど無傷という驚異の赤ん坊……ホントに恐るべしダ！！

おとと、俺の心内ばかり出していても仕方ない。それじゃあ、俺の目の前に居る人について話しておこうと思う。

「ふむ…俺が腹を痛めて産んだ子じゃなかったら死んでいたな」

……うん、驚いた人もいるよね？　自分の事を俺と言って、尚且つ俺を握り潰そうとした……と言うより、完璧握り潰した正に傍若無人なしゃべり方をしているこの人が母親らしいんだよねぇ～確かに見た感じ、眼は釣り上がっているものの、端正な顔立ちをしているし…漆黒な髪を後ろで結びポニーテール見たいな髪型になっているんだよねぇ～

ハハハ～……ハァ…

『すぅぱぁらっき～チャ～ンス！！！！』

「……？」

何だろう？この場には赤ん坊になった俺と赤ん坊の母親しかいないのにこの人ではない別の女性の声が聞こえてきたようなそうでないような……？

『あ、そのままそのまま～私は自称ゴッドゥ！！　何か知んないけれど、すっごく運が悪い君を生き返らせてしまった張本人さぁ～！！』テンション高けぇなこの人……えっと…自称　ゴッドゥさん？

…変な名前だ。

しかし、生き返らせてしまった張本人って……誰が死んだんだろう？

『…君、意外と酷い事言うね。ってか、死んだのってどう考えても君でしょ！？　自室で睡眠中に不幸にも隕石が落下して脳天に大穴開けて死んだの君だよね！？』

へぇ～…本当に運の無い人もいたもんだ。　一度その顔を見てみたいもんだよ。…いや、その人は死んだんだから無理かな？しかも、脳天に穴があいているんだったら顔すら判別がムズそうだ。
それよか、俺もいよいよ危ないのかな？やけにリアルな幻覚と共に幻聴まで聞こえてきたんだから…しかも、自分の名前も思い出せないんだよね？　うわ～……病院行かないと危ない状況なのかな？
親には迷惑かけるなぁ～

『いや、だから君だっつ～の……あぁ～埒が明かない！！　ヘイＹｏｕ！生き返っちまいなよ！　的なノリで行こうと思ったのにーー！！』

相も変わらず幻聴は持続中…目の前では母親と思われる女性が俺を握り潰したことを悪怯れた様子もなく、先程と同じように抱き抱えて…

――――――――――――グシャ

「あ、またやっちまった…」

（――――――――――――！！？
絶賛リフレインちゅう！？）

…そう言えば、何だかこの人の服装といい、家の内部といい古い時代のものに見えるけれど…
俺ってばそこまで歴史は好きではないのに此処まで歴史的な夢か幻覚を見るなんて…実は俺ってば隠れ歴史ファンとかだったのか！？
…そう言われてみれば、無双ゲームとかは好きだった気がするなぁ～

「しかし…アイツには困ったものだ。俺の柚登(ゆと)に全く興味をしめさんとは…」

そう言いながら女性は誰かのことをブツクサと不満タラタラな感じ言っている。

へ～幻覚だってのにやけにリアルな造りをしているんだな。まさか、独り言とかの設定まであるなんて…

「柚登も、あんなヤツの子供は嫌だよな～」

いや、俺に同意を求められても…

そういや、合間合間に出てくる『柚登』って言うのはもしかして俺の名前なのかな？

『その通りだ柚登君！！』

「うぎょぉ！？きゃきゃっきゃ～（うおぉ！？　ビビった～）」

「うおぉ！？　まさか、柚登自身から同意を得られるとは思わなかったな…しかし、流石俺の倅だぜ！俺の味方をしてくれるなんて柚登はアイツと違って優しいなぁ～」

そう言いながら俺の頬に自分の頬を当ててグリグリとあてがる女性。

いや…ヤメッ…！幾らこの身体が丈夫だからってそんな風に力任せにグリグリってやられると首に向かって負担が直に来て…

あ……あ…ら、らめぇーーーーー！！！！

……まぁ、この人は置いておいて、さっきから俺に向かって話しかけてるのこの幻聴って？

『だから、幻聴じゃないって！あと、君の今の状況も幻覚じゃないからね！って言うか、切り替え早っ！？』

だから、幻聴&幻覚につき合っているほど暇じゃないんだっての～俺はさっさと病院を紹介してもらって、慎み深く余生を堪能するつもり…

『アンタは何処かの老人か――――！！　ったく、しゃあないわね…オラァ！！』

突如として女性としては似つかわしくない妙に気合の入った声が頭の中で響いた。そして、その一拍後、俺の意識は黒色に塗りつぶされたのであった。

ここは…？

『お目覚めかしら？』

あぁ、幻聴の続きか……

『だぁ～かぁ～らぁ～！　あれは幻聴でも幻覚でも無いっての！！
今から現実を見せてあげるから覚悟しておきなさいよ！！』

又もや何もない漆黒の暗闇から女性の声が響いてくる。どうやら若

干お怒り気味みたいだ。
まぁ、コレだけ俺が否定しまくっているんだから仕方ないと言ったらそれまで何だけれどね。
ただ、現実味が無さ過ぎじゃね？隕石ぶつかって死亡～とかってさ。
そんな事を思っていると、突如として視界が明るく変化した。一瞬目をしかめたが、思ったよりも直ぐに眼は慣れてきた。
段々と鮮明になっていく視界…其処で俺が見たものは……

「……俺…か？」

『何だ喋れるんじゃない。…そうよ、貴方の亡骸よ』

天井に大穴をあけて部屋をひっくり返した位ぐしゃぐしゃに変化しているが、其処は見間違えようもない先程まで俺がいた部屋…そして、その中心には頭部が存在しない『誰か』の…人間の身体がまるで人形のように横たわっていた。

「……親は…？」

『開口一番が自分の事より親の事って…まぁ、柚登君がそれだけ人の事を思えるってのは嬉しい事ね～…おとと、親だったわね？まぁ、このままいくと発見されちゃうけれど……』

そ、それは不味い！信じる信じないは別として、こんな現場を一般人が見たら、それこそ卒倒しちまうじゃんかよ！！
えとえと…こういうのはどうにかしなければ……そうだ！！

「……消せ…」

…このビジョンを早く消して〜！！

『へぇ〜そういった結論に至るんだ…思った以上に達観しているわねぇ〜自分の死を受け入れさせない為に何をすればいいのか…それは自分がいたと言う事実を消すと言う事……成程〜やっぱり、柚登君は面白いわねぇ〜』

はへ？　何だか物騒な結論に至ってないかなこの声の主さん！？
ちょ、俺が居た事実を消すとか何だか幻聴にしては物騒すぎる事を言っているんですが！？
俺は唯、今俺が見ている映像を消せって言っただけで…だって、リアルスプラッタ映像なんて正直見ても嬉しくないんですが！？

『私、貴方の事を気にいっちゃいそうだわぁ〜そうね……あのままだと不便かもしれないから色々とオ・マ・ケを付けておいてあげるわねぇ〜』

そんな声と共に徐々に消えていく崩壊した俺の部屋……そして再び消えかかっていく俺の意識…
えっと、今の映像を消してくれるのは嬉しいんだけれど、実際の所、俺の状態はどんな感じな訳ですかぁ！！？

『そうそう、貴方の新しい人生は『三国志』っていう時代背景があるわよ〜……まぁ、ただ少しパロってるけれどね…』

へ？何！？　最初の三国志は聞こえたけれど、最後の方が小声で聞こえなかった！！もう一度、もう一度プリーズ！！
しかし、そんな俺の声が届く事は無く、完璧に俺の意識は塗りつぶされていくのであった。

・・・・・・・・・・

そうして気が付いたら俺の視界はあのぶっ飛び女性の後頭部が映し出されていた。どうやら、おんぶ…と言うより、布で女性の背中に固定させられているみたいだ。
しかしながら、周りは暗くて明らかに子供を連れて散歩するような時間帯ではないんだが……？
俺は今の状況を確認するために動かしにくい手を動かして女性の頭を軽く叩いて起きたことをアピールした。

「お？　起きたのか柚登。ちょっと待ってろよ今軽く賊をぶっ潰す所だからよ！」

そう女性が言った瞬間、俺の視界の一部分になにやら赤い絵の具の様なものが飛散しているのに気が付いた。
始めは、この女性の職業が絵描きなのかと思ったが、よく見ると女性以外にも人がいるらしく…しかも、なにやら人の悲鳴にも似た声が俺の耳に入ってきた。
そして、その悲鳴の正体知った瞬間、絵描きと言う選択肢をコンマ一秒後には消し去った。
更に、聞こえてくる何やらかなりの重量がある湿った物体が地面に叩きつけられる音…

そして漂ってくる鉄臭い…それでいて、かなりの異臭…
そう、この女性は俺を背負った状態で人を……同族である人間を殺しているのだ。
しかも、一人や二人ではない。暗い夜道で詳しい数までは正確に調べられないが、パッと見で数十から百人分位の屍が横たわっている。
そして、俺を背負っている女性の周りにはテレビでしか見たことが無いような剣や槍、人によっては棍棒みたいな物を持ち、女性に向かってきている。
辺りを見回すとまだまだ人はいるが、どうやら全員が女性の敵みたいだ。それを迎え撃つ女性の手には無双ゲームで一番好きだったキャラが使用していた太さ４，５センチある三本の棒を鎖で一直線に連結させた武器…三節棍が……真っ赤に血に塗られた状態で握られていた。

……つまりは、この地べたに転がっている屍' sはこの女性一人で生成したものと言うことでして…
しかし、目覚めてこれか……もしかしてもしかすると、本当にあのビジョンはあった事…なのかな？だとしたら、俺は……一回死んだのか？
割とあっさりとその言葉を受け入れる事が出来た。寧ろ、何だかある意味で当然のことを自分で確認しているような感覚にさえ陥った。
成程…あながち、あの『自称　ゴッドゥ』さんの言っている事もあっていると言う事なんだな。しかも、先程の女性の『賊を潰す』という言葉から、間違いなく俺が知っている日本ではない。という結果からつまり俺は……

「さん…ごくし……」

「柚登、お前って生後三日なのに何で話せるんだ！！！！？」

……え？最後の『オ・マ・ケ』ってこういう事なの？

「流石は俺の倅だぜ！！　よっしゃぁぁ！！！！気合いが入ってきたぜー！神速で終わらせてやるぜーーー！！！！！」

……しかも、この赤ん坊って生まれてまだ三日しか経ってないの！！？

つーか、『流石は俺の倅』だけで片付けられる状況じゃなくね！？

そんなこんなで俺の三国志（？）ライフがスタートしてしまったのだった。

第一幕　気が付いて（後書き）

ありがとうございました、かみかみんです。
お久しぶりな方もいるとは思いますが、一言……

私は帰ってきたーーーーーーーーーー！！！！

ではでは、感想&ご意見はいつでもお待ちしています。
それでは、かみかみんでしたぁ～

第二幕　母として（前書き）

おはようございますかみかみんです。
イキナリですが、独自歴史が働いています。
コレ正史と違くネェ？　って思うかもしれませんが、放置してやってくださいな～
ではでは、準備完了の方はお進みください。

第二幕　母として

有体に言えば、あれから数年経過し、俺は肉体的に１０歳位になった。
あの後、やはり幻ではないのかと再び考えもしたが、これは覚める事無く、一つの物語を紡ぐかのように進んでいく。…つまりは、そう言う事なんだろう。
前世の記憶を持っているのにその時の名前も知らない俺は死に、新しく三国志の世界で柚登として生きていかなければいけないらしい。
最も、日本語が通じると言う時点で中国かどうかも怪しいんだけれどさ…。まぁ、文字は漢字だったから、やはり中国だと実感した。

そしてこの数年はこの世界の状況とか文字を覚えるのに費やした。
２１世紀では他に色々とやる事があった為、中々一つの事を集中して覚えると言う事が出来なかったが、他にやる事が無いこの世界では思った以上に文字を覚えるのに集中できたし、根本的に漢字の文化がある日本生まれの俺は殆どの漢字も読める為、文法や、見た事もない漢字を覚えるだけで済んだんだ。
そして、世界情勢なんかも母や、ご近所の話し好きな奥様方に色々と聞く事により、学んでいった。

その結果、今俺が住んでいる地は揚州と言う地にある小さな村らしい。……うん、地名を聞いても全く分かんないや～そして、三国志の始まりと言っても過言では無い出来事である黄巾党がまだ出現していないとのことだ。つまりは、まだ三国志の主要な出来事が起きる前の時代と推測できる。
最も、三国志の知識に関しては某無双しちゃったぜ的なゲームの受け売りなため、あまり多くの事はわからない。

…話がそれてしまったではないか。ゲフンゲフン…話を戻して……
しかしながら、俺は少しこの世界でやりすぎてしまったみたいだ。
新たな生を受けたと言う事実だけでは片づけられない程に様々な事を覚えすぎたんだ。
それこそ、生後三日で話すと言う伝説を作ったり、まだ生後一年にも満たない子供がハイハイをぶっ飛ばして二足歩行で全力疾走してみたり、二歳にも満たない子供が文字を覚えたりと普通では無い成長をしてしまった。

しかし、幾らなんでもこれは自分で言うのも変だが、ありえ無さ過ぎる。
脳だって、普通の子供の成長過程を無視し過ぎだし、体の構造上一歳の子供が二足歩行で全力疾走をするなんて不可能だ。
つまり、今俺に起きているあり得ない現象は数年前、俺に語りかけてきた『声』が言っていたオマケの一角と言う事なのだろう。

全く……面倒な身体にしやがって…しかし、幾らハイスペックな身体を有していても前世からの引き継ぎか知らないが、コミュニケーション能力が半端なく欠落していると言うのが悲しいところではある。
…そうなのだ。まるで他の成長と引き換えに俺は何故か感情と言うものが表に殆どで無い顔になってしまったんだ。考えられるか？中身は小市民過ぎる俺なのに、表では鉄仮面ばりに無表情な顔をしているんだぜ？
俺としては其処を一番改善してほしかったんだけれどなぁ～…まぁ、憂いても仕方ないから其処らへんは今後努力しよう。うん！

…おっと、そう言えばこの世界での俺の名前を言っていなかった気がする。始めに言った『柚登』と言う名前は真名と言うものらしくて、それは文字通り本当の名前…親兄弟他、自分が信頼できる人に

しか教えてはいけないモノ…らしい。
元日本人の俺からしてみたらそんな文化が中国に会ったと言う事に驚いている。
そして、一般的に使われる俺の名前は、姓は凌。名は統と言うらしい。つまりは凌統だ。
……やっべ、来たんじゃねコレ！？母が三節棍を使っていた時点で何と無く頭の片隅にあったけれど、凌統だぜ？凌統！
無双ゲームで好きなキャラ『なんば～わん』だったキャラだぜ！？
これで俺も三節棍使って無双が出来る……わけねぇか～俺って自負共に小市み（ｒｙ

そういや、凌統って父親が水賊に殺されちまうんだよなぁ～って事は、父も殺されるという事なのかな？
最も誰に殺されるとかは覚えては無いし、正直言ってどうでもいい事だしなぁ～
って言うか、そもそも……

父の名前って何だっけ？
いや、忘れているわけじゃ無いんだよ！ただ、根本的に聞いたこと

が無いなぁ～って思っただけで…
いや、誤解しないでよ！そもそも、知りたい情報ってわけでもないんだ。何でも父は軽侠らしくて家には殆どいない。それよか、母の話では余所に女をつくり、俺以外の子供もいる最低な奴らしい。
……因みに軽侠って言うのは軽々しく男伊達の振る舞いをする人…
『侠』は本来己の信条に則って正義の為に行動しようという精神を言う。まぁ、現代風に至極簡単に言うと、ヤ〇ザと同じだ。
……何故、母はヤーさんと一緒になったのかが果てしなく疑問だったりする。
まぁ、それだけで嫌う理由にはならない。なら何をしたのかって？あいつは成長の仕方が異常過ぎる俺に向かって殴る蹴るなどの暴行を加えたんだ。
所謂虐待っていうヤツだな。…いやまぁ、こんな成長の仕方をしている子供なんだから気持ちは解らないでもない。
俺だって正直自分の子供が無表情で尚且つ三日で話し始めたら不気味で仕方ないと思う。流石に虐待はしないと思うが…

だから、アイツの気持ちもわからんでもない。
だけれどさ……

「オラァ！酒持って来いつってんだろうがぁ！！」

「クッ…テメェ……！さっさと柚登を離せってんだよ！！」

俺を人質に母にあたるのはいかがと思うぞ？
所謂『でぃ～ぶい』と言うヤツですな？……ヤベェ、横文字に触れる機会が無かったせいか、スッゴイ発音の仕方が変だ！！？

……とまぁ、こんな感じで父からは虐待されているが、少し話し方は怖いがちゃんと面倒を見てくれた母のお陰で俺はスクスクと成長していった。
その過程で俺は一度興味本位で母にこういった質問をした事がある。

「……何故、父と…居る？」

相も変わらずな欠落したコミュニケーション能力で聞いたんだが…少し間違えれば色々と変な捉え方をしてしまいそうな質問だと我ながら思う。
しかし、そんな俺の言いたいことを理解しているのか母はこう返した。

「ん～…正直、柚登が生まれたから別れてもいいんだが…元々、夫婦になる気なんてなかったからな……いっその事、二人で出ていく

か？」

割と本気な顔をして笑顔を浮かべる母に対して心の中で全力投球並みのツッコミが炸裂したのは言うまでもなかったりする。

そんな感じで過ごしていたある日……

虐待ばかりしていたあの男が死んだ。

割とあっけない最期だった。何でも、水賊に殺されたらしい。

ただ、その理由を聞いて俺も母も正直呆れ返った。

――――――――なんとあの男は子供を誘拐しようとしていたらしいのだ！

…衝撃の事実だったりする。しかも、結構日常的に行っていたらしい。ヤ〇ザとは思っていたが、其処まで外道になり下がっていたとは…

其処を水賊に見つかり首チョンパとなったんだとさ。……あれ？
水賊って海賊みたいな者なんだよな？何故に良いことをしているのだろうか？
……そうか！きっと水賊王に俺はなる！！みたいな思考を持った人にやられたに違いない！それならば、あの男を殺す理由もわかる。
なるほど、なるほど…きっとこの世界のどこかにある水賊王が残したお宝を捜し出している集団なのだろう。
…そう言えば、本来の三国志で凌統の父は殺されていた。ここまではあっている。
だが、凌統が子供の時に死んだわけではなかったような…いや、よく考えたら俺が知っている知識は無双からのものだから、あんまり信用はできないか。
とかそんな事を考えながら俺は日々を過ごしていた。それにしても、この世界の母はこんな気持ち悪い位成長している俺を見離すことなく温かく育ててくれている。其処には凄く感謝だな。ただ……

「おう柚登、今から狩り行くぞ！　付き合え！！」

１０歳の俺には明らかにレヴェルが高いことばかりをさせようてするのは止めて貰いたいです。
母よ…１０歳の子供に武芸を教え込むのは良いが、殆どが野生の獣を使った実践と言うのはどういうものだろう？　偶の人間かと思ったら、村を襲おうとする賊って……俺に死ねと！？
それに、あの男が死んでから自棄にテンション高くねぇかこの人！？

―――― 母

正直なところ、俺はガキが苦手だった。
何かあったらビービー泣くし、繊細過ぎて力の加減を間違えたら壊れてしまいそうで……それは恐らく今も昔も変わらないと思う。だから俺が妊娠したと知った時は正直本気で喜べなかったんだ。
しかも、よりにもよってアイツとの子供だし…正直言うと折角の命だが、生まないという選択肢も出てきたくらいだ。
勿論、言うまでもなくアイツは全く喜ばない。…って言うか、無関心を貫き通していた。どうせ、余所で出来た女の事でも考えていやがるんだろう。そもそも、俺自身何でこんなのと一緒に暮らしているのかすらわからねぇ。

元々俺の実家は貧しい家柄だった。それに合わせて父が最悪な人であった。博打はやるわ、酒は飲むは…母上はそんな男の為に身を粉にして働いていた。
しかし、無理がたたったのだろう…ある時は母上は体調を崩し、帰らぬ人となった。流石に母上が大変な事になったんだ。あの男も働くだろうと思っていたんだが、よりにもよってあの男は当時１０歳位の…丁度柚登と同じ位の歳であろうか…その位の俺を売った。引き取ったのはとある国の主だった。
其処の主は俺に優しくしてくれたなぁ～俺は其処で武官として働いた。働いて働き抜いて……既に高齢だった主の為に俺は頑張り抜いた。人だって殺した。それも、数え切れぬほどに…
だが、俺は幸せだったんだ。しかし、元が高齢の主だ。そんな幸せも長くは続かなかった。

割とあっけなく主が死に、その後を柚登の父であるあの男が…躁が継いだ。ソレからは最悪な毎日だった。就任して早々に諸侯の軍勢

から城を奪われ、何故か俺を連れて近隣の村へ避難…家臣たちは俺を除いて皆死んだ。
其処でアイツは主の息子だという事を良い事に俺を襲い、軽侠になり下がったんだ。俺は元々アイツの事なんて愛してなんかいない。アイツをその場で殺さなかったのも恩を受けた主の息子という肩書きがあったからだ。

そんなこんなで悩んでいる間に柚登が産まれた。今でこそ良い思い出だが、当時は焦ったもんだ…
だが、いざ子育てをしてみると生まれてきた子供は…思いのほか可愛くて手が掛らなかった。しかも身体は思っていた以上に丈夫で俺が何度力加減を間違えて握り潰しかけたか解らないくらいだ。更に、何時もケロッとした顔をして泣くことはない。
そして、生まれて三日で喋り出すし…しかも、腹が減ったり、おしめを替えないといかん時は自分で何らかの対処をしていた。…俺は赤ん坊って言うのがよくわからんが、コレが普通で……いいのか？

いや、きっとこれは俺の血を受け継いでいるから特別なんだろう！見た所あの野郎の血を受け継いではいるものの髪の色が黒い所とか、目が吊り上がっている所とか身体が丈夫な所とかは俺に似ている！つまりは、俺の血の方が濃いと言う事だ。
周りは『震動』とか、言っているが……あれ？『心臓』だったか？
　まぁそんなのは如何でも言いや。取りあえず何か珍しいって騒いでやがるが、そんなのは俺が知ったこっちゃあねえってんだ！
ただ、一度も笑った顔を見たことがねえってのが親心に少し悲しい気もするんだが…だが、決して感情が無いって言う訳ではない。よ～く見てみると喜怒哀楽の時は微妙に顔が動いていやがる。つまりは、感情が表に出にくいってだけなんだな。それも慣れてくると愛しく思えるんだから子供ってのは不思議だなぁ～
俺も俺で柚登に面白半分で武術って言うのを教えてみたんだが……

これが以外とおもしれぇんだよな。
柚登は習った事をすぐさま吸収して自分のモノにしちまうし…新兵なんかよりも覚えがいい。
コイツは絶対に武官に向いてやがるぜ！！　最近は実戦と称して野獣の棲む森に放り込んだり、賊が蔓延っている地帯に連れて行ったりしているが、表情一つ変えずに１０歳とは思えない身体能力でうまくたちあっていやがる。勿論俺は陰で見守っているんだが…やっぱりあいつは武官以外は考えられねぇぜ！！
柚登には悪ぃが、アイツの意志はこの際無視して、絶対に武官にしてやる！！
そうだ！武術を教えるんだったら、俺と同じ三節棍を使えるようにさせて最強の称号を目指すのもおもしれぇな！

……何だか最近、子育てって言うのが楽しくてしゃあねぇや！！

それに、俺を縛り付けていたあの男は死んでくれたし…正にあっぱれって感じだな～
さてさて、これからは自由にやっていけると思うとこれからの未来が晴れて見えるしよぉ！！
取りあえずは……

「――――――――――――――――――――――――修行の旅に出るぞ

柚登！！」

「………わかった、母よ」

柚登10歳の出来事だった…

第二幕　母として（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

さてさて、この話は正に一発ネタで書いたものですので正直私もどういう話になるのか想像できません！
ですがまぁ、書くからには完結させたいなぁ～…そして、此処で報告です。
連載開始をしたばかりなのですが、諸事情により４～７月は更新速度がめっさ遅くなってしまいます。
おそらく私のブログの方も遅くなるのでご了承ください。
因みに、ブログの方にはＰＣから飛ぶ事が出来ます。そっちには以前ここに張っていたモノを掲載していますので興味がある方はどうぞ～

ではでは、かみかみんでしたぁ～

第三幕　戦乱始まりて（前書き）

こんにちはかみかみんです。
未だにキャラは出ず…それでもＯＫな方はお進みください～

第三幕　戦乱始まりて

突然ですが、この破天荒な母を如何にかしてください。父が亡くなり、母と二人で旅に出る事になった俺だが、旅に出て早々…

「よし柚登、これ持って賊を潰してこい！」

…だぜ？　そう言って母の愛用している三節棍を今迄見た事が無い位の笑顔で渡された時の俺の気持ちが解るか！？
血がべっとりと付いているんだぞ！！　正に年代物なんだからな～！！

一体母は小市民の俺に何を求めているのかを教えてほしいです！！
　じっくりコトコト５時間位説明してほしい位です！！
しかも、あれだぜ？　旅に出て直ぐって事はまだ俺１０歳の出来事だぜ！！？
マジで母は正気かと思ったですとよ！！　あ、やっべ何かテンパリすぎて訛っちまったぜ。

……いやいや、そうじゃなんだよ！！　流石に渋っていると…

「大丈夫だ。さっき俺が軽く潰しておいたからお前は弱った賊を倒せばいいんだよ」

……あれですか？　ライオンやチーターといった肉食動物が自分の子供に獲物の狩り方を教える時と原理は同じなんですか？弱らせた獲物を狩って来いってか！？
ソレの人間バージョンを実施しろって事ですか！！？

半ばゲンナリしながら俺は母が軽く潰したという賊の塒がある林の中へと足を運んだ。
正直、逃げ出したかったんだが母が遠くの方で俺を見ている気がしたんだ。
いや、実際に見たわけではないが何と無くそんな感じがしただけだ。
一度試しに振り返ってみたが、母は何処にもいない…だがあの母の事だ、油断は出来ないな。
俺は半ば強制的に覚悟を決めさせられて林の奥へと進んでいった。
そして、賊の塒に着いた俺が目にしたものは……

「……う、うぅ…」

「……た、たすけ…て…」

「……眼……俺の眼がぁ…」

正に地獄絵図と言ったものだと思う。
床にのたうち回っている者……既に虫の息状態の者……両眼に相当な衝撃が加わったのだろう。両方の眼球がひしゃげて、深紅の血の涙を流している者…数にすると２０人程の小さい規模ではあるが、皆が一様に重症者だ。

幾ら何でもやり過ぎではないんですか！？
明らかに軽く潰したって言う表現は間違っていると凌統君は思いますぞ！！
これは所謂、半殺しではなくて八分殺しと言うヤツではないかと判断いたします！！
普通の１０歳児が見たら一生モノのトラウマものですよ！！　赤ん坊の頃から母に連れられてそう言った事柄に対してある意味で耐性が出来ている俺じゃなかったらマジで心に大きな傷を残してしまうレベルですよ！！

あまりの酷い状況に賊たちに向けて同情をこめた視線を送りながら、この場をどうしようかを悩んでいると、八分殺しにあった一人の賊が俺の存在に気が付いたようだ。

「な、何だぉ……もぅ…もう許してくれよぉ～」

どうやら、あまりの恐怖で俺のことを母と間違えているみたいだ。
俺は慌てて訂正しようと右手を顔の前に持ってきて手を振り、自分が母では無いことをアピールしようとした。
……しかし、そこで悲劇は起きてしまったんだ。

――――――――――――――――――――――――――――グシャ…

なんと、勢いよく右手を上げてしまった所為で右手に握られていた三節棍が俺の手からすっぽ抜けて前方に向かって飛んでいってしまったのだ。
しかも、無駄に身体がハイスペックな為、三節棍はかなりのスピードで前方に飛んでいく。

俺は例のハイスペックな身体のお陰で視認出来るが、恐らくは矢と変わらない速度だと思う。
そして、ソレは真っすぐ……俺の存在に気が付いた賊の脳天にクリーンヒットしてしまったんだ！
母からの八分殺しに加えて俺のお馬鹿により、十二分殺し…哀れこの賊は全殺しになってしまったとさ……マル

・・・・・・

・

………………冗談じゃねぇーーーーーーーー！！！！！！

こんなギャグみたいなノリで人殺しのレッテルを張られてたまるかぁ！！

俺は慌てて三節棍がクリーンヒットした賊に駆け寄ろうとしたんだが……

――――――――――――グチャ……

「ぎゃぁぁああああああ！！！！！！！」

何やら足から生々しい感触が伝わり、直後に響いた苦痛に満ちた悲鳴…ま、まさかねぇ～…

俺はゆっくりと今し方地面に接地させた足へと目を向けた。

あってほしくはないけれど…今の感触ってもしかして…

下を見やると股の部分から大量に出血をして泡を吹いている男が一

人…そして、股に力のかぎり踏み抜いてしまったと思われる誰かさんの足が……って俺だ！？

俺は慌てて屈み、その人の無事を確認しようとした。しかし、如何せん足元が悪すぎた。

粘性の高い血液は俺の足と床の間にてまるで潤滑油の様な役割を果たしてしまったんだ。

瞬間的に前方に倒れる俺の身体……咄嗟に保護伸展反応が働き、手を前に突き出した。しかし、その手がある意味で決定打となってしまう。

――――――――――――――――――――――クチャリ…

「――――――――――――――――――――――ゲハァッ！！！！」

俺の右手の拳が急所を踏んでしまった男の顔面に炸裂した音だった…

――――　母

うへぇ～柚登のやつ、えげつねぇ事するなぁ～
柚登を賊がはびこっている場所へと送り込んで一刻程経過しただろうか？
俺は愛する息子の姿を見失わないように遠くから見守っていたんだが…
これは、俺の想像以上の育ち方をしていやがる。

まず、かなり距離を空けているはずなのに柚登のやつは俺が見ているのを気付いていやがる。
なるべくばれねぇ様に気配は殺していたはずなんだが…

そして二つ目…敵に対する冷酷さ。
齢１０にして、ここまで熟していやがるとは思わなかったぜ…
獲物を手放したのはいただけねぇか、三節棍を自然な動作で投擲し、賊の頭（かしら）を仕留めた後、地べたに転がっている頭の右腕とされている男の急所を躊躇なく踏み抜くたぁ…更に追撃として全力の拳を顔面に打ち込むとは…もしかして、俺が弱らせておく必要なんてなかったんじゃねえのか？

…兎に角、これにより頭を殺され、更に頭に一番近い人物を潰したことになる。
そんな光景を目の前で見せ付けられちまったら賊なんかみたいな上下関係の希薄な奴らは一気に有象無象の集団になり下がっちまう。
案の定、あの場に居るもの全てが抗う気力を潰えちまったみたいだ…

集団を相手にするにはまず頭を狙うのが鉄則だが、柚登は俺が教える間もなく自分自身でそれを開拓したんだ。

「やっぱり、柚登は戦の才があるな…こりゃあ俺なんかを、あっという間に抜いちまうぜ」

嬉しいような寂しいような…自分の息子が自分を抜いて行くという成長は嬉しいが、抜かれちまったら俺が柚登に教えられることが少なくなっちまうのは寂しいもんだなぁ。

そんなことを感じた母であった。

――――　柚登

まぁ、こんな事を俺と母は数年続けたんだ。
時には村から賊の討伐を依頼されたり…時には村を荒らす猛獣を相手にしたり…そんで報酬として一夜の宿を提供してもらったり、食べ物を貰ったり…残念ながら賊に襲われたせいで村にはその日暮らしがやっとの所もあった為、何も貰わないことだってある。
あぁ……色々と大変すぎた数年間だったなぁ～

……え？　今までのトラウマ描写は回想ですが何か？
そんなこんなで俺は、年齢的に大人になった。イキナリすぎる展開かもしれないけれど、まぁ許して。

そして、この数年間で廻った村や国の数と言ったら…正直数えきれないくらいある。
そして、色々と見聞を広めてみてわかった事なんだが…今の世の中

は三国志にあるような戦争はあまり起きていない。賊による略奪などは横行しているみたいだが…

やはり、戦乱の引き金となるべき出来事は何時起こるか分からない『黄巾の乱』のようだ。
えっと……張角だったっけか？　そいつが頭になって農民やら何やらを巻き込んだ事件だったよな？
確かに、この大陸を回るにあたって徐々にだが賊たちの勢力が広まっている事を肌に感じた。
つまりは、遠くない近い将来に三国志の始まりと言える出来事が起こる筈だ。

……あれ？凌統が生まれたのってその後だった気がするけれど……俺の勘違いだったか？
そうだ凌統と言えば、正史から行くと亡き父の跡を継ぎ呉で将として仕える筈だ。
しかし、俺がいる世界ではあの男が呉にいたと言う事実はなく、凌統である俺自身が母に連れられて修行の旅に出るという、歴史に描かれていない出来事が起きている。

つまりは、この世界は三国志通りに事が運ばれていないと言うことになる。
しかし、今この世界では賊が蔓延してきている。

これらのことから、歴史に残るような事件、事柄は正史通りに進むが将の細かい設定などは色々と都合の良いように捻曲げられている可能性があるということだ。
うっわ…なにこの何でもありな世界って…そういえば、言葉が前世のまま通じる時点で本来の三国志って言う選択肢は無いんだったな。

……そうだ！聞いて聞いて～かなり成長してから気がついたんだけれど、俺の容姿ってのが正に無双さんに出てきた凌統にそっくりなんですよ～……まぁ、あそこまで皮肉めいた口調では無いいだけれどさぁ～

だから、髪型とかはあの後ろ縛りを意識してみたんだよね。

最も、幾ら格好を似せても中身は小市民な俺だけれど～

そんなこんなで俺は母と修行をしながら今後の事について考えていた。

そんなある日、俺と母は幽州のとある村に辿り着いたんだ。

この日は早朝にお世話になった村を出て丸一日歩きづめだったのだが、未だに次の村には辿り着けていなかった。

辺りは既に夕闇に包まれており、このまま野宿をするかと言う選択肢の色が濃くなったその時、遠くの方で何か光る物を見つけたんだ。

俺と母はその光に向かって歩いてみると、小さくはあるが村を見つけたのだ。

元々現代っ子の俺としては、なるべく野宿をするという選択肢を選びたくなかったので、正にピッタリなタイミングであった。

「おう柚登、今日はこの村で世話になっぞ～」

母もどうやらこの村に一夜のお世話になる事を決めたみたいだ。

そうと決まれば、早速村長のお宅に向かわねば！！　俺と母は足取り軽く、村で一番大きな屋敷を探した。

村を半刻程歩いた頃だろうか…ふと、母がその足取りを止めた。

暗闇でよく分からなかったが、何やら少し顔を顰めているような感じもする。

たいてい母がこういった表情になる時は良くない事が起こる前兆な

のだ。それこそ、賊が出たとか、猛獣が出たとか、食糧が底を付いたとか…

「……どうし…た？」

「柚登、気付かねえか？　この村…人の気配が殆どしねぇ…いや、人の気配はするが、何て言うか…獣じみた感じがしやがるぜ」

え”！！？　人が居ないって事は…今夜の宿は！？　飯は！！？
ふかふかとまでは言わないが、せめて屋根がある所で一夜を過ごすスローライフは！！？
母の発言で半ばテンパリながら俺は辺りを見回した。

……そこでふと、遠くの方で夕闇には不釣り合いな黄色い派手な何かが浮かび上がった。
それも、一つや二つでは無い。かなりの数だ。更には何だかこちらに近づいてきている感じもする。
母はゆっくりと臨戦態勢を取った。俺も母に習い同様に臨戦態勢を取る。

何故か何て今迄何度も見てきた集団だからに決まってるじゃんか。
…そう、俺達の前方の集団は間違いなく賊…そしてその頭には先程夕闇に栄えて映った黄色いバンダナが巻かれている。

「…柚登、どうやら並の賊じゃねえみたいだぜ？　あいつ等…賊のくせして陣形なんかとっていやがる」

マジか！？……いや、少し待てよ。黄色の……賊？
少し待ちんしゃいな……確か、ついさっきソレと同じような事を考えていた気がするんだが……って、黄巾！！！！？

おいおい…それってまさか…

「数百人規模か…こりゃあ、俺と柚登の二人じゃあ五分五分って位か？　しかも、なんだぁ、あの悪趣味な旗は？『蒼天已死、黄天富立』？……なぁ柚登、説明頼む」

え、え？いきなりなキラーパスですか！？

えと、えっと……確か…

「……蒼天……漢王朝は死に絶え……黄天…恐らく……奴ら自身が、それに代わるものになる……か…」

確か、こんな意味だったよな？

「な、なんだってーーーー！！！？」

やっぱり、かなりヤバ気な事が書かれているんだよな？

中身が日本人の俺からしてみたら、あんまり危機が迫っている感じはしないけれど、この世界産まれでこの世界育ちの母からしてみたら考えられないことなんだろうな～

「ゆ、ゆゆ柚登がこんなに長く話すなんてぇぇぇーーーー！！！？」

そっちかーーい！！　いや、確かにこれまで長く話す機会なんて無かったけどさ～今現実から目を背けないで～！！

いやいや、それどころじゃないってば！！あの有名なスローガン…更には黄色のバンダナって言えば…

「おうテメェ等…この村のもんじゃねえな？　金目の物…出して貰おうか？」

「そっちの女は上玉だなぁ…可愛がってやるぜぇ」

「男は殺すか？」

この世界で黄巾の乱が始まった瞬間であった……

つーか、何にもしてねえのに俺の死亡フラグ的なものが立った！！？

第三幕　戦乱始まりて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

次は…少し遅くなるかもしれません。

ではでは、感想&ご意見等は気軽に書いていってくださいねぇ～

第四幕　戦って（前書き）

こんにちは、かみかみんです。

今現在３８．７℃の熱に悩まされています。
その所為で今回文章は半分ほどと少なめですが御了承ください。

ではでは、準備ＯＫの方はお進みください～

第四幕　戦って

「ゴルァ！！　テメェ等ァ誰を殺すだってぇ！！！！！」

こんにちは、早速黄巾党に囲まれて正に絶体絶命ピンチな凌統君です。

何でそんなにノンビリしているのかって？　それが、俺もあまりの敵の多さに一時は死を覚悟したんだけれどさ…いや、別にピンチなのは変わらないんだけれど、すっごい気合が入った母が居てね…その引き金となったのが、さっき黄巾党の一人が言った言葉で…

『男は殺すか？』

常日頃から俺の事を溺愛してくれている母にとっては息子を殺すという発言だけでキレてはいけないものがキレるのに十分すぎる言葉だったみたいでして……そんなキレるなら始めっから俺に危ない目をさせなきゃいいのになぁ…

そして、気が付いたら三節棍を両手に装備して母Ｔｕｅｅｅｅｅｅｅｅ！！！！みたいな状態になっているのだ。正に、バーサーク母と言ったところであろうか。

因みに俺は母と同じ様に三節棍片手に持ってはいるが頑張って敵の攻撃を避けている最中だったりする……そういや、何故だか知らないが俺の周りだけ眠さがＭＡＸだった奴が集まっていたみたいで、少し眼を離すと先程まで俺に向かって槍やら小太刀で襲い掛かってきた奴らが地面に寝てんだよなぁ～……不思議だ。

そんなこんなで、確実に賊の数は減らしているが、敵は未だに数百

名…いや、それ以上いる。更にヤバゲな事にさっき見た数百名の賊は先遣隊だったみたいで、数刻たってから何だか徐々に数を増やしてきているんですよねぇ～
普通に考えたら俺達に勝機は……無いことも無い。
逃げようにも、この軍勢で追っかけられたら逃げ切れる筈も無い。
つまり、俺と母が生き残る道はコイツらを全滅させるしかないのです。

始めに言ったが、俺達は勝てないこともないんだ。それこそ、この世界に再び生を受ける際に受け取ったオマケなチート身体能力なら負けはしない。
ただ……あまり目立つような行動をしたくないだけなのだ。

昔からの歴史を紐解いて行くと、何かに跳出した人間程不慮の死を遂げている場合が多いのだ。
三国志で言うと、『孔明の罠』と言う言葉でいう有名な諸葛亮　孔明…彼は戦のさなか病で命を落とした。
また、武で有名な呂布なんかは部下に信用して貰えず、最後の方には戦に連戦連敗…気が付いたら部下が反乱をおこし、縛り首に処された。
自分が彼らの様になるとは到底思っていないが、正直俺は武に生きるよりも普通に暮らして普通に死んでいくのがある意味この世界での目標である。

そのため、常日頃は母から受け継いだ常人離れした身体能力を表に出さないように、母の武に頼りながら生きてきたんだが……今日の敵は数百人規模…しかも、陣形をとっているということは、今迄出会ってきた有象無象集団とは違い、母の突撃だけでは倒せない可能性が……

「――――――――――オラオラオラオラァァァ！！！！！」

……まぁ、何事も例外は存在するという事で。

兎に角、今は考えろ俺！母みたいに突撃して蹴散らせない俺は頭を使って生き残るために最善の方法を考えるんだ。

勿論、この間も俺は三節棍を振り回す事無く四方八方から押し寄せる軍勢を紙一重で回避しまくっている。だが、これをしているのも正直言って辛い。

恐らく、これが今まで相手にしてきた賊ならば余裕とは言わないが、何らかの対処が出来る。

しかし、如何せん中途半端に統制がとれているからやりにくいったらありゃしねぇ～

こりゃあ、覚悟を決めて俺も戦うしかねぇのか？

「柚登、不味いぞ！！」

そんな感じで悩んでいると、賊を蹴散らしまくっている母が凄い剣幕で賊共を吹き飛ばしながら俺の方へと駆け寄ってきた。

「どう……した？」

母が此処までヤバそうな表情をしているという事は、そろそろ限界が近いのか…はたまた、何処か負傷したのかもしれない！

……まぁ、後者の可能性は無傷な母を見たらすぐに吹き飛んだんだが。

「柚登、実はな俺……」

いよいよ深刻そうな顔をしだした母。しかし、そんなさなかでも賊どもを蹴散らす事は忘れておらず三節棍を自在に操っている。
そして、母はこう続けた…

「――――――――――――――――――――――――――――路銀を持ってねぇのに気がついたんだ！！」

……は？

「不味いぜ…金がねぇんだ。これじゃあ賊をぶっ潰した所で宿に泊まれねぇよ～！！」

ＮＡ・ＮＩ・ＷＯ・Ｉ・ＴＴＥ・Ｎ・ＮＯ！？
え、えーーーーー！！？
今この瞬間に心配することじゃ無いよね？
命を削げるような展開の今現在にマネ～の心配する奴なんて普通はいねぇぞ！！
いや、確かに俺の目の前に一人いるかもしれないけれど…

「金は……稼げば…いい」

あ～ここに、『だから、今は逃げるか、賊を蹴散らすかに集中しよう』って続くのに言葉が繋がらねぇ～

「…そうか、つまりはさっさと賊を倒してコイツ等から金を奪えって言いたいんだな！？　よ～し、そうと決まればチャッチャとこの野獣共を蹴散らすぜ柚登！！」

え～……そう解釈しちゃうんですかい？
いや、過程が違うだけで結果は同じかもしんないけれど、何故にそんな物騒な方面に辿り着いちまうんですか？
でもまぁ、母が冷静に戦ってくれれば何とかなる…

「貴様等…俺達をからかってんのか？」

「いや、どっちかと言うとおちょくっているな」

母ぁぁーーーーーーーーーーー！！！！

この時程、言いたいことが言えない自分が恨めしいと思ったのは今までに無かったりする…

――――母

俺と柚登を囲むように現われた賊は有に百超え…
何時もなら余裕に料理できんのによ～…誰が指示を出してんのか知らねえが、やりにくいったらありゃしねぇ～

しかし、そんな焦りとは裏腹に柚登の野郎はそんなの何処吹く風っ

て感じで賊の攻撃を寸前まで引き付けて最小の力で捌いていやがる。
賊共は何らあらがう事なく地面に伏せていく…
これは確か…見切りだったか？これまた教えたこともねぇ技術を使いやがって…
流石は俺の息子だ！
こりゃあ、負けてられねぇぜ！！

俺は柚登みてぇな技術はねぇが、力の限り敵をぶっ飛ばす事は出来る。
さぁて、次に俺に喰われてぇのはどいつだぁぁ！！！！！

そして俺はより一層気合いを入れて賊共に突貫するのであった……
あ、さっき柚登を殺すって言った奴発見！

クケケケケ〜〜！！！！
挽肉にして森にばらまいて蛆虫の餌にしてやるぜーーーーーーー！！

第四幕　戦って（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

以前にも報告しましたが、４月から一気に更新速度が遅くなります。ですが、決して捨てるわけではありません！！宣言します、私は８月に戻ってくる！！

ではでは、かみかみんでしたぁ～

第五幕　援軍きて（前書き）

こんにちはかみかみんです。

遅れて申し訳ありません。中々熱が引かず…今現在４０℃！？

例によって短めでございます。

では、準備ＯＫの方はお進みください。

第五幕　援軍きて

――――公孫贊

私が太守をしている幽州の啄郡内にて最近巷で話題の『黄巾党』が押し寄せてきたと報告が入ってきたのは日が明けてまだ間もない早朝の事であった。

斥候の話では進路上には小さな集落が存在しており、このまま行くと今晩には村に到着するというものだ。

幸い、報告に来た者の機転によりその村の者は退避させたようで最悪の自体は回避出来た。

さて、後はその賊の討伐なんだが…

「おや、向かわぬのですかな？」

私の隣に待機していた露出の多い白い着物を着た客将、趙雲……いや、星が話し掛けてきた。

「いや向かうさ。ただ…」

「ただ…どうされたと？」

軽く口調が皮肉めいた感じがして、少しカチンときたが私はそれをおくびに出さず、続けた。

「あぁ、何だかそれ程不安に思えない自分がいるんだよな…」

「おやおや、太守としては危うい発言ではござらんか？」

ム……確かに太守たるもの人がいないとはいえ、村が襲われるやもしれないという最中にこの発言は不味いものだが、何故か星に言われると腹がたつ。

「…ですが、何故でござろうな…私も白蓮殿の様に不安は感じぬ」

「散々人に言っといてソレかよ」

人には散々いっときながら星も同じ意見なのかよ。

そして星は「ハハハ！」大きく笑いながら続けた。

「それで？白蓮殿はどうされるおつもりかな？」

「んなもん、決まっているだろ？その賊って言うのはズバリ黄巾党、ならばさっさと倒さないと民が平和に暮らせないってな」

私は近兵に出撃の準備をするように申し付けた。

「ならば、私も向かうと致しましょう」

「お？私が頼むときは一蹴するお前が自分から動くなんて珍しいんじゃないか？」

「フフフ…何やら新しい臭いを感じたものですからな」

……相変わらず、何を言っているのか解らない奴だが、まぁ何はともあれ星が付いてきてくれるというのは心強いな。

そうして私は千ほどの兵を連れ、報告があった集落へと急ぐことにした。
そして、そこで私達は出会ってしまったんだ。
他に例を見ないほど型破りな親子を……ただ、その時の私はまだその事を知らなかった……

――――凌統

賊に対等して既に二刻程（約一時間）が経過しただろうか？
未だに賊共はワラワラと増殖中……きっと奴らは、一匹いたら無限に増殖するGの遠い親戚に違いない！
もとは農民が多いかもしれないがきっと家畜ではなくてGだ！
確信は無いが自身を持って言えるぜ！！

……現実逃避はこれ位にしておこう。正直言って、二刻も逃げてばっかというのは疲労が半端なく溜まってしまう。
いや、身体的には余裕なのだが、内部と言いますか…精神的に辛いです。
元一般人現小市民の俺からしてみたら、よく二刻もったと思う位疲れた。

「フハハハハハハ～！我最強也！！」

……まぁ、母については全力でスルーして頂けたら幸いかと存じますが何か？
しかし、いくら母のテンションがバーストストリーム状態とはいえ

限界がある。
これは……俺も本格的に動かないとヤベェんでねぇかな？
いよいよ、俺も覚悟を決めていると…

「ん…何だこの感じ……ッ！！！？　柚登！なんか大所帯が来るぜぇ！」

母が叫んだ。どうやら、まだまだ増えていくみたいだ。
う～む……流石にこれ以上長引かせると母の体力がリミットアウトになるやもしれないし…何より、俺の正常な精神発達の妨げになりまくりな感じだ！

俺は三節棍を持つ力を強めて何時でも本気モードになれる準備をした。
俺が放つ独特の空気に気付いたのか、賊共が俺を中心に少し距離をとり留まる。

本能のレベルで読み取ったのだろう。賊は皆が皆、俺から同じ距離を取っている。
某最強の弟子風に言うのであれば、制空権と言ったところであろうか？
そして、誰か一人でもこの中に人が入ってきたら最後……俺のやる気スイッチがオン状態になることは間違いない。

そのままの態勢で数十秒が経過した。
そろそろ、痺れをきたした賊が突っ込んでくるだろうと踏んでいた俺の期待は……

「柚登見ろ！正規軍がやっとこさ、お見えになったぜ！！」

見事に空気を読まなかった母にゆって銀河の遥か彼方へと吹き飛ばされてしまったのであった…
だけれど、正規軍って事は……良かった～本気出さずに済んだ。

「チッ……野郎共！二手に分かれるぞ！！俺の隊はこのままコイツ等の相手を…」

あ、なんか指示だしている奴を発見！
つまりは、アレが司令塔って訳か？　以外と距離が近いみたいだし早くアレを潰せば戦いやすくなるかも！

直ぐ様そう言う結論に至った俺はリーダーと思われる奴に向かって突撃した。
しかし走りだした瞬間、思いもよらないことが起きてしまったのだ。

――――――――――――――――――――――――――――ズルッ

つい先程まで身体全身に色々と力を籠め過ぎていたため、急に一歩踏み出すことにより足を滑らしてしまったんだ。
そのまま、重力によって傾き始める俺の身体…しか～し！伊達に身体能力が高いわけではないんだ！

俺は足を一歩踏みだして何とか転倒を防ごうとした。しかし、今回のバランスの崩し方は半端無かったらしい。今度は重心が右斜め前方に向かって傾き始めた。
フフフ…だが、このままでは終わらんよ！！
今度は右手を地面につけて転倒を防ぐ。

――――――――――――――シュン…

ん？なんか今耳元で風を斬るような音がした気が……きっと気のせいだろう。
何とか態勢を立て直した俺は再びリーダーと思われる賊に向かおうとしたんだが、何かが足りない。

具体的に言うのであれば、つい先程まで右手に握られていたそれなりに重量がある物体を感じないと言いますか…
俺は恐る恐る右手の方へと視線をずらした。

……その時に気付いたのだ。つい先ほどまで俺の右手にあった筈の物が無くなっているということに……

・・・・・・

…三節棍、どこいったーーーーーーーーー！！？
いやそう言えば、今し方倒れそうになった時にライトな手を地面についたではないか。つまり、三節棍はそこに落ちている！！
自分自身でもウットリするような名推理だぜ…名探偵リョートー君！
やっべ、土曜の五時枠が狙えるんじゃね？
おとと…そんな事よりも三節棍、三節棍と～

俺は視線を右手から地面へとスライドさせた。

……見事にナッスィングな状況に驚愕を感じえないよ…驚いたって事さ。

何故か俺の三節棍は姿を眩ましてしまったのでした。
も、もしかして何時まで経っても武器なのに武器として使わない俺に嫌気がさして無機物ながら一揆を起こしてしまったのかーーーーー！！！

……ハッ！！！？　そ、そう言えば、今俺って黄巾党の皆様方と絶賛死合っているところだったんだよな！！？
や、ヤバイ！武器を無くした俺ってば格好の獲物……
俺は慌てて体勢を立て直したのだが……

「……？　（何故に皆さんそんなおびえた目で俺を見てるんだ？）」

そして、何となしに先程まで俺が立っていた場所をみると……

「……？　（なして、槍が地面ばささっとると！？）」

「柚登ーーーーーーーー！！！！スゲェなお前！　後ろから来る投槍を交わして三節棍ぶん投げて頭（かしら）を仕留めるなんて！」

……何がどうなっているのですか！？

謎が謎を呼ぶ……真実は何時も一つ……なのかな？

以上、名探偵リョートー君レポートでした！

……ごめんなさい、少し現実からエスケープ気取ってました。

だけれど…本当に何が起きたんだろう？

誰が…誰が教えてください！！

第五幕　援軍きて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。
漸く原作キャラ登場…本当なら絡みとかも書く予定だったのですが…力つきました（泣）

次回は病気を治してから書き始めるのでだいぶ先になると思いますが、ご了承ください。

ではでは、かみかみんでしたぁ！！

第六幕　報奨貰いて（前書き）

こんにちはかみかみんです。
何と加熱が引いて親指をフルに動かしました！
それでも短いのはリハビリ的な意味ですので直に長くなっていきます。

ではでは、準備ＯＫの方はお進みください。

第六幕　報奨貰いて

――――趙雲

我等が村に着いたときには粗方終わった後であった。
……いや、この表現は正しくあるまい。
正確に示すとしたら、我等が村に着いた瞬間に黄巾党の一軍を束ねていた輩が討ち取られたのだ。
討ち取ったのは髪を後ろで結った青年…
まだまだ荒削りな方法ではあるが、研けば間違いなく将として開花する…
それ程迄に鮮やかな手並みであった。

まさか、背後から自らを襲わんとする投槍を紙一重で回避したのち、自分の得物を投擲。
恐らく殺された黄巾党の頭は自分の仲間が槍を投げたことに気が付いたのだろう。
その為内心では、あの青年は既に亡き者として扱っていたに違いない。
そしてあの青年は、その敵の満身した隙をついて一瞬でかたをつけた。
……成る程、私も白蓮殿も不安を感じぬ訳だな。

あれほどの手慣れがいるのだからな。

「なぁ、星…」

「なんですかな白蓮殿？」

どうやら、二人揃って見入ってしまっていたようだ。
白蓮殿の声で我に返った私は何食わぬ顔で白蓮殿の問い掛けに答える。

「私らが来る必要ってあったのか？」

ふむ、確かに白蓮殿の言うことも解らないわけではないが…

「どうでしょうな……ですが、あれ程の逸材を見つけることが出来た。…それだけでも来た甲斐があったと言うものではありませぬか？」

「確かに…お？　私等に気が付いたみたいだぞ」

頭が討ち取られたことにより、取り残された数百名の賊は統率を失い、有象無象の集団に成り下がる。
敵前逃亡をはかるもの、無謀にも挑んでくるもの…それらを駆逐するのに差程、時を有することはなかった。

――――――凌統

何とか生き残る事が出来た凌統君です。
なんか感動している母を置いておき、俺は無くしてしまった相棒（と言う名の三節棍）を探し始めた。

・・・・・・・・・

………うん、まぁわりと簡単に発見することは出来ましたよ。
因みに、第一発見者は俺ではなくて黄巾党討伐に来たであろう赤っぽい髪をした女の人だ。

「お前凄いなぁ。この武器頭にめり込んでるぞ？」

……いや、少しどころの驚きではありませんです。
だって考えられますかな？
無くした物が人の頭から生まれ出ている状況なんだぜ？
まるで脳ミソと三節棍が入れ替わったかのように頭から三節棍が生えている…と言うか額から後頭部にかけて貫通している状態だぜ？
下手なB級ホラー映画以上にグロっぽい映像が生中継だぜ？
しかし、流石にそのまま放置しておくには忍びないし…具体的にはさっさと武器を回収したいです。

意を決して俺は黄巾党と頭に刺さっている三節棍に手を伸ばし…

――――――――――――――――――――――――――――ズリュ

生々しい音を響かせながら三節棍を力一杯引いた。
途端、頭部の大穴から勢いよく流れだす血と血ではない灰色に似たような固形物…

……ま、まぁコレが何かと言うことは考えないようにしよう。
ソレよりも今は、この血も滴る三節棍をどうにかしなければ……
……お？良いもん発見～

俺は地面に落ちていた黄色い布を手に取り三節棍を汚している血を拭った。
恐らく、そこら辺で死んでいるか寝ている奴らが頭に巻いていたものだが、今はそんな事お構いなしだぜ！

「フッ…中々度胸がある御武人のようだな…まだそこら中に黄巾党の残党が居る中で奴等の黄巾を血で赤く染め抜くとは…」

そう言いながら何やら露出の多い白い服を着た女性がニヤニヤ意地悪そうな笑みを浮かべて先程の赤毛の女性同様に近づいてきた。

しかしながら、言っている内容が気になる。

えっと…俺は今、奴等の黄巾で血を拭っているわけなんだけど…

……た、確かにそう言われてみれば自分達の掲げている色を血で染め抜くってかなり挑発している感じが…

「チッ…頭がやられた！皆散れーーーーーー！！そして我等、黄巾を侮辱した奴の顔を忘れるなーーーーー！！！！！」

……何か、ヤベェ事になっている！！？

慌てて訂正しようとしたが、時既に遅く黄巾党の大部分が退いていってしまったとさ…マル

な、何だかとんでもねぇ事をしちまった気がするぜ！

「ところで、テメェ等誰だぁ？」

いつの間にか俺の背後に移動していた母が何時もの調子の傍若無人な話し口調で今し方俺に近づいてきた女性に問う。

「ん、あぁスマナイ。私は公孫賛。この地の太守をしている者だ。そしてこっちが客将の…」

「趙雲、字を子龍と申す」

はぁ、どうしよう～黄巾党相手に喧嘩吹っかけちまったよ～……

……あり？　何だか今、俺が黄巾党に喧嘩吹っかけた並みにビックリな事が…具体的には女性の口から意外な名前が飛び出した感じがしたけれど…

「公孫賛に趙雲だな。……よし、覚え……てたら良いなぁ～」

母も聞いていたということは間違いないのだろう。

だけれど……

「って忘れる事前提かよ！？」

「相手に飲まれてますぞ。さて、我等は名乗ったのだ。おぬし等の名をお聞かせ願おうか？」

――――――――――――なんで趙雲が女性なのーーー！！！

…いや、ちょっと待て。確か無双に公孫賛って言うモブキャラも居たよな？

しかも、太守の位置付けで。……つまり、こっちの女性も？

「おう名前だな？……って、どうしたんだ？ボケーーーっとして…悪ぃもんでも食ったか？」

母は一体俺を何だと思って…おとと、いけない。自己紹介の真っ只中だったんだな。

「……いや……俺は……凌…統……」

「…そうか？まぁいっか。さてさて、俺はコイツの母ちゃんだ！！名前は…捨てたからねぇ！」

……なんか今日一日だけで色々と知りすぎていっぱいいっぱいだってのに、また一つ新たな謎が……え？　母って名前捨てていたの？　確かに名前って父と同じで聞いたことは無かったけれど、名無しだったんですか！！？

「まぁあえて言うなら…『雪花』って呼んでくれ」

……母、それは真名ではないのか？

「…それは真名では？」

ほら見ろ、自称趙雲さんも言ってんだろ～

「まぁ今となっては誰もその名じゃあ呼ばねえから気にすんな！」

そんなもんなのかー

「まぁいいか…それじゃあ改めて……我が国にて発生せし黄巾党の討伐、感謝いたします」

って、え～何で急に公孫賛は頭下げて敬語で話すの？
しかも、後ろに控えている兵隊さんは片膝付いているし…唯一立っている俺と母と趙雲さんが変な人みたいじゃね？

「まぁ、気にすんな。俺達は偶々居合わせただけだしよ～」

母の言う通りだった為、俺は軽く首を縦に振った。

「しかしな、それでは色々と示しが付かないんだよな。何か欲しいものとか無いか？」

まぁ、さっき太守って言っていたしな～太守って要は王様みたいなものなんだろ？　やっぱり、恩を受けっぱなしっていうのは不味いんだな。

「そうか？なら…」

「……飯…」

「「……は？」」

あ、やっべ母と被った！
訂正しないと。今回の功績だって殆どが母の活躍によるものなんだし。

……でも、少しくらいは御飯を恵んで頂けたら嬉しいなぁって思ったりする俺はイケナイ子…なんでしょうか？

「――――――ハッハッハ！　開口一番が飯とは…良いではないで

すか白蓮殿！　この御人等には色々と聞きたい事もあるのですから」

いや、訂正しますから！　成るべく母の意見を参考にしてください

な！

「私は全然いいんだが…」

そう言いながら公孫賛さんは母の方を見た。

母よ自分の欲しいものを言うんだ～…でも、少しだけ俺の意見を取

り入れて頂けると嬉しいかなぁ～

そして、渦中の母は…――――――――――――――――俯きながら

肩を震わせていた…

うわ、うわ～無視して俺が先に意見を言ったからキレてんのか！？

やっべ～よ、さっきのバーサーク母になっちまったら止められる自

身なんか無いんですが！！

良い具合にテンパっていると母は口を開いた。

「―――――――――ッッッツ！！　…ハハハハハ！！！　いいな

それ！　よっしゃ、柚登の言うとおり飯を頼むわ～！」

うわ～い、何だかハイテンションな母が再来したぜ…

「まぁ…わかったよ」

「おっと、一言……食料庫に気を付けなよ～」

――――公孫賛

そんなこんなで気が付いたら私のところには客が二人来ている。
あの後私たちは直ぐ様来た道程を戻り城を目指した。
他でもない今回の一件の功労者である二人を招待するためだ。
その最中に二人から……じゃなくて雪花から二人が旅をしている理由を知った。
何でも…『柚登を強くする為だ！』……至極簡単な理由であった。
って言うか、息子の真名をホイホイ他人の前で言っていいものなのか疑問なんだが…
そして、私が雪花から話を聞いている最中星は…

「凌統殿は幾つから母君と旅を？」

「……」

「ふむ…10歳から旅をしていると？」

「――――――――（コクン）」

「おぉ！旅に出てからは賊を討伐しながら暮らしていたと！」

「――――――――（コクン）」

なぜあっちは会話が成立しているんだ？
見た感じ正反対そうな性格なんだが……いや、同じ武人として何か通じるものがあったんだろう……多分。

・
・
・

そして、啄郡に着いた私なんだが、絶賛後悔の嵐に苛みえている。
最後に雪花から聞いた一言をもっと真面目に聞いておけば～！と思ったのは既に過去の出来事だ。

何が起きているのか気になるのか？
あぁ、いいよ。穴が開くまで見てくれよこの状況を！

「ほ～ら柚登、コレも美味いぞ～」

「あいや待たれよ凌統、このメンマも中々のものだ」

「……（コクコクコク）」

凌統がこんな大食漢なんて聞いてないぞーーーーーーーー！！！！

しかも、他の二人は凌統の食べる姿に惚れ込み後から後から追加するなーーーーー！！！

「……美味…い」

「そうかそうか～ほら、俺の肉まんもやるから食え」

「おぉ？　ならば、私の餃子を…」

「二人共いい加減にしてくれーーーーーー！！！」

私にしては珍しく泣きながら怒った日であった…

第六幕　報奨賈いて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

今更ですが、この物語の凌統は正史通りではなく、独自の歴史を歩ませて行く予定です。

…まぁ、根本的に恋姫世界で正史もへったくれも無いんですけどね（笑）

ではでは、かみかみんでしたぁ。

第七幕　雇われて（前書き）

やっとこさ更新…しかし、内容は支離滅裂かも…

それでもＯＫな方はお進みください～

第七幕　雇われて

――――凌統

どうも、何だかタダ飯をご馳走してもらってもらった凌統です。
黄巾党を退けた俺達は公孫賛さんのご好意によりご飯をご馳走してもらうことになったんだ。
…ただ、村から公孫賛さんの居城に行くにはかなりの距離があるので一回野営をしたんだ。

しかも、その時の飯まで都合してくれるから公孫賛さんは優しいなぁ～
ただ、持ってきた食料は限りがあるからと言う事で、腹には微々たる量の食料しか入ることはなく、大分少なくて夜中に腹の虫がオーケストラ状態だったのは言えなかったです。

そして、道中は自称趙雲さんが俺に色々聞いてきた。
と言っても変なことではなくて、何歳から旅をしている？とか、旅の最中どんなことがあったかと言う特別隠す必要の無いことばかり聞いてきた。
俺も彼女の期待に応えようと口足らずながらも頑張って応えた。
そんな様子を見ていた公孫賛さんは何やら納得がいかないような顔をしていたが気のせいだと思いたいです。

そんなこんなで辿り着いたお城～
俺と母は黄巾党討伐の事を色々聞かれたが当たり障り無い答えをした。
流石に黄巾党を伸した後、奴らの金品を奪う計画だったのは伏せて

起きました。
ただ、公孫賛さんの重鎮は俺達の事を黄巾党と疑っていたみたいだが、公孫賛さんと趙雲さんの弁護によりその疑いは晴れたみたいです。

そんなこんなで、宴の準備をして会食という流れになった。
出てきた料理は決して高級品をあしらいまくったような料理ではなくて庶民の俺が見慣れたものばかりではあったが、逆に遠慮なくいただくことが出来た。きっと色々と公孫賛さんが気を利かせてくれたに違いない。
そこで俺は昨日の遅れを取り戻すかのように手加減無用で食べまくった。

それこそ、俺のまわりに『オラ、ワクワクしてきたぞ！』と言っていた銀河系最強の野菜人さん達みたいに食器が山の様に積まれる位食った。
前世ではこんなに食べなかったのに、何やらこの体になってから燃費と言うものがすこぶる悪くなったみたいでギャ〇曽根もビックリな大食漢になっちまったんだよな。
……やっべ、伏せ字の意味ねぇじゃん。

更に母と趙雲さんがやたらめったら俺に美味いものを勧めてくれるもんだから調子にのってしまい当社比１５０％位食った気がする。
公孫賛さんに迷惑を掛けてしまったような感じがしたが、その後…

「気に…うん、気にするな…」

と言ってくれたから救われた気がした。

ただ、何だか公孫賛さんの目が死んだ魚の目に似ていた気がしたのは見なかったことにするのがジェントルの嗜みだと思います。
更には途中…

「食糧庫が…」

って言葉が聞こえた様な気もしたんだが、公孫賛さんの御好意だと思い耳に入ってきた言葉は全て銀河の果てにぶっ飛ばしました。
そんなこんなで一名を除いたメンツは楽しい一時を過ごしていた。
最も途中から半ばやけくそ気味な公孫賛さんも加わったんだけれどね。

「そう言えばお前達親子はどこかに仕官するのか？」

食事の最中、半ば投げ遣りな感じで開き直った公孫賛さんがこんな事を聞いてきた。

元々俺は士官なんてするつもりはない。母の思惑は知らないが、武術と言うものに人生をかけようとは思っていないんだ。

「……ない…」

一応、俺の最大限の言葉を口にしたんだが…伝わったのかな？　多分伝わったよな？　趙雲さんは俺の方を怪訝そうな顔で見ているし…母は若干呆れ気味な顔をしているし…

「ないって……雪花、詳しく頼む」

何故苦笑いしながら母に聞くのですかな！？　今ので理解出来ないの！？　……いや、分からないのも無理無いか…良く考えたら普通の人にこういう風に答えたら何を言っているのかなんてわかるわけねぇか。

これも全部話す機能をほとんど失ってしまった俺の口が悪いんだぁ！！

「そういった事は考えていなかった。って答えてぇんだよ」

キッーーーーーーーー！！　普通にコミュニケーションを取れる母が憎いわーー！！

其処はせめて遺伝しろよーーーーーーー！！！！！

……グスン

「しかしなぁ～柚登も良い歳だからそろそろどっか良い所に仕官させようかと考えてんだよなぁ～

ほら、よくいうじゃねぇか。確か…『逞しい我が子には地獄を見せよ』…だったか？」

…どこを探してもそんな我が子を貶めるような格言は存在しないと凌統君は思うのですが？

「成る程…中々後世の役に立ちそうな格言ですな」

いや、趙雲さんはのらんでいいよ。

って言うか、そんな格言は後世に残っていませんから。俺（中身現代人）が言うんだから間違いない！

「そうだろ、そうだろ～」

母もチョットどや顔するんじゃありません！

つーか、何だか俺が将になる方向で話が勝手に歩きだしている気がするのですが？

残念ながら俺は慎み深くのんびりと前世で生きれなかった分を今世で生きていく予定……ウゥ…誰でもいいから俺の言葉を代弁してーーーー！！

「それなら、私のところに来ないか？」

――――――――――――――――――――Ｗｈａｔ' ｓ！？　一体全体、何危険なことを軽々しく口にしちゃっているんだＹｏ！

そないな言葉、冗談でも母の前で口にしたら…

「そうか？なら…」

ほら～微妙に本気に受け取っちゃって……

って母も俺をそっちのけで話を進めちゃラメェェェェェ！！

「ならば、雪花殿は如何なさるのですかな？」

「俺か？　そうだな……俺は表舞台から去るって決めたからな。なんなら、さっきの村に入れさせてもらおうかな」

母よ、どこまでが冗談でどこまでがマジ話なんですか？
俺にはその真剣過ぎる顔がマジ話として話しているようにしか見えないのですが！？
って言うか、村で暮らすというならば是非とも俺にもその話を一口噛ませて…

・・・・・・・・・・・・

「――――――――――と言うわけで、今日から客将としてうちに来た凌統だ。みんな宜しくしてやってくれ」

「「「――――――ハッ！」」」

――――――――――――あるぇ～？

――――趙雲

凌統が私と同じように白蓮殿の下にて客将として留まる事になった。
何やら本人そっちのけで決まったような気もせぬ事はないが、あれほどの人物と共に矛(ほこ)を取り合えると思うと些細なことではあるかな。

その渦中の凌統は新人としては異例の一軍を任される身になった。
おそらく奴の力量から白蓮殿が割り振ったのだろう。
確かに奴程の武人を一般の兵と同等に扱うことはできない。
しかし、人を纏めるのは力とはまた違った才。
大部分の人間には備わっておらず、一握りの人間にしかない天性のモノ…
さて……凌統、お前にはあるのか？
人を魅せる事が出来る才を…

お前の手並みを拝見させていただこう？
そんな凌統は白蓮殿に任された隊に挨拶へと向かっている。

そこでふと私は思ったんだが……あれほどまで口下手な凌統はいかなる方法で顔合わせをするのか？
我らと顔合わせをした際は凌統の母君である雪花殿が付いていたが
今はこの場に居ない。
あの宴の後…

『んじゃ、後は頼んだ～』

と言って凌統を残してどこかに消えていったのは記憶にも新しい出来事だ。恐らく宴の席でも言っていた黄巾党に襲われていた村にでも赴いたのだろう。

ならば、凌統はいかなる方法で…？　確か白蓮殿は凌統の言いたい事をあまり理解しておらぬようであった。

更に言えばあの場で母君を除いて凌統の言いたい事を何となく理解出来る私は別の所に居る。

・　・
・

・・・

何故だ？　気になる。
一度そう思ってしまうと覆らぬ私の性質か……私は直ぐ様行動に移した。目的は凌統の様子を見る為…
さほど重要そうな事ではないが気になる事柄に小さいも大きいも無い。
私は調錬場へと歩みを向けるのであった。

結果から言おう。

「――――――――――――――――――――――――――――ウォォォォォン（滝涙）」

「俺ぁ…おれぁ……絶対に凌統様に着いて行くぜぇぇぇぇ！！！！」

「凌統様ぁぁぁぁぁ！！！！！」

私が想像していた以上に凄い事になっているようである。……ふむ、何を言ったのか…白蓮殿に聞いてみるとしよう。

――――凌統

再び俺視点ＤＡＺＥ☆！！　……うん、ゴメン。少しテンパっていただけだから気にしないでくれると嬉しいなぁ～

何だか流れに流され過ぎて気が付いたら太平洋に出てしまったヨットレベルに予想外の状態に置かれている凌統君だ。

あの宴の後、気が付いたら母が消えているし…しかも気が付いたら公孫賛さんに兵を任せたとか言われているし…更に言うのであれば調錬場に連れてこられて何やら百弱位の人数が俺の目の前で一従わぬ姿で整列しているし……え？　この人達って俺の部下になる人達なの！！？　色々な意味で早くね？

俺ってまだ死関するとか言ったつもりも無いのに気が付いたら一小隊預かってもいいの！？

「さぁ凌統、何か一言話してやれよ」

何か公孫賛さんに話せと言われるし…俺が口下手なのを知ってのこの所業ですか！？　雇われたつもりはないけれど雇われて早々辞表を書きたい心境だよ！！？

「「「「（――――――――――――――――――――ジ～）」」」」

――――――――――――――――――――――――――――　う…公孫賛さんに話を振られたせいで何か大人数の視線が俺に集中……逃げ……たら不

味いか。
なら、何を言えば良いんだ？　自慢じゃないが、小学校の卒業式なんて唯一俺だけが何も返事をすることなく卒業証書を貰っていたんだぞ？　他の子は『ハイッ！！』と元気な声なのに俺だけ『……』だぜ？　ソレ位口下手な俺にヒト前に出て何をさらせと申すんじゃこの人は！？

「「「……ザワザワザワ」」」

……あぁ、分かってるよ。何かを言わないとおわらねぇんだろこの空気？
明らかにアイツ大丈夫か？みたいな視線が向かって来ている感は否めないけれど何か喋ろうかな。
取りあえずオーソドックスに…

「……凌統……公積…」

「…お前さ、名前と字以外に何か言ったらどうだ？」

う～む…公孫賛さんにダメ出しをされてしまった。流石にコレだけじゃ足りないか。しかし、余りこういった自己紹介と言うものをした事が無いからな…どういった事を言えばいいのかが全くわかんねぇや。
……いや、此処はあえて少し違った…斬新な自己紹介をして俺の新たなキャラを構築するというのも良いかもしれない…ならば！！

「……一つ……死ぬ…な」

「「「……！！？」」」

うんうん、これから黄巾党って言う戦乱の始まりの出来事が起きるんだ。これ位言っておかないと今後起きるであろう事柄に対処できないだろうしね。それに、公孫賛さんって確か黄巾党、董卓といってその後滅ぶんだよな？　だったら、公孫賛さんの軍にはこれ位言っても罰は当たらんよな？

コレだけ言ったんだ。文句はねぇし、もしかしたら『あれ？　アイツって実は良い奴じゃね』程度には思ってくれるかもしれない。

そんな事を思っていると…

「お前…どんだけ、厳しくするつもりだ？」

…何だかその言いぐさは俺が厳しくするという響きに聞こえるんだが…どうして俺がそんな事をしなければならないのだろう？

まぁいいや。どれくらい厳しくって言ったって…

「……自らの…そして……家族…を……護り…きれる…まで」

「「「――――――――――――――――ッ！！！！！」」」

な、何だぁ！？　今度は息を呑むような音が聞こえたんだが…それも、一つや二つではなくて大量に。

一方、俺の答えを聞いた公孫賛さんも何か驚いた顔をしているし…

俺、何か変な事を言ったか？

確か軍ってのは人を護るのが主なんだろ？　だったら何も変な事は言っていない気がするんだが。

寧ろ、自分の家族を優先的に護ってほしい。俺はこんな時代だからこそ、俺は敢えてそういう事を言ったんだが……やっぱり軍属の人間にはこういうのって禁忌なのかな？

だったら、不味い事を言ったかも知んないな。　も、もしかして風紀を乱すとして俺の首チョンパってことも…！！？

「……そうか、まぁ頑張れよ」

あ、首チョンパは無いみたい。…よかった、マジで良かった！！
そう言って公孫賛さんは調錬場から姿を消した。…あれ？首チョンパは無くなったけれど俺ってば何か気に障る事言ったか？
……いや、言って無いよな。なら何故？
俺は去っていく公孫賛さんへと視線を向けたが彼女が居なくなった答えは出てこなかった。
仕方なしに俺は任された隊へと再び目を向けると……

「――――――――――――――――――――ウォォォォォン（滝涙）」

「俺ぁ…おれぁ……絶対に凌統様に着いて行くぜぇぇぇぇ！！！！！」

「凌統様ぁぁぁぁぁ！！！！！」

……何これ、怖い。

何やら号泣している隊員達の姿があったとさ。……一体何が起こった！？

第七幕　雇われて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。
恐らく次話からは1週間に1度更新出来たら良いなと言うレベルの更新速度になります。寧ろ、更新出来ない事もあると思います。
7月終わりまではその速度で行くのでご了承くださいませ。
ではでは、かみかみんでしたぁ～

第八幕　任されて（前書き）

何とか更新第８話…かなり時間が空いちゃいましたねぇ（汗）
恐らく次の話はもっと遅くなること請け合いです。

おっと、そういえばＰＣのみですが、ｗｅｂ拍手を設置してみました。一応半年以上前にマウスオンリーで描いた絵を貼ってみましたので興味があれば押していってくださいな～
絵は……見ていただければわかる…かな？

ではでは、準備ＯＫの方はお進みください～

第八幕　任されて

――――公孫賛

凌統は変な奴だ。まだ出会って一日も経っていないがこれだけは自信を持って言える。
初めて見たときは凄い強そうな奴という印象だったが……いや、今でもまだその印象は生きているんだが…

昨日色々とあって凌統が客将として私のところの軍に入ることになったんだ。
そこで、凌統の本質を知るために軍を任せたんだ。しかし奴の顔合わせをさせた時に…

「……一つ……死ぬ…な」

まさか、凌統の口からこんな言葉が出てくるとは思わなかった。
今の世の中兵に志願する奴らは限られている。家族がいるのに仕事が無いもの、訳合って家を継げない者、元盗賊…
挙げたらキリがない程訳ありな奴が揃った集団…だが、一様に言えるのは命を半ば捨てている奴のたまり場…ソレが軍にいる奴の現状だ。中には心から国を救いたいと思う奴もいる。だが、それはほんの一握りの連中だ。
更に無理矢理徴兵された奴もいる事だろう。
自ら死を望む訳ではないのに死ぬ可能性が一番高い軍に…

しかし凌統は、そんな奴らに死ぬなと言った。
国の為に命を投げうって戦に殉じる…それが今の世の将足る者の常識だ。

そしてソレを部下である兵達に押し付けるのも将…

そんな世の中で放った将である筈の凌統の死ぬなと言う一言…

勿論兵達は呆気に取られている。

かくゆう私もなんだがな。

…いや待て。この凌統と言う男はそこまで人に対して無責任な言葉を吐くか？

『死ぬな』一見、兵達の身を案じているような言葉だが、つまりは凌統自身部下を助けるつもりはないと言う意味に聞こえる。

俺は手を出さない…だから死ぬんじゃない。

とらえ方によっては有り得ないくらい無責任発言だ。だが、短い間とはいえコイツの人となりは何となく理解した。雪花と旅をした数年間、コイツは見ず知らずの民の為に身を擲って賊の討伐をしていたという。それ程までに人の為に何かをなそうとしている人間がそんな意味でこの発言をしている筈が無い。

つまり凌統は戦以外の面で死ぬなと言っているんじゃないのか？

そう、例えば……調練か！

そうか、調練で厳しくするから死ぬなと言いたいんだな？って…

「お前…どんだけ、厳しくするつもりだ？」

そして、次の言葉で私の考えは間違っていないことが証明され、凌統の真なる想いを垣間見た。

「……自らを…そして……家族…を……護り…きれる…まで」

……成程な。やはりコイツに軍を与えたのは正解だったかもしれな

いな。重鎮達からは客将に兵を与えるとは何事かと詰め寄られたが無理を押し通した甲斐があったもんだ。
兵達の息を呑む音が聞こえた。無理もない、本当に自分達を想ってくれる発言を凌統はしたのだ。
兵達の心を射たない訳が無い。

私は凌統のその言葉を聞いてから直ぐに調錬場を後にした。
別に他意は無い。ただ、敢えて理由を付けるのであれば私はあそこに居るべきではないと思ったからだ。
こんな私でも一応太守の身だ。凌統の考えは凄い事だと思うが、明らかに国よりも兵の身を案じている凌統の全てを肯定してはいけない立場の人間でもある。

調錬場を出て直ぐに後ろからまるで勝鬨でも挙げているような怒号が響き渡った。

「ふむ…中々面白い事になっているようですな」

未だ喧騒が納まらぬうちに聞き馴れた皮肉めいた口調の女の声が聞こえてきた。…まぁ誰かなんて聞く必要は無い。だってコイツは…

「何だ？盗み聞きか星？」

少しあきれたような口調で私は調錬場から少し離れた壁に腕を組みながらもたれ掛かっている星に声をかけた。
星は何時ものように何を考えているのか分からないような微笑を作り目を閉じている。

まぁ、聞く迄もなく凌統の様子を見に来たんだろうが…何か大事な

場所が捻くれている星はまともに答えないだろう。
そして私の問いに答えようと星は瞼をゆっくりと開いた。

「ふっ…人聞きが悪いですな白蓮殿。あの場に向かうと言うそんな無粋な事…白蓮殿でもない限り無理であろう？」

「イキナリ厭味かよ！？　ったく、へいへいどうせ私は空気が読めない女ですよ」

何だか星に会うたびにからかわれている気がするな。
それよか、私を山車にしたな…何だか疲れが増してきた…今日はもう寝たい。

「おや、今頃気がつかれたのですかな？」

「冗談じゃなくて本音かよ！？」

「何をおっしゃいます白蓮殿、私は何時も本当の事しか申しませんぞ？」

うっわ、欝陶しいなコイツ！？

――――凌統

やぁ、凌統だよ。気軽にユートと呼んでくれ。……何故だ？何処ぞのファンタシースターな部族の少年を想起させるんだが…まぁ、そんな事はどうでもいいかな。
何か知らないが兵達がみんな一斉にメダパニを食らった後、俺は一

人で公孫賛さんの下を訪ねた。
なんて事はない。只、前世ではバリバリな一般人の俺。更には何の因果か知らないが三国志に産まれでた俺。
前者では争いのない平和な世の中を過ごしてきた俺…後者では根本的に母以外と話した事が無い俺。
つまり何が言いたいのかと言うと……

――――――――――――――――――――兵ってどうやって纏めれば良いんですか？

ってな訳よ。…ふふ、根本的だと思わないかい？　ゴクゴク小市民の俺に兵を渡すなんて根本的過ぎると思わないかい？
……………どうすればいいのよ俺！？　ってな状況だぜ？『ライフカード』なんて横文字、この時代じゃ通用しないんだぜ？

…少し鬱な凌統です、凌統です…りょうとうです……りょーとです
…………ハッ！？　何か化石化した芸人みたいだった！？
…ん？　何だか話が２７０度くらい変化している気がする。えっとえと………おぉ！！そうだった、公孫賛さんの所に行って『Ｈｅｙってどう纏めれば良いんだＹｏ！！』って聞に行く所だった。
……あり？　なんか違う気が……まぁいいかな。

・・・・・・・・

～会議室～

そんなこんなで着きました会議室。…しかし、今俺は何だか変な状況に巻き込まれている。

いや、特に俺に不利益な事では無い。　…いや、特に得する事でもないんだけれど。

ソレは何かって？　えっとな……

「凌統、私の真名を預かってくれ。私は白蓮、よろしくな！」

「ならば私の真名も…私は星と言う。よろしく頼むぞ凌統？」

……世界の中心で疑問を叫びたい凌統です。

そんなこんなで済し崩し的に真名を交換してしまった凌統君だが……あり？　確か何かを聞こうと思っていた気がするんだが……まぁ思い出せないのならどうでもいい事なんだと思いたい今日この頃です。

「……右翼……左翼…前…進……鶴翼の…陣……形」

そして気がつけば何故か俺は城下町から懸け離れた荒野にて演習の

フリをしていたりする。
俺の小さな声に反応して兵士さん達が左右に広がり陣形を組む。
…言っている意味がわかるか？少なくとも俺自信は理解不能な状態だぜ？
因みにどんな事をしているかというと、取り敢えずは兵士さん達の動き、更に陣形の確認をしているところだ。

陣形の勉強は前もって母から教わっていたからなんちゃって指揮は出来るけれど…これは俺には向いていないな。
コンマ一秒くらいで理解した。

だって喋らないといけないんだぜ？
何百人と居る兵士さん達全員に聞こえないといけないんだぜ？
そもそも、この時代には拡声器と言う便利道具が無いんだぜ？

……外面無口な俺にどうしろと？

そっこーで指揮は副長に任せましたが何か？

（――――――――――――――――――――ブルル…）

やっべ、少しもよおしてきたかも…急に俺を体全身が冷水に付けられたかのようあ独特の寒気が襲う。
こりゃあ、少し興奮していて気がつかなかったみたいだ。我慢は…出来そうにねぇな。

如何やら指揮系統なんていう緊張しまくりんぐな状況な為に自分の尿意に気がつかなかったみたいだ。
そう言えば聞いた事がある。何か興奮したり緊張したりすると尿意

が遠ざかっていくって。
成程ナルヘソ、自分でも気付かない内にハイな気分になっていたのか……あ、もう無理ぽ…

「先……戻れ」

ちょっと廁に行きたいから先に返ってください～
俺は近くにいた副長さんに指示を出した。

「いえ、ですが…」

しかし、其処は仕事に真面目な副長さん。やはり、隊長（俺）を残して帰る事は出来ないってか！？
クッソ～！！　副長って言うのは何でこうも御堅いキャラが多いんでしょうね！？
寧ろ鬼だよね鬼！　あれだぜ？新撰組とかいい例だとかおも……あ、無理。こうなったらみんな一緒に……

いやいや、流石に俺の所用にこんな大所帯を引きつれたかぁねぇっての！
ウッ……かなりヤバイっぽいぞ俺の膀胱！

「……二度は…言わん……帰れ」

「――――――――――――ッ！！？　りょ、了解いたしました！！」

やっと納得してくれたぁ！更にどうやらあの焦った表情から俺がも

よおした事を察してくれたみたいだ。
帰ったらお礼を言っておこう。
副長は慌てて陣形を立て直し、隊を引きつれて戻っていった。さて俺は……
・・・・・・
しばらくお待ちください
・・・・・・
ふぅ、危なかったぜ。後少しというところで大人ながら地べたに世界地図を描いちまうところだった。
未曾有の危機を脱した俺は意気揚々と啄郡目指して帰還しようとした。
しかし、腰に刺さった三節棍は副長さんに持っていってもらえばよかったな。邪魔で仕方がなかった。ついつい何時も刺さっている所為で忘れていたんだがマジで邪魔くさかった。
…何の時に邪魔だったかを言わないのが大人のマナーこれｊｋ

そんな事を思いながら三節棍を腰から外して何となしに振り回してみる俺。
端から見たら相当ヤバイ人だとは自覚しているが、別に今の時代こんな所を歩くような人なんて……

――――――――――――――――――――スポッ…ヒュウゥゥゥン

……あ、すっぽ抜けた…じゃなくてなんかデジャブな出来事が再来ーーーー！！？
いや、振り回していた俺が悪いんだけれどさ、まさか三節棍が手から離れて回転しながら空高くへと飛んでいくなんて思わないじゃん普通。
まぁ、前方だったり後方だったりしないから人に当たる事はないだろうけど。

それに、さっきも言ったがただでさえ物騒な世の中で人通りが乏しいのだ。
こんな状況下で俺がぶん投げた三節棍が当たるなんて相当運が無い奴以外……

『『『――――――――――――――――――――ぎゃ！！？？』』』

……どうやら居たみたいだ。しかも……三人も！！？

だ、大丈夫か！？　一応ギャグみたいなノリだけれど、このノリで何人も葬ってきた俺だが（誤字非ず）また犠牲者を増やす結果になっちまったのか！？　つーか何で三節棍みたいな細長い物で三人分の悲鳴が聞こえるんですか！？

…いや、もしかしたら三節棍は回転しながら飛んで行ったんだ。まさかまさかとは思うけれど……偶々三節棍が横になった瞬間に当たったとしたら……うっわ…どんだけ運が悪い…いや、ちょっと待てよ。

もし当たったのが一般人だとしたら……

『一般人を間違って殺すなんて以ての外だぞ柚登！』

『クッ…まさか、我が槍で同僚を討たねばならんとはな…しかし、亡くなった民の為、その血を持って償え柚登！』

……うわ、うわ～…

絶賛ピンチな俺！！？　頼むから生きていてくださいよ、名も知らぬ被害者さん' s～！

そして俺は三節棍が飛んでいき、尚且つかなりヤバ気な悲鳴が聞こえた現場へと歩を進めるのであった。

――――副長

凌統様の下につき初めての任務は凌統隊の陣形諸々を確認するための演習であった。

今の世、我等一般兵の事を気に掛けてくださる方は少ない。兵とは替わりが効く、捨て駒……恐らくソレが共通の認識だ。
しかし、我等凌統隊を治める凌統様はソレを根本的に覆す発言をなさった。

『――――――――――死ぬな』

それが凌統様が我等に向けて初めて放った言葉だ。
その瞬間私は悟った…

あぁ…この方こそが私の一生涯の主なのだと。
同性の凌統様に向けて正しい言葉なのかは不明だが、一目惚れというものに近いかもしれない。
そして私同様に魄で感じ取った者は少なくなかった。

『――――――――――――――――――――ウォォォォォ！！』

少なくとも私を含めた過半数の者達が凌統様の御言葉に歓喜していた。
残りの一部の者は凌統様の真意を伺っているようだが、それは凌統様の下にいる時間が解決してくれるであろう、そう感じた。

「……右翼……左翼…前…進……鶴翼の…陣……形」

そして今現在、私の前で凌統様がその采配を振るっている。
決して大きな声では無いのに皆に響き渡るその澄んだ声…意識され

ているわけでは決してないだろうに…やはり、凌統様は人の上に立つお方だ。
勿論兵達も凌統様のご期待にお応えし様といつも以上に張り切っているのが肌で感じ取れる。
その様子を只黙って見つめる凌統様。

しかし何処か不満気な御様子だ。……何故？　いや、しかし凌統様には何等かの御不満があるのだ。
きっと我等では計り知れない何か譲れないモノがあるのだろう。
そして、凌統様が口を開いた。

「……副長……兵達を……任せる」

一体何を言ったのかが理解出来なかった。　『兵達を任せる』？
そう凌統様は仰った。
しかし、何故今更？　私は凌統様の真意を計りしれないでいた。

そして凌統様は矢継ぎ早に更なる支持を我等にだしたのだ。

「先……戻れ」

どういう事だ？軍の指揮を私に任せ、先に啄郡に帰還しろなどと…凌統様には考えが御有りなのだろうが、当然のごとく一軍を任された将は自分本位に動いてはならない。
私は凌統様に対してその様に進言しようとした。しかし……

「……二度は…言わん……帰れ」

今まで感じたことが無いような強大な殺気を私に向かって放ったの

だった。
恐らくこれが一騎当千の将足る一握りの人物が放つことを許された本物の殺気…
まごうことなきソレは一般兵である我等の本能に語り掛けてきた。

『従わなければ……明日はない』

凌統様の指示通り私は兵達を纏めて啄郡に帰還すると言う選択肢以外残されてはいなかった。
しかし私は凌統様に対して失望はしない、落胆もしない。
何故ならあの御方は……

「我等の光なのだからな…」

小さな呟きが風に乗り消えていく……その後、私達よりも随分遅く、そして私が想像していた以上の成果を手に凌統様は帰還された。
だが、この時の私はそのような事は考えもつかなかった。

第九幕　出会いきたりて（前書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは。かみかみんです。

漸く書き上げました９話…大分遅くなってしまい申し訳ございません。

恐らく次回は５月の最後の方かと思うのでご了承ください。

ではでは、準備ＯＫの方はお進みください～

第九幕　出会いきたりて

――――関羽

私が旅をしている理由は二つある。
一つはこの戦乱の世を終わらせる事。もう一つはとある御方のお側に仕え、何時如何なるときもその御方と共にいるということ。

その御方は慈悲深く、この混沌とした世を糾すために立ち上がった御人…
皆から愛され、皆を愛する私が敬愛してやもない人である。
旅の仲間はその御方と私の義妹である少女。
コイツは破天荒で良くいえば場の空気を盛り上げ、悪くいえば厄介事を運んでくる少女だ。しかし、何だかんだ言いながら手に掛かる子ほど可愛らしいというように、ソレすらも私の日常になりつつある。

さて、話は変わるが私達は今かなりの規模をほこる賊共に取り囲まれている。
何ら不思議な出来事ではない。今の世、女三人で旅をしていて賊に絡まれないなんて甘い考えは生憎と持っていない。
何時もなら私と私の義理の妹が何とかするのだが…

「あ、愛紗ちゃん…何だか規模が大きすぎない？」

「心配ありません。桃香様は私と…」

「鈴々が護るから心配しなくていいのだ！」

いつ現われたのか？という程、突然こいつ等は現われた。
皆一様に頭部に黄巾を巻き、賊だというのに妙に統率された動きで数千人規模で…

恐らくこいつ等が今の世を乱している黄巾党…成る程、確かに一介の賊とは訳が違うな。
一人一人の武はなっておらず有象無象の集団のような奴らだが妙な統率が取れている。
そこら辺にいる盗賊はただ突撃する事しか能が無い連中だが、こいつ等は我等一人一人を分断させるように動いている。
だがしかし、幾ら統率が取れていようとも所詮は人の道から外れた外道共。陣形の形成は甘く、未だ我等三人をその場から動かせていないでいる。

その事に鈴々も気が付いているようだ。なるべく私と桃香様から離れないようにしている。桃香様を護りながら戦うという不利な状況下ではあるが、私と鈴々が居れば可能だと思っていた。

しかし、そんな慢心した私の心が何処かに隙を創ってしまったみたいだ。

「愛紗、不味いのだ！　何だか崖に追い込まれている！！」

…チッ！油断しすぎてしまったようだ。気が付いたら我等は桃香様を後ろに崖の下へと追い詰められてしまっていたのだ。前方には数千人規模の黄巾党の軍勢…背後には聳え立つ絶壁の崖…

恐らく、この状態で戦った場合数で押し切られてしまう。幾ら我等の武が奴等よりも高かろうがこの状態はいただけない。数で押し切られたら最後、青龍偃月刀も鈴々の丈八蛇矛も振るう事敵わないであろう。

この状況下で既に勝利を確信したのであろう。目の前の男共は下劣な笑みを浮かべながら一歩、また一歩と我らとの距離を縮めてきている。

この後に我等に降りかかるであろう事を思うと背筋が凍りつくような思いとなった。だが、しかし…

「だ、大丈夫だよ二人とも…コレだけの人なんだもん。きっと正規軍だって近くに来ている筈…」

そんな我等に桃香様は健気にも励まそうとしてくださっている。確かにコレだけの規模であるならば桃香様の言うとおり正規軍が動いていても可笑しくは無い筈だ。しかし、今すぐに我等が追い込まれているこの崖に駆け付けてくれるなどという都合の良い話は残念ながら皆無に等しい。

つまり、この場は我等でどうにかしなければいけないのだ。

――――――――――――ジャリ…

そんな折り、黄巾党の軍勢の中から三人の男が前に出てきた。
恐らく降伏勧告であろう。しかし、我等はそんな脅しに屈することは……

――――――――――――グシャリ…

『――――――――――――ギャアアアアアア！！！！』

その瞬間、私は自分の眼を疑った。隣にいた鈴々と桃香様の息を飲む音が聞こえた。
二人もまた、私と同じような心境に陥ったに違いない。

まさに一瞬の出来事であった。
我等の前に出てきた三人の男…しかし、私は奴らの声を聞くことはなかった。
何故なら……

奴らの頭は一瞬の内に吹き飛んだのだから…余波を食らったのだろう。三人の後ろにいた男共の汚い悲鳴が辺りに響き渡った。

――――――――――――――――――な、何が起こったというのだ！？
言い知れぬ不安と恐怖が私の動きを鈍くする。
決して自らの身に降り掛かろうとしている明確な『死』に恐怖しているのではない。

……横目で共に旅をしてきた義妹と主の姿を見た。

喩え私はどうなっても、この二人だけは…

堰月刀を握り締める力が無意識のうちに強くなっていた。
そして、始めに動いたのは……以外にも黄巾党の中の者だった。

「お、おい…この三節棍は……まさか！！？」

「あ、あん時の化け物か！？」

「に、逃げろぉぉ！！喰われちまう！！！」

――――――――――三節棍？化け物？

奴らは何を言っているのだろう？
何かを見て蜘蛛の巣状に撤退し始める一部の輩。ふと地面に目を向けると、私達の近くに真っ赤に濡れた棒に鎖が付いたナニカが地面に突き刺さっている。

そして、逃げ出す黄巾党の顔は悪鬼羅刹を見たような恐怖に支配されている。
いったい何が……？

「あ、あああああ愛紗ちゃん！う、上～～～～！！」

そんな折り、私の背で身を隠していた桃香様が悲鳴とも取れる声で私に何かを訴えている。

――――――――――上？

私は反射的に頭上を見上げた。思えば、敵を目の前にして何たる無謀な行為だと思ったが、桃香様の尋常ではない御様子…確実に何かが…

そんな私の読みは良い意味で叶うこととなった。
始めは私の眼に何ら異変は映し出されなかった。しかし、直ぐに…

「……鳥？…いや、あれは…――――――――――――――ッ！！！？　人か！！？」

只何も無い状態でそびえ立っていると思えた断崖絶壁の崖…其処に突如として現れた黒い影を私は始め鳥かと思った。しかし、ソレは徐々に人の形を織り成していき…私に『人が飛び降りた』という事実をまごう事無き真実を伝えた。

「な、何を馬鹿な事を！！？この高さから飛び降りるなどと…自害するつもりか！？」

誰だかわからぬが崖から飛び降りるなどと愚の骨頂である。そんな事をしたらどうなるのか等は子供でも理解できる。
勿論、始めに発見した桃香様をはじめ、私と鈴々は既に飛び降りた人物は死んだものと思った。

……しかし、この時私は確認するべきだったんだ。
黄巾党の極一部の者が私達と同じように崖上を見つめていた事を。
そして……

――――――――――その眼が先程、逃げ出した黄巾党と同じく恐怖に支配されていた事を…

次の瞬間…

――――――――――――――――――スガァァァァァァァァアアアアン！！！！！

耳を貫かんばかりに響き渡る轟音と共に…

「――――――――――――――――――――な、なぁ！！？」

「人が吹っ飛んだのだ！」

我等の前に対峙していた黄巾党のうち前衛にいた数十人が…紙屑のように……まるで投石器が放った岩が直撃したかのように…吹き飛んだのだから…辺りを砂塵が覆い隠して飛び降りた者の安否は確認出来ない

「ふ、二人とも！中に人影があるよ！？」

桃香様の悲鳴にも似た声によって現実に引き戻された私は慌てて砂塵の中心へと視線を移動させた。

砂塵により塞がれていた其処には私の常識を疑うような光景が……

……

「……無事……か？」

広がっていた……これが私達と凌統との出会いであった。

――――凌統

走る～走る～ゆぅとぉ～くん♪
流れる汗もそのま～ま～に～

やぁ、爆風で不調に陥ってしまった方達の歌を脳内ＢＧＭに変換して久々に全力走者をしている凌統君だ。
またもや俺のポカにより三節棍の犠牲者を増やしてしまうという正に絶体絶命で崖っ淵に立たされている。
まぁ、自業自得と言われたらそれ迄なんですがね。
こんな事なら先に帰ってもらった副長さんに三節棍を預かって（以下ｒｙ

そんなこんなで俺は三節棍が直撃してしまったと思われる三人の人物を目指して全速で地を駆けている。

しかしあれだね。吹っ飛んでいった三節棍は相当の勢いがあったんだろうね。
悲鳴が聞こえたほうに向かっても未だに人の姿を確認できないんだよ。

もうマジでヤバいよね？最悪な状況になっていたら、入って早々ながら公そ…じゃなかった。白蓮さんの所から『あばよとっつぁん』みたく逃げ出さないといけない状況だよね？

…よし、鬱っちまうな話を変えよう。…しかしながら、凄いよな微妙にチート気味なこの身体。明らかに馬より速く走っているんだぜ？前世の俺からしてみたら有り得なさすぎなスピードだぜ？

人間は追い詰められると火事場の馬鹿力が発揮されると聞いたことがあるけれど、今の俺は間違いなくそれだね。
べ、別に額に『肉』って書く気なんてないんだからね！！　牛丼，カルビ丼は好きだけれど？世になる気なんて無いんだからね！！
……色々と変なテンパり具合な凌統君です。

さてさて、そんな事を言っている今現在でも俺はこの世界に生まれ落ちて今まで感じたことが無いような感覚を味わっているわけよ。何ていうのかな…そう、まるで飛んでいるような感覚になるくらいだ。
凄いよな、脚に全く負担が掛かっていない感じなんだよ。『あ～い・きゃ～ん・ふら～い！』って言いたくなるもんな。……何でだろう？　誰かが『いぇ～す！ゆ～・きゃ～ん・ふら～い！！』って言った気がする。

……疲れているわけでも、頭がおかしくなった訳でもないから悪しからず。

しかしながら、必死になるとここ迄の力が出せるんだな俺の身体…

………………だけれど何でだろう？　さっきから景色が殆ど変わっていないような…更には何だか、下から下から新しい世界が開拓されるかのような…簡単に言えばフリーフォールに乗っている感…か…く……が…………ん？フリー……って、俺の身体何か知らんが落ちてねぇか！！？

気付いたときには既に手遅れとはよく言ったものだと思う。

俺の身体は既にかなり落ちていたみたいで…ってか、崖から落ちたのね俺の身体？

崖っ淵に立たされている状況だとは思っていたけれど、まさか本当に崖からロープレスバンジーを決め込むとは……冷静に考えている場合じゃねぇぇぇぇぇ！！！！

ふと、俺は自分がこのまま落下した場合の着地地点を見てみた。

・・・・・・・・

うわぁ～い。黄色い団体さんのお通りだぁ～……………………………

え”！！？

アレってもしかしなくても黄巾党の軍勢だったりしちゃう感じですか！！？……ま、不味い…ひじょ～に不味い！！

何が不味いかを口で言えない位、不味い！！

更にはこのまま行くと俺の体は地面とごっつんこでぺちゃんこでも

っと不味い！！！！

ど、どうすればいいの俺！！？　……いや、少し考えろ俺。仮にも見た目は無双さんの凌統と同じなんだ。だったら、空中→＋強攻撃で地面の敵をある程度一掃出来て、尚且つ自分にダメージを与えることなく着地が出来るんじゃないのでしょうか！！

良い感じでテンパっていて三節棍を持っていないとかそういう条件を全く無視していた俺は即座に行動に移した。

武器が無いので取りあえずは自分の足を武器代わりにして、踵落としの要領で地面へ向かうスピードをアップさせた俺。そこで、ふと黄色い布をかぶっていない3人組の女の子が視界に入ってきたんだ。しかも、その傍にあるのって……俺の三節棍！！！？

って言う事は何かい？　三節棍ってあの3人に当たったの！！！？

うわ、うわ～！！？　生きているから良いものの、よりにもよって女の子に当たるなんて最悪すぎやしませんかい！？　しかも、黄巾党に囲まれている状況なんて……あれ？でも、聞こえてきたのは男の声だったような……いや、きっと俺の聞き間違いだろう！

取りあえず、あの女の子達の無事を確かめて、謝罪の意味を込めて黄巾党さん達にはご退場願いましょう。

そんでそんで……慰謝料とかって幾らくらいが相場なんだろう？

――――――――――――――――――――――――――ズガァァァァァァァン！！！

特に黄巾党とは関係ない事を考えながら俺は地面に大穴をあけて着地した。

その時、砂塵が辺り一面に立ち視界が全く無くなってしまったのは予想外だったけれどね。

そして、徐々に砂塵が消えていき俺は…

「…………………無事……か？」

取りあえずは最優先事項である３人の女の子の安否確認をした。

『………』

あ、あれ？何だか滑った感が否めないような…しかも、この子達ケガらしいケガはしていないし…

寧ろ、気になるのは………

この地面にめり込んでいる真っ赤なインクを塗り手繰ったような毒々しいながらも、どこか懐かしい武器と…

地面に倒れこんでいる頭の無い人の身体といいますか…簡単に言えば、何処の首無しライダーに襲われたのだろうか？と言うくらいグロ系満載の黄巾党の服を着ている胴体…

つまるところ……俺の三節棍は敵サンセンサーを搭載しているハイテク型ということでいいのでしょうか？

――――――――　うん、現実逃避は良くないね。

取り敢えず今やらないといけないことは…

「この間の雪辱戦だ！野郎共やっちまえ！！」

一にも先にも変わらず黄巾党の戦滅だったりするんだよなぁ～

第十幕　誘われて（前書き）

お久しぶりなかみかみんです！！
始めに…一ヶ月も間を置いてしまってスミマセンでしたぁぁ！！
そして、今話はコレと言ってオチらしいオチがありません。

それでも見て頂ける猛者の方はお進みください～

第十幕　誘われて

――――凌統

やぁ、何だか最近小市民生活とは程遠い日常を送っている凌統だよ。
三節棍に導かれて辿り着いたのは数千にも昇る黄巾党の軍勢…そして、血塗れな相棒（三節棍）と、その傍にいた三人の少女。
取り敢えず優先順位をつけるとしたら…

――――――――――ズボッ…

未だ地面から頭しか出していない三節棍を引っ込抜いてみた。
かなり深くまで刺さっていたのだろう。抜いた三節棍は血やら泥やらに塗れている。
…簡単に言うと、酷く汚い状態だ。

そんな時、ふと地面に眼を向けると、俺の足元にどこかで見たような黄色い布が…
恐らく、黄巾の奴が巻いていたモノだろう。まぁ、これでいいかな。
そのように結論づけた俺は何の迷いもなく黄巾を拾い上げた。

『――――――――――――――ッ！！？』

な、なんだ？何かしらんけれど、周りの人達が息を呑む音が俺の所まで聞こえてきたんだが…
しかも、黄巾党＋その場にいた少女達もなんて…

俺は何もしていないよ～
ほら、ただこの布で三節棍に付いた血やら泥やらを拭っているだけだよ～

そんな感じで俺は何も疾しい事はしていない事をアピールしながら黄巾で三節棍に付いた汚れを拭いさった。
途端に赤茶色に染まった黄巾…そして、三節棍に付いた粗方の汚れを取った俺は何もしない事を強調しながら黄巾を手から離した。
重力を受けて血を吸い込み、少し重くなった黄巾は一直線に地面に音もなく落ちた。

……あり？そう言えば、何だか同じような事をつい最近やった気が…
何時だったな…？確か、本当に最近の出来事だったんだよな……そう、確かアレは…

「――――――な、なんと！桃香様、もしやこの者は、最近噂に流れ出ている各地の村で賊を一掃しながら旅をしている者では！？」
「鈴々もこの前、ラーメン屋のおっちゃんに聞いたのだ。えっと…賊をやっつけてもお金は取らないで一晩泊まっていくだけなんだって！」
「わ、私も聞いたことがあるよ！確か…黄巾党と戦った後はその人達の黄巾で武器に付いた血を拭っているって…」
…何その噂？　俺の記憶が正しければ、黄巾で血を拭ったのは今や

ったのを含めて二回目だし。
いや、確かに日々金欠だった俺と母は泊めてもらう代わりに賊の討伐をしていただけだから。

どこをどう回り回ったら、そんな厄介な噂が立つのかが知りたいですよ。
……あり？そういや前回、黄巾で血を拭った時ってかなり面倒臭い事に巻き込まれたような……そう、具体的に言うのであれば今と同じ事をしていたときに…

「我等の象徴である黄巾を血で染め抜くとは…余程死にたいらしいな！」

そうそう、内容は違うけれど、同じ様な事を言われた気が……
……え”？

「野郎共、やっちまえーーーーーーー！！！！」

なんで、こうなるのーーーーー！！？
そして、押し寄せてくる数千人規模の黄巾党御一行とソレに立ち向かう自称小市民の俺。
普通なら勝敗は明らかだが、生憎とこの身体は普通じゃないんだよな。

そんな事を考えていた凌統〇〇歳、ある日の出来事であった…

え？伏せ字？……そんなのは飾りです！

――――劉備

私達の眼前に現われたのは髪を後ろで結った無表情な男の人だった。
その無表情な顔に合わせて眼を引く身体の奥底から凍り付いてしまうと錯覚するほど冷たく、何を想っているのか伺う事が出来ない瞳……
登場の仕方はまさに劇的過ぎると言っても過言じゃないかも知れません。
だって、空から降ってきたんだよ？
普通なら間違いなく死んでもおかしくない高さの崖だ。
ふと崖を見上げると……うん、何処まで有るのかわからない位の高さ。

そんな彼は着地して早々に、地に深く突き刺さった棒状の武器を無造作に引き抜いた。
飛んできた時は一瞬の事でよく見ることは出来なかったが、あの武器は三本の棒状のものを鎖で繋いだ物みたい。
武器の全貌を見ても今一ピンとこなかった。
だって、刃も何も付いていない只の棒で人の頭が吹き飛ぶなんて…
後々、愛紗ちゃんから聞いたんだけれど、あれは『三節棍』っていう武器で人の頭を吹き飛ばすには相当鍛練を積まないと無理なんだって。
最も、この時の私はそんな事を知る由もなかった。
おとと、話が逸れちゃった。えっと……私が小さい頃の話だったっけ？
……え、違った？

えと、えっと……あぁ！私達の前に現れた男の人の事だった。その人なんだけれど、急に落ちていた黄巾で武器に付いた土とか血を拭きだしたんだ。
その瞬間、私は思い出したの。つい最近黄巾党の人達を倒してその黄巾で血を拭っているっていうまるで《英雄》みたいな人の噂を。

《天の御使い》みたいな真実味に乏しい噂じゃなくて実際に会ったことのある人の言葉を…私だって、その話を聞いた時は『そんな人が一緒にいてくれたらな～』って思っていた位なんだけれど、まさか実際に会っちゃうなんて…そして、もっと驚いたのが愛紗ちゃんや鈴々ちゃんもその人について聞いたことがあったんだって。
でも、これで間違いないよね。三人が三人ともその人を連想するなんて…きっと間違いないよ！この人が…

「戦乱を凌ぎ（しのぎ）全てを統める（おさめる）者…！！」
きっとこの瞬間に歴史は動き始めたんだと思う。

――――凌統

やぁ、再びな凌統君だ。かなりきゃわいい女の子三人（一人は犯罪

チックな匂いがしたけど）をバックにハッスルしちまった俺は当社比３０倍位のやる気で黄巾党に向かっていった。途中、女の子の内二人が一緒に闘おうとしていたけれど、俺は敢えてその二人の方に敵がいかないように誘導したり迎撃したりして一人で頑張ったんだ。だって、武器を持っているとはいえ男が女の子に手伝ってもらうって何だか癪じゃね？って言うか、知らない子とはいえ、少しはカッコいい所を見せたいって言うのが男の性（さが）ってもんよ～……ごめんなさい、調子こきました。実は言うとかなり手伝って欲しかったです。ですが、何故か黄巾の皆様は俺の方ばかり向かってきたので仕方なくです。

一応さっき言った二人の女の子が手伝おうとしてくれたのは間違いないんだけれど、何故か俺の方ばかり敵が集中……ハッ！！？　ま、まさかあれか！！？　黄巾の皆様方は実はガチな兄貴属性の方達しか居なくて捕まったら最後『アッーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！』　みたいな状況に持ち込まれるのではないのでしょうか！？

だからそんな属性を持ち合せていない俺をそちら側に引きずり込もうとしているのでは！！？　そ、それならば色々と説明がつく様な気がします。

な、ならば俺はこんなのんびりと物事を考えずにさっさとコイツらを如何にかしないといけないのではないのでしょうか？

思いこんだら一直線の俺はそう結論付けて自分の大切な『ナニカ』を護るために自分の背後に立った奴を優先的に三節棍でぶっ飛ばし続けた。……え？　何で背後に立っている奴が解るのかって？　いや、だって……そういう仕様じゃね？

身も蓋も無い事を思いながらも俺は三節棍を…

振るう

振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう
振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう振るう

…以下エンドレス

みたいな状況で頑張ったんだ。そして気が付いたら…

「クッ…千を超える規模だったというのに…野郎共退却だーーーーーーー！！！！！」

やった！！　俺は護り切ったーーーーーーーーー！！！！

主に俺の大切な何かを護ったぞーーーーーーーーーーーーー！！！！！

「あ、あの！」

心の中で万歳三唱をしている俺に誰かが話しかけてきた。と言うよりも、この場で話しかけるという選択肢が出てくるのは三人ほどしか俺には思いつかない。

そ、そうだった！！！！？　確か俺は怪我こそは無かったものの、女の子に三節棍を当ててしまうという暴挙に出てしまったのだった！！？

あわわわ～ど、どどどどどどどどうしよ～！！

えとえとえとえと…と、取りあえず…

「大…丈夫……か？」

「――――――――　へ！？　あ、そ、えっと……はい、貴方のお陰で私達は無事でした。ありがとうございます！」

うっへぇ～い。何だか言いたい事が伝わってない感が否めない現状だぜ。
流石、コミュニケーションスキル［Ｃ－］な俺だぜ。簡単な会話ですら伝わらないとは…
まぁ、その辺はいいや。本人さん達もあんまり気にしていないみたいだし、軽く謝罪をしてこの場を去ろう。
「……すまな……かった…な」
よっしゃ、言い切った。
俺は言いたいことを言い残してその場を去ろうと忌引きを返した。
しかし……
「ま、待ってください！！」
何やらピンク髪の子に引き止められてしまいました。
な、なんでしょう？やっぱり慰謝料かなにかを請求させられるのでしょうか？
生憎、今の俺は公孫讃さんの所で働き初めてからまだ日も浅いので纏まったお金は用意できないのですが…
いや、少し待て俺。あの黄巾党の連中、俺を見つけてから俺にばっか向かってきていたよな？
と言うことはだ……
黄巾党に襲われる→俺登場
→黄巾党「あいつはこの前の！野郎共、この女達よりあいつを先に倒せ！」

→女の子？「…あれ？私たちって巻き添い？」
→女の子？「これって、あの男の所為？」
→女の子？「慰謝料倍増～」

みたいな図式になってもおかしくないよな！？
……ヤバくね？この時代にはないかもしれないが、臓器を狙われている感がマジぱねぇ～
いや、この時代で現実的に考えると、一生奴隷のように扱き使われて…誰にも見取られる事無く…

『……んまっ…つぁ…ちょぎっ（対訳：マヨネーズをお持ちいたしました《空を仰ぎ見て》）』

地味な内容の割には軽快な名言を後世に残す羽目になるんでしょうか！？
しかも、自分で言っておきながらあれだけれど、何だかマヨネーズを空に向けて差し出しているという訳のわからん状況だし…あ、これはゲームのネタか。

……だから、ちげぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！

そんな事を考えている場合じゃないんだってば！　そもそも、この

時代にマヨネーズは無いんじゃないのか？
しかも、何時もの如く内なる俺を表出出来ないもんだから無表情の俺が振り返りながら固まっているっていう変な状況になっているし！！？

「貴方が謝る必要なんて無いんですよ。だって、貴方はこうして私達を助けてくれたじゃないですか！」

「そ、そうです。我等はあのままでは一体どうなっていた事か…」

「お兄ちゃん強いんだな～鈴ヶと手合わせをしてほしいのだ！」

……何だろう？　感謝されている……のか？
いやいや、そうだとしても一人だけ違う事を言っている感じがするのですが。

いや、たぶん気のせい…だと思いたい。
……およ？そういえば、話はかわるけれど、副長さんには先に帰るように言ってあったな…なら、副長が心配しないうちにさっさと帰ったほうがいいかな？
だったら…

「…三人旅は…気を付けろ」

「えと、えっと……ありがとうございます！私は劉備。字は玄徳っていいます」

――――――――――――あい？

「ありがとうございました。私は関羽。字は雲長といいます」

――――――――――――うえ？

「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

――――――――――――――――オオォォォォ！！！？

何だって、こんなビックネームが三人旅を！？

…いや、そもそもこちらまでもが…

――――――――――――――――お・にゃ・の・こ・か！！

趙雲、公孫讃についで劉備、関羽、張飛の性別が逆転しているなんて……もしかして、曹操や孫策も……いや、やめておこう。

孫策ならまだしも、覇王になりたいって言っている曹操が想像つかないや。

って言うか、この身は呉の武将だってのに、呉とは関係ないビックネームに遭遇しているこの状況に驚嘆を感じ得ないよ…驚いたって事さ。

……今更だけれど、俺って本当に呉の武将になる凌統であっているのかしら？　だって、劉備とね絡みなんて凌統の歴史上聞いたことがないし…

誰でもいいから５Ｗ１Ｈで説明が欲しいところＤＡ☆ＺＥ！

『間違いなく呉の凌統であっているわよ？』

そっか～なら納得……ん？

『反応うっすいわね～あんた、その性格をどうにかしないとハーレ

ムルートいかずにガチ……なルートに突入するわよ？』

《ガチ……》って何ですか！？

その点々部分からは危険なニホイしかしねぇぇ！！

あと、ハーレムつったって前世で女気皆無な俺には程遠いです！

そして、あなたは確か〔自称ごっどぅ〕さんではありませんか！！？

お久しブリーフなユート君です！

『ギャグ古ッ！！　…いや、此処は過去の世界なんだからある意味で最先端すぎるギャグになるのかしら？あと、その呼び名だと私の苗字が自称で名前がごっどぅって言う考えられない名前になるからやめてちょうだい。最後に、その自己紹介の仕方はファンタシーな世界の部族な少年を連想させるわよ？』

す、スゲー…何段ツッコミですか…？俺にはある意味で真似できない。

……いや、最後のは二度ネタか？

って言うかごっどぅさん、久しぶりだねぇ～元気してた？

『人の話は聞きましょうって習わなかったかしら！！？

兎に角、君は間違いなく呉の凌統であっているわよ。ただ……』

ただ？

『これは間違いなく君の生きる世界って事。殴れば痛いし、心臓を刺されたら死ぬ。そして、君は君の思うように生きることが出来る世界ってわけ』

……わかったようでサッパリわからん。

『今は其れでも無問題よ。その内理解できるわ』

……そんなもんかね？

『そんなもんよ。さて、いい加減正気に戻りなさい。あの娘達が困っているわよ？』

あ、ちょ、待てよ！！

最後に一言意味のわからない言葉を残して自称ごっどぅさんの声は聞こえなくなった。

何故いきなりあの人の声が聞こえたのかはわからない。いや、そもそも幻聴っていう可能性だって否定し切れていないし…まぁ、気にするだけ無駄だね。

「……ぉ…」

しかし、俺が本物の凌統だとしたらどのタイミングで呉に行けばいいんだろう？

「……ぁ……ぉ～…」

しかしながら今は白蓮さんの所でお世話になっているんだからおいそれと出ていくわけにも行かないし…

「あ……ぉ…〜」

あり？そういえば、さっきまで誰かと話していたような…

「――――――――――――あのぉ！！」

ウッヒョイ！！

――――――――――――ハッ！！？

やべぇそう言えば、自称劉備ちゃん達と話している最中だった。

と、兎に角、この女の子が本物の劉備なのかを聞かねば！

「……劉……備…？」

「はい♪劉備です」

そっか～りゅーびなのか～

そんでこちらの黒髪少女が…

「関……羽……」

「えぇ、関　雲長です」

そんでもって、此方のロリィで、いかにも活発そうな女の子が……

「張……飛……」

「そうなのだ。お兄ちゃんは誰なのだ？」

…なんだろう、この心の奥底からマグマの如く滲みだしてくる暖かな感覚は……？

――――――――――あぁ、そうか。此れが……萌えか…

今迄、呼ばれた事のないような呼称だったもんで、ついついトリップ気味になる俺。

……は、始めにいっておきます！俺は小さい子を愛してしまうような特殊な性癖は持ち合わせていないからな！

……でも、愛でる事くらい許していただけたら幸いかと存じ上げますが何か？

――――――――ナデナデ…

「うにゃあ？何で頭を撫でるのだ？」

おぉうっと！？　無意識のうちに左手が俺の意志に反して動き始めているゼ！！？

や、やばい…このままでは、急に頭を撫で始めた変態の烙印を押されてしまうではないかな！？

俺はあわててエイリアンハンドみたく、勝手に動きだした左手を引っ込めた。

「すま…ない……俺は凌統……字……公積」

いつもと同じく、微妙に事足りないコミュニケーションでなんとか自己紹介をした俺。

勿論、勝手に頭を撫でてしまった事を謝罪するのは忘れない。なぜなら俺はジェントルなんだから！

「凌統……やはり、貴方様が『戦乱を凌ぎ（しのぎ）全てを統める（おさめる）者』でございますか！？」

うへっ？　俺の自己紹介が終わるや否や、黒髪の関羽さんがなにやら興奮した面持ちで俺につめよってきた。

…って、ちかっ…近いですよ関羽さん！？

いきなり顔を目一杯近付けないでください！　あ、ほら今、唾が飛んで…あ～も～！　だ・か・ら！

「近付き……過ぎ……だ」

「――――――へっ？　……あ、あぁっ！？　し、失礼いたしました…」

そういいながら羞恥から少し頬を赤くしながら関羽さんはすごすごと後ろに下がった。
ってか、何だか今少しばかり厨二臭い二つ名みたいなのが聞こえた気がするんだが…

「にゃはは～愛紗は慌てすぎなのだ～」

「ぐぬぬ……鈴々にしては珍しく正論なだけに言い返せん…！」

仲がよろしい事で～ってか、始めてあった俺の目の前で真名を言われると困るのですが…
さらに言えばさっきの二つ名はきっと俺ではない誰かかと…

「ふ、二人とも。凌統さんが困っているよ～」

そう言いながら劉備さんは二人をたしなみはじめた。
そうだ劉備さんもっと言ってやれ！

「それで凌統さんは、今迄どれくらいの人を助けてきたんですか！！」

うおっと……ブルータスお前もか？
っていうか、何だか俺のことについて色々と勘違いしていませんか？
取り敢えず、俺がそんな立派な人ではないことを言っておかなければ…

「……そんな…立派…な……ものでは…な…い…」

「御謙遜される事はありません。凌統殿は立派な事をされてきたの

ですから！」

関羽さんの熱の入り様がハンパねぇ～

ってか、こんなところで時間をかけている場合じゃないよな。

副長さん達に先に帰ってもらってから大分時間が経っちまったな…

早く帰らねば。

「話が…終わった……のなら……俺は行く…ぞ……」

再び忌引きを返して帰ろうとした俺。しかし……

――――――――――――グッ！

何やら手を引かれるような感覚～……え？

「あの……あのっ！！」

何かを訴えるような目で俺を見上げながら両手で俺の右手をホールドしている劉備さん。

しかしながら、女の子の手に触れるなんて小学校の時のフォークダンス以来だな～

あの時は俺のあまりの無表情っぷりに運動会最中に相手の子が号泣してしまうという果てしなく悲しい思い出だったな。

あ、あれ？なんだか視界がぼやけてきたような……べ、別に泣いてなんかないやい！

ただ少しだけ、心から若かりし頃の甘酸っぱい思い出に浸っていただけだい！

……グスン

そんな事はお構いなしにと劉備さんは話を続けた。

「――――――――私達と…私達と一緒に旅をしませんか？」

……はい？

第十幕　誘われて（後書き）

いやはや、思ったよりもハードだぜ研修…（涙）

久しぶりな更新なのに、伝えたいことを伝える余裕が出ない程ベリーハードだぁ…

と言う訳で、いっその事研修の終わる８月まで更新を停止しようかしら？

まだ決定したわけではないので、もし更新を停止する場合は活動報告に書き込みをするのでよろしくです～

ではでは、感想＆ご意見は随時お待ちしています！！

かみかみんでしたぁ～（＾－＾）ノシ

第十一幕　お連れが出来て（前書き）

お久しぶりのかみかみんです

やっとこさ仕上げた１１話…そして気が付いたらＰＶ１００００００突破でお気に入りが３００越え…以前をはるかにしのぐペースに驚きを隠せません。

これからも応援よろしくお願いします！！

ではでは準備ＯＫの方はお進みください

第十一幕　お連れが出来て

――――凌統

「――――――――――――私達と…私達と一緒に旅をしませんか？」

イキナリ初対面の女の子に受け取り方を間違えたら告白されている様なシチュエーションなう。そんな状況の凌統です。
な、何が起きたかわからねぇって？　大丈夫だ俺にも何がなんだかさっぱりな状況なんだから。理解も納得もするわけねぇ状況だ。

それに、後ろの二人を見てみんしゃいな。突然の劉備さんの言葉に眼をまん丸にしているよ。驚いているって事が他人とコミュニケーションを取るのが苦手な俺ですら容易に分かるよ。
そしてこの子……すべっている！！

「……じゃあ…な」

「……はぅ！！？　早速振られた！？」

…え？告白だったの！？
いや、これもフリなのかもしれない。だったら、変に乗っかちまわない方が良いな。

「…桃香様、前置きをすっ飛ばして突然その様に言われては誰でも断るかと」

「お姉ちゃんは慌てんぼうさんなのだ～」

ほらみろ～関羽さんや張飛ちゃんもイキナリで呆れて居るじゃんか～…と言う訳で俺は帰る。

「でもね愛紗ちゃん。私達だって何時までも3人で旅をするなんて……って、凌統さん待ってくださいよ～！！」

え～…まだ何かあるの？　って言うか、あんまり三国志の主要人物と関係を持ちたくないんですが…

まぁ、星さんや白蓮さんと知り合いになった時点で手遅れっぽい気もするけれど、俺は自負共に小市民で、前世では果たせなかった平穏無事な毎日をこの世界で送るって決めていて…

しかし、そんな俺の想いとは裏腹に劉備さんは捲し立てるように話を進めた。

「私達は変えたいと思っているんです！！」

「……変え…る？」

はて？　変えるとは一体何をでっしゃろう？　今のすべっているこの現状でっしゃろうか？　……はっ！！？　帰ろうと思っていたのに気が付いたら歩みを止めてしまっている自分が居る！！

くっそ～　一度足を止めてしまったのなら、最後まで聞いてしまう性分な俺はこれでは帰れないではないか！

そして、劉備さんの言葉に付け足す様に張飛ちゃんが喋り出した。

「今の世の中の事なのだ。漢王朝が腐敗して弱い人達から沢山税金を取って、好き勝手しているのだ。それに、盗賊達も一杯一杯いて、弱い人達をいじめているのだ！」

…お兄さんはそれ以前に、張飛ちゃんの口から漢王朝っていう難しそうな言葉が出てきた事に驚きだよ。いやはや、人はみかけで判断してはいけないと言うか、何と言うか…
さらに、其処に関羽さんも加わった。

「そこで我等三人が立ちあがったのです。…ですが、どうすればよいのか方策を考えている所で管輅の占いと…」

「村の人達が話している『噂』を聞いたんです」

……これまた、占いと噂って……そんなものを現代で当てにしたら世の中を生きていくのは難しいというに…
しかし、占いと噂か……

「『この乱世に平和を誘う使者』…そして、『戦乱を凌ぎ全てを統める者』。前者は自称大陸一の占い師、管輅の言葉で、後者が最近実しやかに騒がれている者を示した言葉です」

なるへそ。何だかどちらも胡散臭いって言うことには変わりないと……あり？　でもさっき関羽さんって俺の事を…

「それで、占いは何だかあやふやだけれど、農民の人達が言っていた噂ならまだ信憑性があるかなって思って……」

え……え？何その期待に満ち満ちと溢れかえってしまったその眼は！？　ま、まさかその噂の人物って…
そこまでふられたら幾ら俺でも分かっちまったじゃねぇかよ！！

「……それが……俺…か？」

つまるところ、その噂って言うのが持っているカリスマ性を頼りにこの辺りまで来たって事なのでしょうか？　……何て言うか、凄い人達ですね。まさか、そんなものを頼ったなんて…しかし、こんな所までご足労戴いたのに申し訳ないが、俺はそんな危なさそうな事に関してはなるべく関わらないようにしようと決め込んでいる。もう、これは決定事項だ。そういったものは他を当たってくれって感じだね。

「…それは……お前達の勝手だ……俺には……俺の進むべき道（平穏無事な日々）が…ある……」

「「「……」」」

あ…あり？何だか黙っちまったんだが…なんか変なことを言ったか？

「…凌統さんの進むべき道は険しい道…ですか？」

ほへ？　俺の平穏無事な生活に興味があるのかな？
まぁ、確かに険しいかと聞かれたら今の状況から言うと険しいっちゃあけわしいかな。

「そう……だ…な……今の状態…で…は……程遠いかも…な……」

本当にこのままじゃ、憧れのスローライフは何時になることやら…

「なら……なら！私達に凌統さんの目指す道を共に歩いていくことを許してもらっても…いいですか？」

……なんだろう？やっぱり告白されているのでしょうか？
いや、勘違いしちゃいけない！昔誰かに聞いたことがあるぞぉ～

女の子という人種は無自覚に男が『惚れてまうやろー』と言ってしまう言葉を言うって聞いたことがある…

つまり劉備さんは、純粋に俺のスローライフを手伝ってくれるというわけで…

そ、そういうことならば、純粋に嬉しいぞ！？

「……何…故…？」

「何故って…ソレが（世の為に）必要な事だと思ったからです！！」

な、成程…（俺にとって）必要な事だと思ってくれているのか……

…何故だろう？　果てしなく勘違いが何処かで起きている気もしないでもないが、劉備さんも必要な事だと思ってくれるんだな！？

あ、ヤベッ…嬉し過ぎて涙が少し出てきた…

「お兄ちゃん…泣いているのか？」

しかも見られてしまったではないか！？

「…あぁ……理解し…て……くれる人物に…会えたと思うと……な」

もう、見られちまったのなら、隠す必要なんて無いよな？　本当にこの世界の人達と来たら、俺の言いたい事を一ミクロンも理解してくれないんだぜ！？

それなのに、そんな中で俺のスローライフを応援、更には支援してくれるって人が現われたんだぜ？

泣くなって言う方が無理ってもんだろう。

「な、ならば我等も…！！」

「……そう…だな……共に……来てくれる…か？」

もう、寧ろ俺の方からお願いしますって感じだよ！！　俺の夢達成（スローライフ）の為に一緒に頑張ろうではないか！！

「喜んで！」

「宜しくお願い致します凌統殿」

「にゃはは～仲間が増えたのだ～」

やったぜ！何だかお仲間ゲットだぜみたいな感じだ！

…そうだな、仲間が出来たんだから手始めに白蓮さんの城から出て、何処でも良いから村に永住をして……

「貴方様の生きる道…この曇りなき眼にてしかと刻み込みましょう」

「……あし……た……イヤ…何でもない」

あっぶねーーーーー！！　って言うか、何で関羽さんは○の○け姫の名台詞をサラリと言っちゃうかな！？

危うく未だ映画という概念すらないこの世界で『アシタ○！？』って突っ込んじまう所だったじゃんかよ～

だけれど、変な所で切ったものだから、少し関羽さんが怪訝そうな顔をしているよ…まぁ、ソレについてはスルーしておこう。

「それじゃあ、凌統さんも私達の仲間になったって事で～あ、そう言えばこの近くに私のお友達が太守をしているって聞いたことがあるんだ。そこに行ってみようよ～」

……何故だろう？　果てしなく俺が思い描いているビジョンとは程遠い事をこの少女は言っている気がするのですが？
…いや、疑っちゃあいけねぇ。信じ続けることが重要だって昔の偉い人が言った気がする！！
……あれ？　信じる事…信じ続ける事…ソレが本当の強さだ。だったっけか？

……何故だろう？　果てしなく運命の物語弐って感じがしたんだけれど…

「それってどこなのだ？」

おぉっと…何だか一人ボケしている俺をサハラ砂漠に放置して話を進めちまっていやがるぜこの二人。
ねぇねぇ～よかったら俺も混ｚ……

「えっとね、確か……幽州啄郡…だったかな？」

……あり？ソレって今現在俺がお世話になっている所の様な気が……まぁいい……のか？
いや、別に白蓮さんも将が増えることに関しては歓迎してくれるだろうし…

そんなこんなで俺達は俺がお世話になっている啄郡へと向かったのであった。

――――関羽

先の淩統殿が一瞬だけ見せた影…恐らく、旅を続けてきた中で自分のやるべき事を見つけ出し、その道に向かって愚直に歩き続けてきたのだろう。
だが不幸な事に、自分のやるべき事を今まで理解されないでいたに違いない。

――――――――――――――――――――――――戦乱を淩ぎ全てを統べる者

誰が付けたのか分からないこの呼び名…恐らく『天の御使い』に並んでこの大陸にその名が轟いている名であろう。
しかし、唯一彼だけがそんな名を億尾に思わずにいるに違いない。
まるでその姿は『その様な名に踊らされてなるものか』という彼の心の叫びの様にも思える。
そして、周りの人間はそんな彼を崇め称える……その誰が付けたのか分からないような名に縋って…
気がつけば彼は縋ってきた人を助け今日まで生きてきたのだろう。

……『凌統』と言う存在は民を助けるのが義務になっているかのように…

恐らく民達に悪気は無いのであろう。ソレが解っているからこそ凌統殿も苦言を申さずにいたのであろう。

しかし、そのせいで彼の進むべき道を誰もが誤解してしまっていたんだ。

彼はあくまでも『戦乱を凌ぎ全てを統べる者』だ…賊を討伐し、民を救うのも立派な事ではあるが、彼の行く先は遥か遠くに見える天下泰平…

そして、彼は嘆いた……自分の道を理解する人物がいない事に…

其処に我らが現われた。私も始めは彼の持つ名を頼りにした。恐らく桃香様も鈴々……はどうだろう？

し、しかし！今では違う。確かに彼の通り名は有用な力になり得るが、そんな事は今は良いのだ。

今は只……

「貴方様の生きる道…この曇りなき眼にてしかと刻み込みましょう」

「……あし……た……イヤ…何でもない」

……？今何を言おうとされたのだ？　あした？……明日？明日何かが起きるとでも言うのでしょうか？

「それじゃあ、凌統さんも私達の仲間になったって事で～あ、そう言えばこの近くに私のお友達が太守をしているって聞いたことがあるんだ。そこに行ってみようよ～」

「それってどこなのだ？」

「えっとね、確か……幽州啄郡…だったかな？」

……はぁ、凌統殿が何やら意味深な話をしてくださっているというのにこの二人ときたら…

桃香様も桃香様です。こんなご時世、幾ら友人とはいえ突然押し掛けてしまっては門前払いを食うか、足元を見られるだけですよ？

しかし、ソレを口に出来る程私は桃香様に対して非情にはなれない。

結局は私もその意見に同調する形となった。しかし、先程凌統殿が言われた『明日』という言葉……どのような意味が込められているのであろう？

そして、その意味を理解したのは凌統殿の言葉通り翌日の事であった。

「…そう言えば、此処からそのお友達の所にはどれくらいかかるのだ？」

「へ？　う～ん……そうだね、野営をして明日にでも着くと思うよ」

その時の私は今まさに話に上がっている桃香様の御友人と、凌統殿が知り合いだという事は全く知らないでいたのであった。

――――――――　オマケ

「う～む……」

俺は雪花！　柚登の母ちゃんだ！！　今俺は正に重大な局面を迎えている。

これを間違えたら恐らく一生辿り着けねぇかもしんねぇぜ……

…あん？　俺が何をしているのかって？　ふふふ～聞いて驚くなよ！！　俺は今現在…

――――――――――――――――――――――――ポテ…

「―――――――――――――――――――――――　よっしゃあ！！　枝
が倒れたこっちが西涼だな！！」

自分の行く道ってもんを占っていたんだ。　……ンだよ？悪ぃか！
？　これはコレで以外と当たるんだよ！！
…まぁ、柚登と一緒にいる時はアイツが先行していたから腕が鈍っちまっているかもしんねぇけれど…

と、兎に角！何だか風の噂に聞いたんだが、西涼にいる馬騰って奴が昔貧乏だった頃に木を切って生活をしていたらしいんだ。
ソレが気が付いたら世に名を轟かせているような太守になっているって話じゃねえか。
距離はあるが、今からそいつの所に行ってちょいと出世のコツってもんを聞きに行こうと思ってんだ。

そして俺は、その辺で拾った棒が倒れた方角に向かって一直線に進む。
……だけれど、何でだろうな？　段々と磯臭せぇ感じがしているんだが………
まぁ、俺は地形には疎いが多分間違ってねぇだろうな！！
よっしゃぁーーーーーー！！！！　これも柚登の出生街道まっしぐ

らを目指す為だ。頑張るぞーーーーー！！！

「おーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

俺は雲一つない快晴の大空へと両手を高く上げ、意気揚々と足取りも軽く進んでいくのであった…

……母の旅も続く

第十一幕　お連れが出来て（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです！！

最後のはこれからもちょくちょく書いてみようかなと……何故だろう？本編書くよりも書きやすい…

さてさて、感想&ご意見は何時でもお待ちしております。
感想をいただけると作者のやる気もアップするやもしれませんね…
ではでは、これからも応援よろしくお願いします！！

外幕一　母むかいて（前書き）

一か月も放置申し訳ございませぬ～！！

書く時が殆ど無く、チマチマチマチマ書いていたらこれ程までに過ぎていました…

さてさて、コレだけお待たせしながら外伝話です（汗）
まぁ、外伝と言いながらも本編と関わり合うこともチラッと入っているのでよろしければ見ていってください。
ではでは、準備ＯＫの方はお進みください～

外幕一　母むかいて

母親とは自身が腹を痛めて産んだ子のためなら、たとえ火のなか水の中へと問答無用に突き進む人種である。
人によっては、自分の子供に対して非常に接することも辞さない。

――――――――――これは、そんなとある武将の母である破天荒な女性のとある一日である……

――――雪花

「（――――ムシャムシャ）」

なんだ、意外と蛇ってウメェじゃねぇか。旅の途中、柚登が捕まえてきていたのも、よくわかるな。
あの時は村が近かったし、尚且つあんなニョロニョロがうまいはずがないって思っていたからな。しかし、まさか今こうして柚登を否定しておきながら実行している俺がいるとはな…人生ってもんはわかんねぇな～

ただ、何だか知らねぇが舌がイテェのは何でだ？
やっぱ、身の部分が美味かったからって内臓まで喰ったのは不味かったか？
しかも、途中で火が消えちまったから半生でいったのもまずかったかもしんねぇな……

うん、今度から捌いた後に火を通してから喰ってみるかな。

・・・・・・・・・

「うっし、メシ終わり！　さぁて、今日も西涼目指していくぜ！！」

俺の名前は雪花。最近ちまたで噂になっている柚登の母ちゃんだ！
前にも言った事があるかもしんねぇが、俺は今西涼の馬騰って奴の所目指して旅をしている。ワケは前にも言ったからいわねぇぜ。

因みに柚登は今現在、幽州のこ、こう……コウ……フゥ、影の薄い奴の所『うおぉい！！』で客将として働いている。
……ん？何か今誰か喋ったか？　……気の所為……か？
まぁいいや。そんなこんなで旅をしている最中なんだが……

「……どうなってんだこりゃ？」

今俺は崖の上から一面に広がる荒野にポツンと存在する村に眼をやる。俺から大体二里（凡そ４ｋｍ）離れているだろうか？……ん？
何だか今俺のしらねぇ言葉が出てきたような……ま、気の所為か。
んん？　誰だぁ？　今俺の事を人間じゃねぇって思った奴、前に出やがれぇ！！　……何だかさっきから変な声が聞こえてしゃあねぇや。
俺は気を取り直して再び遥か遠くに離れし村へと目を向ける。

そして、そこには辺りを覆うように立ちこめる黒煙…さらには、なにやら羽虫ほどに小さくだが人が密集しているのが見える。更に目を凝らしてみると……村の中になにやら旗の様なものが見える。恐らく、どこぞの軍の将がいるのであろう。俺は興味本位でその旗が立っている場所に意識を集中した。

「……『夏候』の旗…か？」

如何やら戦の真最中の所のようだ。大方どこぞの豪族が内輪もめっているか、国の侵攻が始まったか…はたまた、賊に攻め込まれてんだろう。こういうのは関わらねぇってのが旅をするうえでの鉄則である。

態々、自分から危険に飛び込む馬鹿なんざ底抜けにバカが付く程のお人よしか、昼夜問わず戦い続ける事を生きがいとする戦闘狂位なもんだ。

…いや、恐らく昔の俺だったら後者に当てはまり、あそこに突っ込んでいく無望な行動を取っていただろう。

しかし、今は違う。今の俺は西涼の馬騰の所に行って柚登の出世街道に色を付けるという使命がある！！

……まぁ、柚登には内緒で勝手にやってんだが。

しっかし、何だか村に籠っている奴らが大分苦戦してんなぁ～無理も無いか。あんだけ黄色い軍勢に取り囲まれたとあっちゃあ、援軍でも来ない限り巻き返すなんて至難の業だ。

ま、俺には関係ねぇな～俺は柚登の為に生きていくって決めてるしな～

そう心の中で自己完結した俺は勢いよくきびきを返した。…そこでふと、先程の黄色い軍勢について頭をよぎった。

そういや、さっきの黄色い軍……何だか、いくつもの塊が連なって出来ているように感じたな。
おそらく、小規模～中規模の軍を数十単位で大量に合わせていってさっきの大規模の軍勢になっていたのだろう。
俺の見立てでは軽く千は超えていやがる。下手すりゃ万を超えているかもしんねぇ。
…と言う事はだ、あそこの中に中枢にかかわる指揮官の一人や二人が紛れ込んでいるっていう確率がとことん高いって事か？

「……そういや柚登の奴、何て言ったっけな？　確か……
……そう……蒼天己死、黄天富立…だったか？」

確か、ついこの間俺と柚登が壊滅させた黄色い布を巻いた賊どもがそんな事が書かれた旗を持っていた気がする。
俺は直ぐ様、首だけ動かして大量に集まっている軍勢を見下ろした。
そこには……

「当たり…ってか？　ニシシ～俺にも運が回ってきたぜ！　俺がここであの軍を軽くプッ血殺して指揮官の首を柚登にもっていきゃあ、柚登の出世街道順調明快！！　俺の夢に一歩近づくってわけか！」

そうと決まりゃあ話が早ぇぜ！　俺はたった今きびきを返した足を再び返してもう一度村の方へと向いた。

俺の予想が確かなら……お？　いたいた～何にも知らねぇ状態で呑気に部下に指示を飛ばしている気持ちワリィ野郎がいるぜ～　恐らくは、アレがこの軍の指揮官…もしくは、ソレに近しいものなんだろうな。

大凡二里…俺の力じゃあ三節棍はアソコマデ飛ばねぇ…柚登ならやれちまうんだろうが…ハァ、俺って母ちゃんなのにアイツよりも頼りなくなっちまったなぁ～

……おとと、物思いにふけっている場合じゃなかったぜ。

取りあえずは、あの野郎をしょっぴきゃあ良いんだよな？だったら……

「俺らしく突貫するだけだぜ！！」

そう結論付けた俺は今俺が立っている崖から勢いよく飛び出したのだった。

少し傾斜になっている崖から俺は滑るように突貫する。さらに両手にはいつも愛用している三節棍を装備するのも忘れない。

未だに距離は離れている為中腹にいる奴らには俺の存在に気が付いていない。しかし、集団の端っこ…崖に近しい所に配置していた奴らは何かが自分達に近づいているという事に気付き始めたみたいだ。

しかし、こっちは俺一人…恐らく出てくるのは数人規模…だがそれ

でも良いんだ。
向かって来る野郎は全滅！　逃亡する野郎は半殺し！　大将は首だけチョンパ！
これが俺の心情だぜ！！

「オラオラオラオラーーーーーーーーーー！！！！！　俺様が相手になってやんよーーーーーーーーーー！！！！！！！」

そんなこんなで俺は、敵に単身突貫と決め込んだのであった…

――――夏侯淵

少し厳しい状況だな…斥候の話ではこの村を襲撃していた賊は当初千余り。
此方には義勇軍の姿もあり、総勢千程…数のうえでは殆ど差異は無い。しかし、何故か判らないが、奴らは増加の一途をたどっている。
今では既に我等の倍以上の数に膨れ上がっている事だろう。
しかし、こちらは先遣隊といっても軍だ。多少なりとも数が劣勢でも一方的に負ける事はない。
しかし、数で押し切られてしまった場合は……

「秋蘭さまっ！西側の大通り、三つ目の防柵まで破られました！」

季衣が慌てた様子で報告に来た。どうやら、黄巾を巻いた賊どもは直ぐそこまで来ているようだ。
その証拠に、奴らの発する轟音諸々が段々と近づいてきている事が容易に理解出来た。
そして、残る防柵は残り二つ……恐らく一刻もつか怪しい所だな。
姉者達が間に合うか間に合わないか微妙な所だ。

「如何なさいますか夏候淵様？」

そんな焦った様子を兵達に見られて士気を落とすまいと顔に出すことなく思案していると褐色の少女…楽進が指示を求めに来た。彼女を含めた李典、于禁は義勇軍に所属している。今回、これ程までに保つ事が出来たのも一重に彼女達のお陰だろう。しかし、このままでは防柵が持たずに賊の軍勢がこの村に押し寄せてくる。そうなってしまってはどうしようもない。何としても華琳様や姉者が来るまでもたせなければ…

「夏候淵さまー！　東側の防柵が破られたのー。　向こうの防壁はあと一つしかないの！」

「…あかん。東側の最後の防壁って、材料が足りひんかったからかなり脆いで。すぐ破られてまう！」

まずいな…李典の言う通りならば半刻も持つまい。…こうなったら、西側を最低限まで絞り、残る全ての兵を東側に向かわせるしか方法が…しかし、それでは西側が破られた時、不利な状況に働くか。

「し、失礼いたします！！」

そんな時だ。義勇軍の一人と思われる若い兵が私達の前に血相を抱えた状態で報告に来た。

「何や！　今こっちは手いっぱいで…」

李典が煩わしそうに吠える。仕方ないか、今この状況下で冷静にいろというのが少し無理な話だ。私ですら焦りを隠しきるので精一杯

だというのに…

李典の眼光に一瞬身を引いた兵だったが、直ぐ様本来の目的を思い出したかのように口を開いた。

「ハッ！　原因は不明でありますが、東側の賊の数が突如減少の一途を辿っております！」

……何を言っているのか理解できなかった。限りなく優勢の賊が減少の一途をたどるなど信じることが誰が出来よう。

戦場では良くあることだが、新兵などが戦での興奮で気がやられ、本来は見えないモノが見えてくる事はよくあることだ。そして、目の前にいる兵もまだ若い。

恐らくこの場にいる将の器として呼べる者は皆、この兵の気がやられたのだと判断した。……しかし

「更に伝令！　東側の賊、逃走を始めました！」

『……は？（一同）』

どういう事だ？　一人ならまだしも二人も同じ幻影を見たというのか？

…いや、そう簡単にその話を信じては……一つの判断の誤りが後に取り返しのつかない事になりかねない。

ならばここは……

「…李典、于禁はそのまま此処に待機。防壁が破られた時はお前達が指示を出せ。楽進は私と共に東側の防壁まで行くぞ」

「信じるんでっか！？」

李典が意外そうな顔をしながら答えた。…いや、李典だけでなく楽進も于禁も同じ様な表情だ。
…いや、自分でもこれはある意味でかけに近い者がある。仮にこれが兵達の幻影で東側の防壁に押し寄せる賊たちの数に変化が無いとするならば、私と楽進では防ぎきれない。
また、本当だとしても全員で東側の防壁へ向かった場合は西側の防壁が手薄となり、これもまた詰みだ。
…これは一種の懸けといってもいい。私は軽く片方の口角を上げて答える。
「…どの道、ただでは済みそうにない状況だ。ならば、人を信じてみようと思っただけだ」
そうして、私と楽進は数十人の兵を連れて東側の門へと向かったのだった。

――――その日の夜

「…ソレが嘘偽りのない事実だと言えるのかしら？」
「はっ。確かに我等はこの目でしかと…」
「秋蘭、アンタもどっかのバカがうつったんじゃないの？　人一人で黄巾党の軍勢を退けたなんて…普通に考えても出来るわけないじゃない！」

「……なぁ季衣、今のバカってお前の事か？」

「えぇ！？　ボクはてっきり春蘭様の事かと…」

「そっか、私なのか。……なぁぁぁぁぁぁぁにぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！？？　どういう事だ桂花！！」

「ふん、バカにバカって言って何が悪いのよ！あと、うっさいのよアンタ！！」

「バカってうつるのか！！？」

「そこなんですか春蘭様！？」

「3人とも静かに！　…まぁいいわ。それにしても、秋蘭の言うとおり、たった一人で数千もの賊軍を退かせるなんて…敵に回ったとしたら、この曹孟徳の覇道の障害となりうるわね…秋蘭、その者はどこに？」

「ハッ！　何やら『ユトーーーーー』と叫びながら西へ…」

「ふ～ん……どうみる一刀？」

「俺に振るのかよ！？　…しかしな、この世界で何千人と相手に出来る将なんて俺は呂布位しか知らないしな…」

「ソレは無いと思う。我らが見たのは全くの別人だ。――――――――――――しかし…」

「『しかし』…ということは何か心当たりがあるのかしら？」

「えぇ…使用していた武器が三節棍であったのが引っかかるのです。確か、ここ最近三節棍を持つ親子の話が話題となっていた筈ですが…」

「それなら知っているわ。確か、『天の御使い』にならぶ『戦乱を凌ぎ全てを統べる者』だったわね？　…世迷い事だと思っていたんだけれど……桂花！」

「ハッ！」

「出来るだけで良いわ。『戦乱を凌ぎ全てを統べる者』の事について調べてちょうだい」

「御意！」

――――その時、凌統は…

「（――――ムシャムシャ）」

やぁ、白蓮さんの城がある城下町で絶賛食事中な凌統ご一行様だぜ。何だかんだ言いながらあの後、俺は劉備さん達と一緒に白蓮さんの所を目指す事になった。
何でも、白蓮さんの所に士官することが目的らしい。…まぁ、断られても俺が何とかする予定ではあるんだけれどね。
そんなこんなで一緒に野営をした後、俺達は再び啄郡に向けて歩みを進めた。道中――――

『私の真名は桃香です。よろしくお願いしますね凌統さん♪』

『私の真名は愛紗と申します』

『鈴々は鈴々なのだ！』

……と、真名をいただいたりもした。一応俺も自身の真名を交換したんだがね。

そんなこんなで一夜が明けて、どうやったら白蓮さんのところに行って話を聞いてもらえるのかをご飯を食べながら話し始めたのだよ。しかし其処は『俺の胃袋は宇宙だ』と忘れ去られしフードファイターの名台詞をサラリと言えてしまう程の大食漢にランクアップした俺だ。そんな場所で会議も出来る筈も無く気が付いたら……

「（――――ガツガツガツガツ）……店主……オカワ…リ」

「ヒッ、ヒーーーーーーーーーー！！！？　も、もう！もう勘弁して下せぇ！！」

「おい、今１０人目の料理人が倒れたぞ！！？」

「一体何人前食う気だこのあんちゃん！？」

「衛生兵！えぇせぇぇへぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

何やら祭りでも起きたんじゃないのかと言う位喧騒に満ち溢れた店内と…

「あは、アハハ～……柚登さんスゴイ…」

「柚登殿…もしや、あの剛腕はこの食事の量に秘密が…？」

「ぬぬ～鈴々も負けてられないのだ～！！　おっちゃんラーメン超特盛り叉焼十枚つけてなのだ～！！」

……解せぬ。

外幕一　母むかいて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです！！

…ムズイぜ魏領内の会話！！　更に北郷くん登場の回でもありました～

さてさて、思った以上にグダグダ感が溢れる外幕になってしまいましたが…

次回は８月に更新します。ではでは、これからも応援よろしくお願いします～

感想＆ご意見＆誤字・脱字報告はいつでも受け付けておりますので、お気軽に～

第十二幕　紹介して（前書き）

こんにちはかみかみんです。

漸く更新する事ができました。いやはや、長いスパンだな～
ある意味でリハビリ的な感じで書いたので内容はボロボロですがそれでもＯＫな方はお進みください～

第十二幕　紹介して

――――凌統

やぁ、何やら料理人を十人斬してしまうという失態を犯してしまった凌統君だ。
しかしながら、軟な料理人達だったぜ。客の要望にこたえきれないとは…

「うにゃぁ～　全然足りないのだ～」

ほらみろ、鈴々ちゃんなんか育ちざかりだってのに腹いっぱい食べれていないんだぞ？　その証拠に元気印が付きそうな顔がかなり曇っている。
確か、最後に超特盛りラーメン＋叉焼十枚を食べていたが、鈴々ちゃんくらいの年齢だったらアレと同じ量を五杯は食べないと足りないだろう。
俺だったら間違いなくその倍は食べないと足りないかもしれないけれど……

「鈴々、余りはしたない事を言うな。今日の夕餉まで我慢するんだ」

「にゃにゃ！？　そんなの待っていられないのだ！」

愛紗さん、以外と酷な事を言うよな……俺的腹時計では現在の時刻は１４時を回った位の時間の筈だ。
……以外と当たるって評判なんだぞ俺の腹時計。　取りあえず、まだヒルを少し回った時間だってのに夕食まで待てとかマジで鬼畜すぎやしませんか？　ほら見ろ、鈴々ちゃんの顔が絶望色に染まり切

っているじゃんかよ。　流石に子供の絶望した顔は俺の精神上良くない。　さてさて、確かこの辺に……

鈴々ちゃんの元気の無さを見て俺は自身の懐に手を入れてとあるものを探した。

「（ゴソゴソ…）……これ……食べ…ろ」

そう言って俺がとりだした物は…

「……肉？」

「……肉…ですか？」

「うにゃ～いただきますなのだ～！」

――さて、鈴々ちゃんに少しだけだが俺の非常食を分けた所で今後の動向についてのおさらいだ。

桃香さん達はこのまま白蓮さんの所に行くことを望んでいるみたいである。おそらく其処で俺の平穏無事な暮らしをする為の手伝い諸々をしてくれるのだろう。

「あの……桃香様？　私の目が変なのでしょうか？　あの肉……」

「言わないで愛紗ちゃん。　私の目にも明らかに懐に入る程の大きさの肉じゃないって事は分かるんだから。　ここは、何も見なかった事にしておいた方が良いと思うよ」

「にゃにゃにゃにゃ～　……でも、お兄ちゃん凄いのだ～豚さんの丸焼を出すなんて鈴々、真似できないのだ」

「「……はぁ」」

ん？　何だか三人が話している様な気がしたけれど……ま、いっか。

さて、考えを戻して……俺は副長さん達を先に城に戻るように指示を出したのでさっさと報告に行かないといけない。……しかし、よくよく考えたら先に戻る様に指示を出してはいたが、一日あとに帰るなんて相当不味い事をしているかもしれない。だって、日本で営業に行っていたサラリーマンが部下だけ先に帰らせて自分はその日に帰らず、次の日に何食わぬ顔で出社したら、自分の席が無くなっていること請け合いだ。

おそらく、幾ら時代と国が違うとはいえ常識的に見ても不味いと思える。

……どうしよう？　このまま戻ったら自分の部屋がないとかいう状態になっていたら。

就職して数日でファイアとかマジで勘弁なんだけれど。　はやくも収入ゼロとか勘弁だわぁ～

……いや、少し待てよ俺。　これはある意味でチャンスなのかもしれない。　ここでクビになっておけば戦争とか危険な事に頭を突っ込む機会も無いし、寧ろ俺の目指す平穏無事な毎日を送る事が出来るのではないのか？

見た目無双さんの凌統とはいえ中身は小市民の俺だ。　こんな俺が表舞台からいなくなったってそんな大きく歴史が変わるなんて考えにくいし、そもそもこの時期には凌統は生まれていなかった筈だ。

だったら、今から姿をくらました所でそれ程お事にはなりにくいんじゃないのか？

……ふふ…フハハハハハ！　よっしゃ、そうだねそうしよう。
このプランで行けば俺の平穏無事な生活が安泰になるではないか！
　収入が無くなるのは少し辛いけれど、この身体能力だ。　力仕事関係なら幾らでも働き口が見つかるに違いない。
そうと決まれば、さっさと城に戻って……

「柚登さん、どうしたんですか？　黙ったまま遠くを見つめたりして」

……桃香さんたち、どうしよう？
元々、俺の平穏無事な暮らしを手助けしてくれるために白蓮さんの所に行くって言ってくれていたし……俺が軍から離れると決めた以上、特にやって貰いたい事も無いし……そうだ、彼女達には俺が居なくなった後の隊をまとめてもらおう。　俺みたいな初心者ではなくて、仮にも名前が劉備や関羽、張飛といったビッグネームが揃っているんだ。　俺以上に活躍してくれる事は間違いない。
よしよし、そうと決まればさっさと城に戻ってクビを言い渡されて、桃香さん達に引き継ぎをして、平穏無事な暮らしロードへ猫まっしぐらだゼ！

「なんでも……ない。　……城…行くぞ」

「はぁ……でもでも、手ぶらで行って大丈夫でしょうか？」

……ん？　手ぶらでって、手土産を持っていく気なのかな？

「いくら公孫賛殿が桃香様の昔の御学友とはいえ、我等は無名。流石に取り合ってもらえる可能性は低いかと……」

いや、俺がいるし。　一応これでもクビ予定とは言え、軍属だぞ？

「にゃ～お腹一杯！　ふぁ～あ、それじゃあお休みなのだぁ……」

いやだから、普通に通して貰えるって。　あ、鈴々ちゃん非常食を食べ終わったみたいだね。

さっきよりも満足そうな顔をしているよ。　そして気が付いたら夢の住人に早変わり……って今この場で寝たよこの子！？　どうしよう、こんな所で寝たら風邪引いちまうし、何よりも道端で寝るのは良くない！

俺の持っていた非常食を食べ終わった鈴々ちゃんはお腹がいっぱいになったのであろう。　見事なまでに入眠の早さを俺達に見せつけた。　兎に角、寝れるところを探しに……いやいや、話が変わりすぎだから。　そうだ、城に行けば寝台とかがあるからそこで寝かせれば良いな。

「問題……無い。　…俺に…任せ…ろ」

そう言い、俺は白蓮さん達が居る城へと歩みを進めた。　桃香さんと愛紗さんは少し怪訝な顔をしながらも俺の言った事を信じてくれたのか、黙って俺の後ろを付いてきてくれている。

鈴々ちゃんは爆睡モードに入ってしまった為俺がおぶって歩いている。　時折寝言なのか「ラーメン……チャーハン……餃子……春巻き……回鍋肉……酢豚……肉まん……焼きｂ」夢の中とはいえ、どんだけ食う気なのこの子！？

そんな事を心の中で突っ込みながらも俺達は白蓮さん達が待つ城へと歩みを進めるのであった。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そんなこんなで、俺達は城内まで来た。途中、見知った兵士達が番をしていたので軽く会釈をしておいた。　何やら眼を引ん剥く位驚いた顔をしていたが、何も言わずに門を通してくれた。

だけれど、何であんなに驚いた顔をしていたんだろう？　もしかして、早々に俺のクビの知らせを聞いたのかもしれない。　いや、もしくは「クビになった奴が女を連れてきたぞ！？」とか考えていたのかもしれない。

いやはや、まずったな……考えてみたらクビになる奴が代わりの人を紹介しても、その人を雇ってくれるのであろうか？　さっきは俺の後釜として兵達をまとめてくれたらいいなぁ～って思っていたんだが、よく考えておけばよかったな。

まぁ、こうなってしまったら仕方ない。一応ダメもとで彼女達の登用を頼んでみるとしよう。

「あの……柚登殿？」

そんな時だ、少し小声で愛紗さんが俺に話しかけてきた。　その顔は何処か不安げと言うか、辺りをキョロキョロと見回して何だか居心地が悪そうな顔をしていた。

「勝手に入っても良かったのでしょうか？　寧ろ、外の者をここまで簡単に入城させるなんて警備に問題があるのでは？」

……何を言っているのこの子は？　俺が居るんだから問題なくね？

って言うか、白蓮さんだってそう易々と外の人を入れないっての。

「問題……ない」

「はぁ…ならば良いのですが」

まだ納得しきっていない表情をしながら愛紗さんは再び俺の後ろを歩きだした。

再び無言のまま歩き出す俺達。　別段、話す内容は無いけれど何だか少し空気が重い感じがする。……何故だろう？

と、そんな事を思っていると白蓮さん達が居ると思われる会議室の前に到着した。扉の前には兵達が数人番をしている。

どうやら、中で何かを話している最中らしい。　恐らく城内が妙に騒がしい事と関係があるに違いない。

「……通…せ」

「いや柚登さん、何だか会議中みたいだし謁見は少し待ってか「――――ハッ！！」……ほへ？」

桃香さんが何かを言っているが、この際無視をしておこう。

「凌統様、御帰還いたしました！！」

そう言いながら兵の一人が扉を開いた。『ギギギ』と少し軋みながら開いて行く扉。

その先には俺の見知った顔が二つほど神妙な面持ちで並んでいた。

「おぉ柚登、漸く帰ったか！」

「全く、兵達を先に帰らせるとは…一体どのようにして油を売っていたのだ？」

うぅ、星さんにさっそく小言をいただいてしまった。やはり此処はクビになる可能性が高い……
俺は少し足取りを重くして進んでいく。　そうして、俺の眼前にいる二人は俺の後ろに控えていた桃香さんと愛紗さん、更に俺が背負っている鈴々ちゃんに気が付いたようだ。

「ん？　柚登、そこの三人はお主のコレか？」

そう言いながら星さんは少しニヤつきながら小指をピンと立てた。
いや、っていうかアンタはどこぞのオヤジかよ……少し心の中で呆れながらも星さんの言葉を少しだけ無視して俺はこう綴った。

「……白…蓮殿……この三人……雇……え」

「……は？」

少しだけボキャブラリーの少ない自分に腹が立ってしまったのは言うまでも無い。それに、三人を雇うに当たっての色々な経緯とかを無視しまくリングな俺自身の発言にビックリだよ！
ほら見ろ、白蓮さんなんか眼をまん丸にして『コイツ何を言ってんだ？』見たいな顔をしているじゃんかよ～
星さんですら口を半開きにして眼をパチパチと驚いている表情を浮かべているし。
えぇ～い、こうなったら嘘八百でもいいや！

「…強…い……ぞ？」

「そうか、柚登がそういうのなら……ってそれどころじゃないんだよ！　近隣に黄巾党が出現したって報告があったんだが、直ぐに消

滅したって訳の分かんない報告が挙がったんだよ。柚登、何か心当たりないか！？」

なんですと！　黄巾党が近くに現れたって！？　俺達がいた場所以外にも黄巾党が現われていたなんて…どんだけいやがるんだよ黄巾党の奴らは。

やっぱり俺命名『Gブリ』とした方が良いんじゃないのか？　こんな名前は嫌だから黄巾党脱退します！　みたいな人が現れるかもしれないし……

「あの白蓮ちゃん！」

「ん？　なんだって私の真名を……ってお前、桃香か！？」

そんな時だ、桃香さんが少し前に出て必死そうな顔で白蓮さんを読んだ。

一瞬だけ白蓮さんは怪訝な顔をしたが、やはり以前、共に勉学を励んだこともあってか直ぐに桃香さんだと気が付いたみたいだ。

「うん、久しぶり！　じゃなかった。あのね白蓮ちゃん、今話していた黄巾党なんだけれどね……多分、柚登さんが倒した人たちの事だと思うの」

「そうか柚登が……ん？　柚登が……倒した？」

「うん、私達が追われている時に――――」

その後桃香さんは俺達が出会った経緯やここに至るまでの過程を話した。

多少誇張表現や俺の知らないようなこともあったが、その辺は空気

を呼んでスルーしたぜ。

……あり？　そう言えばクビについてはどうなったの？

――――　一方その頃…

「あぐあぐあぐ～」

おう、俺は雪花。とある理由で馬騰って奴のところを目指して旅をしている最中だ。

そんな俺も漸く馬騰の所にたどり着く事が出来た。

いや～振り返れば以外と短い旅立ったもんだ。　そうして俺はそいつの城の調理場でメシを食っている所だ。　そして俺の目の前には俺の好物である回鍋肉が山盛りになりおかれている。　勿論、ここの待女に作って貰ったんだがな。

……ん？　この前の賊の首はどうしたかって？　いやな、気が付いたらどっかに落としちまったみたいでよ～　いやはや、柚登にはワリィ事をしたもんだ。アレさえあれば柚登の出世街道に色を付けることができたのになぁ。

「……あんた誰よ？」

そんな時だ、何か獣の耳が付いたかぶりモノをしたガキが俺の近くに寄ってきた。　恐らくこの城に奉公している奴だろう。　そういや、何だかんだ言いながら待女にはひとこと断ったが、それ以外の奴には何も言わずにメシを貰っているんだったな。　……取りあえず一言断っとくか。

「よう、メシ貰ってるぜ～」

「いや、だからあんた誰よ！？」

そういや、今更なんだが此処って馬騰の城であっているのか？　俺の勘で来ちまったからな……まぁ、俺の勘は結構当たる筈だが、一つ確認しておこう。

「此処って馬騰って奴の城か？」

「はぁ？　アンタ何言ってんのよ？　此処は後に世を治める曹操様の屋敷よ！」

……なんだ、やっぱり違っていたのか。確かにやけに早く着いたな～って思っていたんだよな。いや、残念だ。

そうと分かれば此処にいる理由は無いな。

そう結論付けた俺は残っている回鍋肉を勢いよく口に流しいれた。

「（ムグムグ……ゴックン）――――　ご馳走様でした。　それじゃ世話になったな～」

「いや、だからあんた誰なのよ！？」

そうして俺は再び馬騰を訪ねて旅を再開したのであった。

第十二幕　紹介して（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

研修を終えて戻ってきました～しかし、更新速度は相変わらず遅いと思いますのでご了承ください。

因みに『俺はオレ？ここは…異世界！？』のほうは此処で掲載していない話に漸く突入しました。其方も興味がある方は見ていってください。

ではでは、感想&ご意見はいつでも受け付けています。感想を書いて頂くと作者のテンションが上がり、少しだけ執筆スピードが上がるかもしれません。

ではでは、かみかみんでしたぁ～

第十三幕　寝かせて（前書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは。かみかみんです。

何とか書きました十三話！　……話が進まねぇ～そして勘違いがかけねぇ～

それでも見てくださる心の広いお方はお進みください～

第十三幕　寝かせて

――――関羽

成程、柚登殿が昨日言っていた『明日』と言う言葉はこの事だったのか。　恐らく柚登殿が自身が公孫賛殿の下で客将をしていることを告げなかったのは我等の人となりを試したのであろう。

仮にあの場で柚登殿が客将であることを告げたとしたら、我等は間違いなく公孫賛殿に取り次いでもらえるように頼み込んでいた事であろう。　あの時の我等はそれ程までに追い詰められていた。ソレを柚登殿は見抜いたに違いない。

だからこそ、我等を試したのだ。　我等のこの想いが本物であるのかを……だからこそ、あの場で柚登殿は自身の道を告げたのだ。

『自分はこの戦乱の世を変える……お前達にはその覚悟はあるのか？』

もしかしたら柚登殿は内心ではこう思っていたのかもしれない。

そして、我等は柚登殿の想いに添えたのだ。　そうでもなければ、我らがこうして何の障害も無く公孫賛殿にお目通りをして頂ける筈がない。

……だが、あの時柚登殿が流した涙は……あの時は純粋に柚登殿の想いを理解したからこそ流した涙だと思っていた。　しかし、今考えると何故あの時に涙したのであろう？　……いや、柚登殿の事だ、きっと何かしらの理由があったに違いない。　でなければ、あのように綺麗な涙を流せる筈がない。

柚登殿……私は誓いましょう。　桃香様、鈴々と共に貴方を支え、

共にこの乱世に終止符を打つ事を！

――――凌統

……いま、何処かで誰かが俺に対するイメージで盛大に勘違いをしている様な気がする。

やぁ、地デジ化の影響で盛大に電波が入り乱れている凌統だよ。
俺が桃香さん、愛紗さん、鈴々ちゃんの三人を白蓮さんの所に連れてきたところ、何だか話が進みに進んで三人を迎え入れるという方向で話がまとまったんだ。　これでやっと俺もお役御免でクビにしてもらえて、これからの夢見る生活について想いを馳せていたんだが……

「柚登、三人の面倒はしっかりと見ろよ！」

――と、白蓮さんからお言葉を頂いちまったんだ。　……驚き桃の木山椒の木だろ？　大丈夫だ、俺も一体何を言われたのかを理解するのに三刻位有したんだからよ。
しっかし、あれだね？　まさか無断で一泊してきたのに処罰も何も無しって事についてはマジで驚いたね。　だって、普通の軍だったら何かしらの罰があるって昔読んだ本に書いてあった気がする。
寧ろ、報奨は何が良いか聞かれてしまった。　……周りの人は当然って顔をしていたが俺としてはある種の天国から地獄に落とされた瞬間だったけれどね。

そんなこんなで俺は、迷惑をかけた白蓮さんへの謁見を済ませた後、別の意味で迷惑をかけた副長さん達の居る兵舎を訪れた。
しかし、此方はまた別の意味で行きにくい。　だって、俺につい

て行くって言ってくれていたのにソレを無理やり帰らせたんだから。
絶対的に『あぁん？　重役出勤ですなぁ上司のくせに。　それに、先に帰らせた割に何にもなかったじゃねぇか』とか言われた日にはマジで号泣してしまいそうだ。　きっと心が折れて、再起不能状態になることだろう。
……うわ、そういう事を考えたら段々と胃が痛くなってきたよ。
この時代って胃薬とかあったっけ？

そんな感じで副長達に会いに行くのを少し躊躇しながらも俺は兵舎へと近づいて行った。　途中、鈴々ちゃんを未だに担いだままだという事に気が付いたが、まぁその辺は気にしないでおこう。　……だってさ、今から俺の部屋に行って寝かせるのと兵舎に行くのって明らかに兵舎に行った方が近いんだもん！
そんなこんなで俺は鈴々ちゃんを背負ったまま兵舎へと向かったんだ。

人と言うのは不思議魔生き物だと思う。　つい先ほどまで不安いっぱいの俺だったが、いざ扉の前に立つと以外と震え諸々は収まり、何だか頭の中もさえている様な気がする。　……さぁ、此処まできたら覚悟決めちまえよ！　と自分では無い誰かが言っているかのような錯覚にさえ陥ってしまう感じがする。
実際は誰もそんな事は言っていないんだけれど。　そして俺は震えの収まった手で扉に手をかけ…『バン！』――　るまえに扉が開いた。
「凌統様、お待ちしておりました！」
そして、目の前にはすっごく良い笑顔で俺を出迎えている副長さんの姿が……。

いや、騙されるなよ俺。　一見、凄く機嫌が良さそうに見えるが、これはきっと副長さんの罠に違いない。　少し優しくしておいて、後からねちっこく攻めてくるという寸法なんだな？

――フフフ、この凌統をなめて貰っちゃあ困るぜ。　こんな事もあろうかと俺は秘かにとある作戦を考えていたんだ。　さっきも言ったが、こう見えても俺は徹底的に言われるとガチでへこむ人間だ。

つまり『俺を責める＝ガチでへこむ』×『ガチでへこむ＝仕事が手につかない』×『仕事が手につかない＝サラリーマンとしては致命的』＝ユーアー・ファイアー！って寸法だぜ！！

フッ……我ながら完璧すぎる作戦に惚れぼれするぜ。　……さぁ、副長さんよ！　朝帰りした俺の事を罵るんだ～！　そうすれば俺の術中にはまったも同「お疲れさまでした凌統様！」…然？

……あり？　何だか副長さんがすっごく良い笑顔で『お手柄でした！』みたいな事を言いそうな顔をしているんだけれど？

そして、副長さんの声に反応したのか凌統隊の面々が兵舎から外に出てきた。　……つーか、別に皆さん方が出てこなくてもいいんじゃね？　って、更に何にも言っていないのに俺の目の前で整列し始めたし。

俺の背中に嫌な汗が流れるのが感覚で分かった気がする。　うわ～今からあれか？　一人ずつ俺に罵倒していくって言う寸法か？　クッ……鬼畜すぎやしませんか皆さん！？

そんな感じで俺が身構えていると、始めに副長が口を開いた。

「――――――――申し訳ございませんでしたぁぁぁぁ！！！」

『申し訳ございませんでしたぁぁぁぁ！！！！』

……はい？　い、一体何が起こったというのですか！？

副長が口を開いたと思った瞬間、副長を含めた凌統隊の面々が地面に膝をつき、見事なまでに整った土下座をしだした。

もう、この時点で俺には何がなんだかさっぱりな状況だ。　っていうか、俺なんか謝られるようなことしたか？　……いや、寧ろ俺が謝るべき事をした覚えはあるんだが。　おとと、何か急すぎて混乱してしまったけれど、流石に数十人の土下座をこのまま放置しておくわけにはいかないよね。

「顔を……上げて…くれ」

「いえ！　我等一同は、凌統様に申し訳が立ちません！！」

代表して副長が頭を下げたまま話しだした。　って、皆さん一糸乱れずに地面に額を擦りつけているよ。　……何だかこの場面だけ見ると俺が悪い事をしているように見えるな。

「……寧…ろ……俺が…謝らね…ば。　戻るの……が…遅れた。すまな……い」

そう言って俺は土下座とまではいかないが、って言うか鈴々ちゃんを背負った状態で土下座するのは流石に難しいので、軽く頭を下げた

「か、顔をお上げください凌統様！！　私は…いえ、我々は恥ずかしいのです……きっと凌統様はまだ戦いに不慣れな我々を見て、賊軍に耐えうる力が無いと判断されたのでしょう。　そして、我等には何も告げずに御独りで賊軍との戦いに向かわれた」

……え、何その勘違い？　俺はただ単にもよおしただけだから先に帰らせたんだけれど。

「しかも、そこでは女性三名をお助けするという勇姿を披露されたとの事……ですが、そんな中我等は何も知らずに安全な地にて、のうのうとしていたことが……！！」

……二回目だけれど。　え、何その勘違い？　その後も副長さんの独壇場であり、『凌統様御独りにお任せするなんて』とか『我等にもっと修練を』とか『我等一同、凌統様の為に命をはる』とか兎に角、謝ったり頼んだり、命をはったり等の話を永遠と続けていた。

むしろ俺としては、どうしてこんな話になっているのかが疑問すぎて仕方がない。

その状態が半刻（1時間）程過ぎたあたりであろうか。　幾ら時間がたっても副長の話が終わらないので、流石に土下座をキープさせておくのも可愛そうだと判断した俺は、こう切り出した。

「いや、これ…は（トイレに行くことを伝えなかった）俺の……せい…だ。　しか…し、それでも……お前達…の気が……晴れぬ…と言う…のなら…今後…（トイレに）行くとき…は伝え…よう」

「――――――――　ハッ！　畏まりました！！」

……何だか、ちゃんと理解したのかが気になるけれど、まぁいっかな。

「――――んにゃぁ…うるさいのだぁ」

おっと、どうやらあまりにも周りがうるさすぎた様で背負っていた鈴々ちゃんが起きてしまったようだ。

俺は鈴々ちゃんを背負ったまま軽く首を捻り、後ろの方を見た。

如何やらまだ眠気が取れていない様で頻りに目を擦っている。

……あれだね。決してノータッチロリータ思考の俺だけれど、こういう仕草を見ると少しだけ心がときめいちゃったりするよね。　……まぁ、顔には変化は見られないけれど。

「起きた…か？」

「うにゃぁ？　何で鈴々お兄ちゃんにおんぶしてもらっているのだ？」

如何やら少しずつ自分が置かれている状況を理解してきたようだ。

まぁ、さっきまで街中でに括っていた記憶しかないから無理も無いよね。

脳内で少し笑いながらも俺は鈴々ちゃんの問いかけに答えることにした。

「道端……で寝た…ら風邪引…く……桃香、愛紗の所…に行く…か？」

しかし、如何やら自分の仲間の所に行くよりも今の鈴々ちゃんに

は眠気が勝っていたようで…

「……いぃのだぁ……ふぁ～…おやすみなさい…」

そのまま再び夢の住人に……って、ホントに寝ちゃったよこの子。

おっと、そう言えばこの子を寝かせようとしたんだったな。

「あの凌統様、その方は？　先程から気にはなっていたのですが…」

如何やら鈴々ちゃんの事には気が付いていたようだが、聞くタイミングを逃していたようだ。　副長以外の面々も俺の背中で寝ている鈴々ちゃんの方を見ている。　そういえば、まだ彼女の紹介をしていなかったな。

「彼女は…張飛、いずれ……は将にも…なれ…る器だ。　客人……だから……丁重にもてな…せ」

……何やら凌統隊の面々が息を飲んだのが凄く気になる今日この頃であった。　あ、勿論その後は鈴々ちゃんを彼女に割り振られた部屋の寝台までちゃんと運びましたよ？

――――一方その頃…

この日、曹操の屋敷は朝から騒がしかった。　理由は言うまでも無く今朝進入したとされる女の捜索だ。　女の目撃者は二名。　一人は女に食事を用意したという侍女、もう一人は『戦乱を凌ぎ全てを統べる者』について徹夜で調べ物をしている最中、小腹を満たすために調理場を訪れた旬？だ。

現在玉座にはこの屋敷の主である曹操、楽進、そして目撃者の一人である旬？がいる。

「華琳様、桂花様の言う女の姿はどこにも見当たりません」

「そう、ご苦労様凪。　……それで桂花、その者は何をしていたの？」

「ハッ！　侍女に問いただしたところ、調理場で腹ごしらえをと。侍女もその堂々とした態度から華琳様のお客人だと判断したらしく……」

「そう……黒髪を後ろで束ねた…ね？」

「華琳さま～！！」

そんな折だ、けたたましい音と共に夏候惇が入室してきた。

「春蘭、何か分かったのかしら？」

「いえ、それが桂花の言う女は分からなかったのですが、こんなモノが……」

そう言いながら夏候惇が右手を掲げた。その右手に握られていたのは……

「ちょ！？　華琳様の御前に生首持ってくるなんてアンタ頭相当おかしいんじゃないの！？」

悲壮な顔をした中年男の生首であった。

「し、仕方ないだろう！　こんなモノが城内に放置されていたのだ。私だって一瞬目を疑ったんだからな！」

その生首は最近切り取られたものなのだろうか。　肌の色は血が抜け切り白くなっているが所々腐敗が進みかけてはいるが、未だに腐敗していない個所も見受けられた。　流石の夏候惇も素手で持つのは少し抵抗があったのだろうか、自身の手に布を巻きその手で首を持っている。

「……あれ？」

「どうかしたの凪？」

そんな折、生首を見ていた楽進が何かに気が付いたようである。

「いえ、この人物もしかしたら以前謎の人物が討ち取った者ではないかと……」

楽進は少し自信なさそうに、自身の記憶を辿るかのように少し瞼を閉じながら答えた。

「謎の人物と言うと……秋蘭が言っていた三節棍で賊軍をなぎ倒したって言う『アレ』かしら？」

「はい。　私断言はできないのですが、この顔はそこで見た様な気が……」

「……確か貴女もその人物を見ていたわよね？」

「あ、はい。遠目ではありますが確認はしています」

「その人物は黒髪で髪を後ろで束ねていた女性だったわね？」

「はい……もしや今朝の人物は！？」

「……えぇ、その可能性が高いわね。　桂花、捜査範囲をさらに広げなさい！　今朝の事だからまださほど遠くへはいっていない筈よ！！」

「御意！」

「凪、貴女は真桜・沙和と共に警備を強化。　該当しそうな人物を見掛けた場合は全員城に招きなさい」

「――ハッ！！」

「……あのぉ華琳様？」

「何かしら春蘭？」

「結局のところどうなったんですか？」

一人話について行けなかった夏候惇は真顔で曹操に事の進み具合を聞いていたりする。

「……はぁ、貴女はその手に持っているものを処分なさい」

「……何だかわかりませんが、わっかりました！」

……最も、説明した所で確実に話には着いて行けないと判断した主人によって違う任を言い渡されたのは御愛嬌だったりもする。

第十三幕　寝かせて（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

さてさて、次話からは少し日常パートを書いて話を進めていきたいと思います。

ではでは、感想＆ご意見＆アドバイス等は何時でも受け付けております。

一言でも残して頂くと、作者のペースが上がるかもしれません。それではかみかみんでしたぁ～

第十四幕　取り締まりにて

――――凌統

やぁ、凌統だよ。　桃香さん達が来てから数カ月が経過した。しかし、それだけ時間がたっても俺は未だに白蓮さんの所でお世話になっている。

あの時、悪質な横綱出勤をして色々な人に迷惑を掛けたのに俺をクビにしなかった白蓮さんの優しさに俺はえらく感動したからだ。

当時、俺は自分の平穏無事な毎日を暮らす事で頭がいっぱいだったのが恥ずかしくなった位だ。

だから、その優しさに報いる為に俺は働きまくって態度で返そうと決めたんだ。

そして今、仕事の一貫として街中の警邏をしている真っ最中というわけさ。

警邏って言うのは簡単に説明するとパトロールと同じなんだ。つまりは警察官と同じような仕事ってわけさ。　……この時代の警察って資格とかいらないっていう事実に驚いたのは俺だけの秘密だ。

さてさて、話を戻そう。　警邏に出て少し驚いたのだが、この時代は現代で言う引ったくり犯諸々の犯罪の件数が半端なく多いんだ。

いや、ひとむかしに比べたらだいぶ減ったんだがね。　この数カ月の間で、曹操が黄巾党を率いていた張角、張梁、張宝を捕えたと知らせが国中にわたった。

ソレを機に黄巾党は急激に衰退していき、各地では賊による被害が少なくなっていった。　……しかし、人はおろかな人種で脅威が去ったと思ったら引ったくりやらの犯罪が増え始めたのだ。

まぁ、殺しとかに比べたら幾分か凶悪さは低くなったけれど……しかも、黄巾党の残党も結構な数がいるもんだからソレを捕まえるのも結構骨が折れるんですよね。

そして、その余波は白蓮さんがおさめるこの地も例外ではなかった。

城下町だけでもかなり敷地面積が広いから、ある程度は予測していたんだが一日で、百件を軽く超える位の検挙率だ。

たぶん、検挙されずに逃げ延びている数をかぞえると恐ろしい犯罪数になると思う。

しかも、この異常ともとれる状況がこの地に暮らしている人たちにとって『当たり前』な光景になっている。

このままでは、俺の平穏無事ライフプロジェクトに重大な欠陥をつくってしまうことになる。

ぶっちゃけ、そんな物騒なところに住みたかねぇです。

そんなこんなで俺が出した一つの結論が……

「あのぉ…柚登さん？」

「何……だ？」

「警邏が重要なのはよ～くわかるんですけれど、何も愛紗ちゃんと鈴々別れて、しかも路地裏の見回りをしなくても良いんじゃないのかと…」

俺と桃香さん、愛紗さんと鈴々ちゃんの二手に別れて町の警邏をしようと言うものだ。

その際、ある程度この町の地理が解る俺は裏通りを。　まだ来て日が浅い愛紗さん達には表通りを回って貰っている。　因みに、何故この組み合わせかと言うと単純に効率を重視したためだ。

こんな事を言っては失礼だが、俺が愛紗さんと組んだ場合、果たして桃香さんに鈴々ちゃんを抑える事が出来るのかと言う事だ。
……俺はどうなのかって？　いや、俺だと鈴々ちゃんの我儘とか直ぐに聞いちゃいそうだから謹んで辞退させていただくよ。
取りあえず、そうなると見た感じ厳しそうな印象を受けた愛紗さんなら鈴々ちゃんを抑える事が出来ると判断したんだ。
しかし、これを一字一句三人に伝えるには俺のコミュニケーション能力が低すぎるため、正しく伝わっていない気もするけれど……まぁ、その辺は割愛しておきましょう。

「――そうだ柚登さん。　星ちゃんに聞いたんですけれど、柚登さんってお母様と一緒に旅をしていたんですか？」

警邏を始めて一刻もたたない内に桃香さんは俺の母について話を聞いてきた。
如何やら桃香さんは俺とは違って積極的にコミュニケーションをとれる人種らしい。　――べ、別に羨ましくないんだからね！　ただちょっと俺にもそのコミュニケーション能力を分けてほしいと思っただけで……やめとこう虚しくなる。

「……あぁ、豪…快な……人…だ」

「へぇ～……やっぱり柚登さんみたいに寡黙な人なんですか？」

寡黙？　あの母が？　いやいや、その言葉はあの人には程遠い……寧ろ対極に位置する言葉だと思いますよ。

「いや……鈴々の…ように……賑やかな…人…だ」

「……ごめんなさい、色々と想像できないかも」

まぁ、息子がこんなコミュニケーションが欠落しているからね。
親が賑やかな人だなんて想像できないよな。
そういや、死んだ親父も完黙とは程遠い人だったな。　っていうか、俺や母に対して当たり散らしている印象しか残っていないという事実だけでビックリなんだけれど。

「そうだ、柚登さんが使っている三節棍……でしたっけ？　それはお父様から御指導されたんですか？」

「……いや、母…だ。　握り方しか……習っていな…い」

――――一方その頃…

「へ、へっ……ぺぷしっ！！　うぉお～ぉ……ったく、何だぁ誰か俺の噂でもしてんのかよ？　全く、人気もんは困っちまうぜ」

こんな事を言っているシングルマザーが居たとか居ないとか……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

……何だか今誰かが何処かで盛大に炭酸飲料の名前を叫んだように感じたんだが、気のせいでしょうか？　俺的には王堂のコ……

まぁ、そんなどうでもいい事はさておき、俺が殆ど三節棍を習ったことが無いというのは事実だ。
確かに俺の三節棍のお師匠は母だけれど、ソウル師匠は無双さん

の凌統な為、この世界では殆ど我流と言っても良いかもしれない。
母も俺の三節棍の使い方を見て殆ど口をはさんだ事が無いから別に問題は無いと思うんだけれど……
ただ、俺の記憶を頼りに使っているため多少は粗がある。　……まぁ、その辺は俺のチート気味な身体能力でカバーだぜ！

そう言いながら俺は腰に差してあった三節棍を握り抜いた。　なんて事は無い、ただ単に桃香さんに俺の三節棍の腕前を見てもらおうと思っただけだ。　丁度路地裏で周りには誰もいないしね。
……べ、別に良いじゃねぇかよ！　俺だって女の子の前では少しテンションが上がるんだぞ！　少しはカッコいいところを見せたいじゃんかよ！

「――――――――ッ！！」

……ただ、何でか桃香さんが息をのんだのが気になる所存ではありますが。
そして、俺が手にした三節棍を振った瞬間……

「――げはぁ！」

「――ヒッ！？」

「……」

あ、ありのまま今起こったことを説明するぜ。　俺が三節棍を振った瞬間に、路地の細い道から男が飛び出してきたんだ。

そして、俺の三節棍が奴の脳天にクリティカルヒット！こうかはばつぐんだ状態になっちまったんだ。

頭から噴水のように血を流しながら地面へと倒れていく男の姿は、まるでビデオのスロー映像でも見ているかのような光景だった。

夢や幻でもない。　恐ろしいモノを……イヤイヤイヤ、現実逃避しちゃいけないな。

と、取りあえず落ち着け俺！　いつもそうだけれど、俺の三節棍って不幸しか呼び寄せてなくないかな！？

って言うか一般人に三節棍が当たっちまったんだ、それどころじゃねーーーー！！

俺は慌てて地面に倒れ込んだ男を開放しようと近づいた。　その刹那……

「待てぇぇぇ！！」

「待つのだぁぁ！！」

何処か聞きなれた声をした人たちが男が出てきた路地裏から現れた。

「愛紗ちゃんに鈴々ちゃん！？」

「ハッ、桃花様に柚登さん！　今ここに怪しいおとこ……が……」

「……ぶっ倒れているのだ？」

状況を整理してみよう。　路地から男の人出現。　俺、その人を三節棍で半殺し。　同じ路地から愛紗さん&鈴々ちゃんが血相を抱えて出現！　『あ、その男は！？』みたいな表情で地面にぶっ倒れている男を見ている。

……うわ、何か知らねぇうちに不審者捕まえてねぇか俺！？

「流石は柚登殿です。　こやつは表通りにて老婆の持ち物を強奪した者で……」

「えっと……あ、財布見っけなのだ！　愛紗、鈴々はこれをおばあちゃんに届けに行ってくるのだ～」

そう言い残して返答を聞かずに鈴々ちゃんは同じ路地を通り姿を消していった。

「あ、コラ鈴々！　……全く、話を聞かずに」

「まぁまぁ、愛紗ちゃん。　それより、この人を早く衛兵に引き渡しに行こうよ」

そう言って愛紗さんは不審者の足を持ち、引きずりながら同じく

路地に消えていった。
そして、その後ろを桃香さんが着いていって……あれ？
気が付いたら俺は路地裏で一人取り残されてしまっていた。　あ、あれ？　俺ってば桃香さんと一緒に警邏をしていた筈なのに、何で桃香さんが愛紗さんについていってしまったのですか？
あれか、俺の事が嫌いで実は早くこの場から離れたと思っていたのですかな？

「……解せぬ」

少しだけ、ほんの少しだけ心の汗が目元から溢れ出てきそうだったのを俺は根性で押しとどめたのは言うまでも無い。
……しかし、このままでは埒が明かないので俺は一人寂しく警邏を再開する事に決めた。

・　・　・　・　・

さて、頭を切り替えて再び警邏に戻ろう。　まぁ、確かに以前と比べたら軽犯罪が増えてきているご時世だが、それとは別に黄巾党の残党が治安を乱しているというのもまた事実。　……普通に生活している奴がいるのもまた事実なんだけれどね。
ふむ、何が言いたいのか分からないかな？　大丈夫、俺もわかっている様で分かっていない節があるし。　それにだね……

「おや、柚登ではないか。　警邏の最中か？　それは重畳」

……真昼間から酒をかっくらっている星さんにあっちまって色々

と混乱している節がある訳ですよ。
しかし、俺は仕事の最中だというのに良い御身分で……あり？
そう言えば、星さんがまともに仕事をしているのを見たことが無いのは気のせいでしょうか？

「ん？　どうした、難しそうな顔をして？」

「いや……（星さん）やる事が…な…い」

やっべ、言ってから気が付いたけれど、一応は仕事場の先輩なんだし敬うべきだったかな？
俺は自分の言った事を少し後悔をして、星さんから視線を外し明後日の方を向いた。

「――――ふはははは！　良いではないか、やる事が無いというのはそれだけ平和の証し……ん？」

星さんは俺が視線を外した事に疑問を思ったのだろう、少し怪訝そうな顔をして俺が向いた方を見た。
いや、別にそちらを見ても何も無いんだけれど……

「――ふむ、流石は柚登……と言った所だな。　成程、一般人に紛れ込んでいるが血に飢えた獣のようなに匂いがするな。　黄巾党の残党……と言ったところか？」

え、星さん何を仰ってんのですか？　残党って…「きゃぁぁぁぁぁ！！」……ほへ？
俺が向いている先とは反対方向で女の人の悲鳴が聞こえた。　慌ててそちらを向くと……

「チッ、一人じゃなかったのか。　柚登はあの女性の方を頼む、私はあの一般人に紛れている奴を！」

そう言って星さんは俺が始めに見ていた方向へと走り去っていった。

……え、俺がアレを治めないといけないの？

周りを見回すも、そんな直ぐには衛兵も駆けつける事は出来ない為か野次馬に溢れかえっている。

何だか今日は厄日かもしれないなと内心で思いながらもそれを顔に出すことなく、俺は仕方なしに女性を人質に取っている男に近づいた。

男は女性の首元に小太刀を突き付けているようだ。　しかし、誰もいない中で何でこの男は急に人質を取ったのだろう？

「な、何でテメェは！」

「……役…人…だ、その人を離…せ」

「なんだと！？　――――チッ早過ぎるじゃねえか、これでは我等の……いいや、此方には人質もいるんだ何も出来るわけねぇ。　オイッお前！　馬をよこせ、あと食糧もたんまりと持ってこい！」

俺の言葉を聞き男は一瞬動揺し、小声で何かに対して愚痴を言っているようにも見えたが、直ぐに俺に向かって要求を伝えた。

「無理……だ」

「――――んだっと！　この女がどうなっても良いのか！？」

そう言って小太刀を女性の首元にあてがった。　女性が『ヒッ！』

と息を声が聞こえた。　それにしても、気丈な女性だとおもう。
人質に取られた時は甲高い悲鳴を上げていたが、小太刀がさっきよりも首元に近づいているのに悲鳴を上げないなんて……
きっと、彼女は肝が据わっているのだろう。　見た目２０代半ばくらいの女性だが感心するなぁ……っていうか、俺ってかなり薄情な事を言ってねえか？
人質交換するのにその材料を全て拒否っちまったんだから……普通に考えたらあの女性が殺されるんじゃね？
いやいや、俺にだって断る理由はあるんだぜ！　だって、急に馬とか食糧って言われてもこの場に俺以外の城に務める者がいない事、流石にこの場を放置して城に戻るわけにもいかないし……それに、こんな事を言っちゃあれだけれど黄巾党に物を与えたと言うだけでこの時代は罰則の刑がある厳しい時代なのだ。
たとえこの場で物資を渡してあの女性が助かったとしても間違いなく渡した方にも罰が下る。　……全く、誰だよコンな条例出したのは！？

まぁ、そんな条例諸々の所為で少し無理な状況なのだ。　仕方ない、得意ではないけれど映画で鍛えられた俺のネゴシエータースキルを見せてやるぜ！　……まぁ、映画だししかも作中では結構三枚目な主人公の話だったけれど。

「……取りあえ…ず、話し……合い…といこ…う」

「話す事は何もねぇ！　さっさと俺の言った物を持ってこい！」

「まぁ、落ち着……け、腹減った…なら…これでも……食…え」

うんうん、腹が減るとイライラしたくなるよね？　俺もそうだもん。　取りあえずは腹ごしらえといこうぜ。

俺はそんな思いを込めて以前鈴々ちゃんにも食べさせたことのある『アレ』を懐から取り出した。
しかも、今回はスゲェぞ～以前のは子豚の丸焼きだったけれど、今回は子じゃなくて親なんだからな～
どうやって収納したかは……禁則事項だぜ！

「ちょ、おまっ、な何で懐からそんな肉の塊が出てくるんだ！？色々とおかし過ぎるだろう！！」

「気に…する……な、受け取……れ」

「おいコラ！　こっちに投げん……クソッ！」

俺は懐から取り出した豚の丸焼を男に向けて投げ渡した。　流石に色々と予想外の事が重なったのだろう、男は咄嗟に武器と女性を離して肉をキャッチしようとした。　……あれ？　もしかしなくても今がチャンスなんじゃね？

「……詰み…だな」

「う、ウソだろ…おい」

あの後、俺が思っていた以上に事はスムーズに運んで行った。何を思ったのか豚の丸焼きを受け止める為に色々なものをすべて手放して、尚且つ飛んできた物の受け止めたのは良いけれど、重量に耐えきれずに地面に潰れるとかマジで貧弱すぎね？

そんなこんなで、俺が思っていた以上に事は簡単に運んでいった。

そして、今俺の目の前には縄でグルグル巻きにされた男が絶望に染まった顔をしながら地面に座り込んでいる。

傍らには掴まっていた女性も茫然とした表情で座り込んでいる。

……ふむ、これは思った以上に肝が据わった女性だな。　解放されたというのに涙の一つも流さないなんて。

その後、駈けつけた衛兵により黄巾の残党である男は牢へと連れて行かれた。　そして、女性の方は俺と、駈けつけた副長さんと一緒に自宅まで送り届けている最中だ。

しかし、何でか分からないけれど女性は凄く挙動不審な感じで俺達の前を歩いている。　なんていうか……あたりをきょろきょろと見回したり、後ろを歩いている俺達の方を向いて凄くぎこちない笑みを浮かべたり。

そんな女性の様子に副長の表情は今まで見た事がないくらい硬くなっている。

……ゴメン、この空気は小市民の俺には耐えられませんがな。

「……副長」

「何でしょうか凌統様？」

「あの男……死罪だな」

ごめんなさい、かなり暗い話題になっちまったけれど正直話すネタが余りねえです。　仕方なしに俺は話をするべく先程捕まえた男について副長と話をする事にした。

「そ、そうですね、黄巾の生き残り……余程優秀なものでなければ死罪はまのがれぬでしょう。　確か、趙雲様が捕えた輩の言うには此処に紛れ込んだのは三人だという話です。　凌統様が捕えた男を含めても後一名何処かに隠れている可能性があると思われますね」

おぉ～副長さん、すげ～説明キャラだな。　しかし、何だろう？　今の話を聞いて女性の方がすっごく震えているように見えるんだけれど？

副長も何か変な空気を感じ取ったのか、少し身構えている。

しかし、俺はお構いなしに話を進めた。

「そいつ…を……見つけた…らどうす……る？」

「恐らく生死は問わないでしょうね」

まぁ、要するに捕まえるか殺すかって事ですかな？

……ねぇ、明らかに今の話を聞いて前の女性の動揺っぷりが半端無い事無いですか？

何だか、俺だけでしょうか？　かなり黄巾の残りの目星がついてきたのですが……

「そうですね、自首すれば恐らく温情が…「私が残りの一人です～！！」……見つけてしまいましたね」

気が付いたら女性が地面に頭を擦りつけながら見事なまでの土下座を決め込んでいるのに驚きなんですが……まぁいっか。

第十四幕　取り締まりにて（後書き）

ありがとうございました。
中々話が進みませんね～しかも、グダグダでオチも殆ど無いと来たもんです。
もう少ししたら董卓編を書いていこうかな～
ではでは、これからも応援よろしくお願いしますね～

第十五幕　鍛えて（前書き）

少し強引に話を飛ばしました。
長い目で見守って頂けると幸いです

第十五幕　鍛えて

やぁ、数日前に町に潜りこんでいた黄巾党の残党を副長との見事な連係プレーで捕えた凌統君だよ。　……やっべ、『プレー』って発音が少しエロくね？　何だか俺と副長との間に薔薇の花が出現しそうな感じじゃね？

――――はいそこ、俺以上に危ない妄想は禁止だぜ！　……ごめんなさい、少し危ない妄想をしてしまいました。

さてさて、あの後なんだが仕事の一環と言う事で白蓮さんから報奨等は頂く事は無かった。副長も『貰わなくて当然』みたいな態度を取っていたので何も渡していない。

ただ、副長を含めて城の方から何やらキラキラした眼差しで見られたのが気になるんだけれど……まぁ、そんな細かい事は気にしない！

そして、あれから数日が経過した。　あれからは黄巾党に会うことも無く、この数日は何時もの通り町に出て警邏の真似事をしたり、いつ起きるやもしれぬ戦（いくさ）に備えて凌統隊の隊列を揃えてみたり、隊内では戦いの錬度がバラバラなので個々の戦闘能力を上げて、なるべく一定のレベルにするべく模擬戦を行ったりしていた。

心からスカ〇ターが欲しいと思ってしまったのは決して俺だけでは無い筈だ。

あ、そうそう黄巾党討伐の際に俺達に新しい仲間が出来たんだ。

はい、見た目はロリっ子×2な女の子達です。　……いや、驚き桃の木山椒の木は嫌いだけれどビックリじゃね？

この時代って性別や年齢問わずに能力が働く事が出来たんだね。

因みに彼女らの名前は諸葛亮、鳳統って言うんだって～　……えっ？

ま、まぁ細かい事は気にしないほがいいかな。　そもそも劉備や関羽と言ったビッグネームが女の子になってしまっているんだ。今更、孔明や鳳統がチミっ子だとしても気にしちゃいけないぜ！

ただ、俺の顔を見た瞬間、すっごく怯えて泣きそうな顔になってしまったのを見て心の奥底がえぐられたような感覚に陥ったのは俺だけの秘密だ。

そんなこんなで、今は早朝。　俺は一人調錬場で三節棍を振るって自主鍛練を行っている最中だったりする。

早朝と言う事もあって、まだ気温は低く少し肌寒い。　しかし、俺は身体を動かして汗をかいているため肌着一枚と薄着だったりする。

そして、鍛練でイメージするのは言うまでも無く無双さんの凌統をイメージする。　そういえば、この体になって無双のスキルとか使えるのかな～って思って試してみたんだけれど、中々成功しない。

確か、凌統のスキルは移動スピードが格段に上がる『神速』ってスキルなんだけれど、常日頃神速並のスピードが出せる俺には使えないってことなんでしょうか？

あと、ゲージを溜めて放つ無双乱舞もやってみようと思ったんだけれど……やり方ほとんど覚えてねぇんだよね。　まぁ、これについては後々オリジナルっぽく自分で作ってみようと一考してみたりした。

そんな事を考えながらも俺は自分の体の一部のように三節棍を扱い続けた。　ガキの頃、武器は身体の一部として使えと母に口酸っぱく言われていたからね、それに前世で史上最強の弟子を作っちゃったぜてきな漫画の師匠の一人がそんな事を言っていたような気もする。

とは言っても、特に特別な事をしている訳ではない。　調錬場に立っている木を軽く蹴って、落ちてくる葉っぱを一枚ずつ三節棍で

弾き飛ばすといった地味な作業をするだけだ。
しかし、これが一度やり始めると意外と面白いんだよね。『あ、今当たった～』とか、『からぶった～』とか、色々と考えている内にのめり込んでしまうんだ。
そんな状態が一刻程経ったであろうか、太陽は既に地平線から顔を出して早朝と呼べる時間ではなくなり、三節棍を振るいつづけた俺は少し疲労感を感じていた。
次の後一枚葉っぱを弾いたら終わりにしよう。　俺は自分の中でフィニッシュのタイミングを決めて、最後の一振りに臨んだ。　自然と身体全身に込める力も強くなったように感じる。

しかし、そんな時悲劇は起きた。　三節棍を少し振りかぶった瞬間、三節棍についた汗で滑り、俺は三節棍を握りそびれてしまったんだ。　今まで何度も見た事がある様な光景であったが、慣性の法則にしたがって三節棍は俺の後方へと飛翔していった。
ま、不味いぜこのパターンは……何時ものパターンだと、このまま三節棍が誰かしらにクリティカルヒットを決め込んでいる可能性が大な訳でして……

俺はおそるおそる、三節棍が飛んで行った後方へを身体を捻った。
そして、そこで俺が見たのは……

「流石は柚登殿です、私が背後から近づいた事を気付いていたとは……」

青龍偃月刀を手にした愛紗さんとその愛紗さんの傍にある柱へとめり込んでいる懐かしき俺の三節棍だった。

いや、そんな事よりも当たっていなくて良かったぁ～　下手すれば女性である愛紗さんに当たっているかもしれなかったという状況に肝を冷やしたが、ソレと同時に誰にもあたっていなかったという事実に俺は安堵の表情を浮かべた。

「いや……たまたま…だ」

「また御謙遜を。　……そうだ柚登殿、折角ですから私と一手いかがですか？」

謙遜してねぇし！ってか何が折角から一手に続くのか果てしなく疑問に感じちゃいけないのかな！？

しかし、そんな俺の心の声を無視するかのように愛紗さんは柱に突き刺さった三節棍を引っこ抜き、俺の方へ投げよこした。　クルクルと回転しながら弧を描くように俺の方へと飛んでくるその様はさしずめ亀の怪獣が空を飛ぶような様だったと敢えて記しておこうと思う。

そして、三節棍が俺の手に収まった瞬間、俺の返答を聞かずに愛

紗さんは自分の武器を構えてこのように言った。

「では――――関　雲長……参ります！」

……これは、間違いなく逃れたら空気読めねぇパターンだよな？

はぁ、俺ってば自負共に小し（ｒｙ

仕方ない、気は進まないけれど頑張ってみよう。　そして、出来るならばある程度接戦にして負けないとね。

だって、そうしないと手加減した～とかで、もう一度やらねばならないかもしれないからね。

「凌　公積……いく…ぞ」

そうして、何が何だか分からないうちに俺は愛紗さんと手合わせをする事になってしまったのだった。

あ、折角だしこれを期にオリジナル乱舞でも考えてみようかな？

――――　関羽

見事な武だ。　私は早朝、調錬場でとある御方の鍛錬の場を蔭ながら見学させて頂いている。　その方は扱う事すら難しいとされている三節棍をまるで自分の手足のように自由自在に扱っている。

そして、空より舞い落ちる葉を器用にも一枚ずつ弾いている。

三節棍を一振りすれば一枚、また一振りすれば一枚……それは簡単そうにやられているが、途轍もなく困難であるという事が同じく武を嗜んでいる私は理解している。

空より舞い落ちる葉は一葉に非ず、その中から一枚だけを……恐らくあの御方は狙いを定めながら行っているのであろう。　流石は柚登殿だ。

その光景を目の当たりにした私は自身の力が柚登殿とどれほどかけ離れているのかを確かめたいという衝動に駆られた。
一介の武人ならば誰しも思う事であろう。　目の前のいる……自分と同じく武人である方とどれほど力の差があるのかと……
そして、私は自身の気配を殺しながら柚登殿に近づいた。　残念ながら隠密術には長けていない為、全ての気配を殺す事は今の私には出来ぬことかもしれないが、死角から柚登殿に気付かれずに傍まで歩みよる事が出来ると私は思っていた。

しかし、そんな私の慢心は一瞬後には崩れ去っていた。　突如として柚登殿が先程まで見られぬ行動を……柚登殿が愛用している三節棍を大きく振りかぶったのだった。
その姿は先程まで感じられた繊細な動きではなく、まるで何かを暗示させるかのような……そう、まるで今から何か特別な事を行うと誰かに言い聞かせるようにも感じられた。
そして、柚登殿はその三節棍を手放し、投擲した。　――――私のいる死角へと。

余りの突然の出来事で、私は一瞬身体を強張らせてしまった。
しかし、その一瞬が自分の首を絞める結果となってしまったのだ。
柚登殿が投擲された三節棍は眼にもとまらぬ速さで私へと向かって来ている。　投擲した瞬間に青龍偃月刀を構えていれば事なきを得たであろう。
しかし、私は前述の通り一瞬ではあるが、身体を硬直させてしまった。　結果的にその一瞬の遅れが私に回避も防ぐ事すら不可能にさせてしまったのだ。
私は一瞬後に来るであろう痛みに備えるため、反射的に両眼を力強くつぶった。

しかし、時が立っても私を襲う痛みは訪れる事は無かった。　恐る恐る両瞼を開いてみると、私のすぐわきにある柱へとたったいま凌統殿が投擲した三節棍が深々と突き刺さっているではないか。
一拍置き、凌統殿がこちらを振り返った。　凌統殿は相変わらず表情は無いようにも見えたが、何処か安堵しているようにも見える。

……そうか！　柚登殿は近づいて来る者がいると気配を察知したんだ。　しかし、ソレが刺客であるにせよ、敵意がない事に気が付いていたに違いない！　そして、わざと三節棍の軌道をずらして牽制したのだ。
そして、振り返るとその場には刺客ではなくて私が立っていた。
それで安堵を浮かべていたに違いない！
いやはや、まさかいとも簡単に私の気配を察するのは驚きを感じ得ぬが、流石は柚登殿と言ったところであろう。

そして、その後は私の我儘を聞いてくださり、手合わせをして頂ける事となった。
これ程の御人と手合せしていただけるのだ、私の体は自然と武者震いし始めている。
しかし、そんな私とは裏腹に柚登殿は静かに動じず、何時もの平静を保ちながら音も無く三節棍を構えた。
柚登殿の三節棍の構えは両手で三節棍の端通しを軽く握るものだ。
一見すると隙だらけで、どこからでも攻める事が出来るようにも見える。　しかし、この方に刃を届かせるのがどれほど困難なのかを私は知っている。
私の眼の前で数百人の男を薙ぎ払うその姿を……だからこそ、私は一太刀目から全身全霊を込めて向かおう。　勝つか負けるかなんてのは二の次で、武人としての自分を柚登殿に見て頂く為に。

始めに動いたのは私の方だった。　一回の跳躍で柚登殿との間合

いを詰め、急所への突き、右肩からの袈裟斬へと続ける。
しかし、ソレは柚登殿が身体を反らす事によって難なく避けられる。　そこに追撃をしようと仕掛けても今度は手にしている三節棍を振るう事により、意図も簡単に軌道を反らされてしまう。
柄を遣い、更に体勢を崩そうともくろんでも、それすらも柚登殿には防がれてしまう。

だが、今の柚登殿は防戦一方に近く、攻勢に出てくる事は無い。

「（私は試されているのか？）』

そんな心情に駆られる程、柚登殿は攻勢に徹する事は一度も無く、私の斬激を避ける或いは三節棍出受け流すと言った戦法をとっている。　突きの連激でも全て自然な流れでいなされる。
一瞬、もっと間合いを詰めて一気に畳み掛けるかとも考えはしたが、余りにも近づいてしまうと、今度は青龍偃月刀を振るい難くなり、逆に柚登殿の三節棍に最適な間合いへと入ってしまう。
今ですら、三節棍の間合いにはなるべく入らないようにとしているのに、これ以上の接近は危険である。

その様な煮え切らぬ状態のまま数合打ち合わせる。　しかし、それでも柚登殿には何ら変化は見られない。　もしや……いや、考えたくはないが……

私は意を決め、刃の背に手を添え一気に間合いを詰めた。　柚登殿が少し顔をしかめたような気もしたが、そんな事はどうでもよかった。
当然の如く、柚登殿は三節棍を遣い、青龍偃月刀の刃を眼前で止めた。　お互いの顔がグッと縮まり、我等の眼前では刃を三節棍から火花が散っている。

その状態で私はこう切り出した。

「柚登殿、もしや手加減をされているのでは？」

柚登殿がこれ程までに攻勢に徹さないところを見ているとどうにも私手を抜かれているのではないかと結論に達した。

しかし、そんな私の問いに柚登殿は表情を崩すことはせずに、言葉を発した。

「……いや、そう…では」

「ならば！　……ならば、柚登殿も全力で来て頂きたい。　――――武人ならばっ！」

私は言いたいことだけを言い、次で決める為に足に力を込めて後方へと跳躍した。

どうやら、柚登殿も次の打ち合いで終わる事に気が付いたのであろう。　先程よりも少しだけだが眼を細めた。

何故柚登殿が今迄手加減をしていたのかは分からぬが、次は本気の柚登殿を見る事ができる。　ソレを考えただけでも私の頭の中は沸騰しそうな状態であった。

私は軽く息を吐き、精神を統一させた。

「――――行きます。　ハアアァァァ！！」

「――――こ…い…」

そして、次の瞬間……

……私の意識は一瞬で奪われていた。

――――一方その頃…

おう、俺は柚登の母ちゃんだ！　曹操って奴の屋敷を出て気が付いたら何日か経っていた。
あれから俺は馬騰の奴の所まで行こうとして見たんだが、如何やら今度も違うところに来ちまったらしいぜ。
そして、俺の目の前には何だか肌の露出が極限まで高められている肌が褐色の女がいる。　場所は只の飲み屋なんだがよ。
何かしんねぇが、街中を歩いていたらイキナリこの女に『ちょっと飲まない？』って言われたんだ。　タダ酒が飲めるって言うもんだから着いてきたんだが……コイツ、誰だろう？

「今、不名誉な紹介された気がするんだけど？」

「あん？　何か言ったかぁ？」

女は何やら少し溜息をついている様にも見える。　なんだ知らねぇのか？　『溜息をつくと幸せが逃げる』んだぞ？　柚登の受け売りだけれどな～
そういや、俺ってあんまり酒は飲めねぇんだよな……前に柚登が『あまり飲むな』っていた気がするしな。　勿論俺は柚登の言いつけをキチンと守って茶だけを飲んでいる。
女はバカすか飲んでいるが……

「……まぁいっか。　さて、それじゃあ単刀直入に言うわね。　――――貴方、私達の仲間にならない？」

そして、唐突にこの女は俺を勧誘してきたんだ。　しかし仲間か……何の仲間だ？
そういや、この露出具合……そして、胸がデカイ……
「……ワリィ、俺は自分の体は売らないって決め「――――何の話よ！？」……女として体を売る仕事？」
だって、そんな露出だらけの服を着ているからよ……ソレに胸がありえねぇ位でかいし。
「違うわよ。　武官として貴方を雇いたいって話よ！」
おぉ～そっちか。　俺はてっきり淫売をするもんだとばかり……って、武官だぁ？
「何で俺が武官だって分かったんだ？」
「何でって、貴女の腰についている物を見れば一発でわかるわよ」
そう言って女は俺の腰を指差した。　しかし、俺の腰って言われても……
「――――こん中空っぽだぞ？」
そう言って俺は腰についていた小物入れを取り出し、口を開いて女に見えるように向けた。　結構でかい袋状の物だから何でも入って便利なんだぜコレ。　因みに作ったのは柚登な。
前はこの中に路銀とか食糧とか入っていたんだがよ～最近はその場その場でしのいでいたから気が付いたら中身が無くなっていたんだよな。

「そっちじゃないわよ！　そっちの三節棍の事！」

「あぁ……これか」

そう言いながら俺は袋をしまい、三節棍を手に取った。

「何でかしら……凄く疲れたわ」

「若いのに大変だな。　愚痴なら聞くぜ？」

そう言いながら俺は女の杯に酒を注いだ。

あれだな、最近の若い奴限定で疲れやすい病気でもはやってんのか？　前の曹操って屋敷にいたガキもグチグチ言っていたからよ。

「あら、悪いわね。　そうなのよ最近冥琳が『仕事しろ～』って口うるさく言うもんだから……って話それてるわよ！　そうじゃなくて、私の仲間にならないかって話よ！」

「ん、淫売のか？」

「そっから離れろーー！　私の所で武官をしないかって話よ！！」

「……お～　そういうことなら始めから言えよな」

「始めから言ってるじゃない！！　……あぁ、何だか果てしなく疲れた感じがするわ」

そう言いながら女は頭を軽く押さえながら首を垂れた。

何だ、怒りっぽいのは身体によくないんだぞ？　柚登が『そんな

時は魚の骨を食え』っってたぜ？

しかし、武官にならないか……か。　俺にはやりたい事もあるしな。　何故なら俺は馬騰の奴のところに言って出世の仕方を教わって柚登を太守にするっていう野望があるんだ！

俺はその旨を眼の前の女に伝えた。　――――――――次の瞬間

「あら……私の誘いを断るの？」

女は眼を細めると同時にかなり粘っこい殺気を噴き出しやがった。

一瞬、三節棍に手が向きそうになったが、俺はその衝動をとどめた。

確かに殺気は確かに本物だけど、敵意らしいものがほとんど感じられねぇつーか、そもそもこんな飲み屋で人を殺すような真似は幾らなんでもしないだろ。

因みに、周りの一般人は一瞬で俺達の周りから消え去っていき、店の中は俺と女しかいなくなった。

「まぁな、言ったろ？　俺にはやりたい事があるってな」

女はまだ目を細めたままだ。　俺も負けじと女の目を凝視してやる。　そんな状態が続いたが、次の瞬間女はゆっくりと目を瞑り、放たれていた殺気が抑えられた。

俺は軽く息をつくと、女をみた。　女は眼をつむったまま俺が注いだ杯を口元へ運ぶと一気にソレを飲みほした。

「――――ふぅ、なら仕方ないわね。　……わかった、でも気が変わったなら私に言いなさい。　貴方……面白そうだから」

そう言って、先程の冷たい目とは打って変わり女は無邪気に目を

細めて邪気のない笑顔を俺に向けた。
全く、さっきの冷たい印象はなんだったんだっての。

「それから、お詫びに貴方も飲みなさいよ～」

……何だか、話が変な方向に向いてきたじゃね～か。　女は悪びれた様子も無く俺に空いている杯を差し出した。
俺って、始めに酒は飲まないって言ったよな？　もう一度その事を確認したんだが、どうやら間違いなく俺は『酒は飲まない』と言っていたらしい。

「でも、一杯くらい良いじゃないのよ～　何だか私一人で飲むってつまんな～い」

こいつは……　女は口を軽く尖らせてブーブー言って来ている。
はぁ、一杯くらいなら柚登も許してくれるよな？
俺は心の奥で此処には居ない柚登に謝ると杯を受け取った。

「ほらほら、飲みなさいよ～」

「ったく、俺は一杯しか飲まねぇよ」

そう軽口をたたきながら俺は杯を口に運び、中の酒をなめる程度飲んだ。

そして次の瞬間、俺は――――――――――　意識を手放したのだった。

第十五幕　鍛えて（後書き）

ありがとうございました。

コレを書いている時に何度かデータが飛び悲しい思いをしました。

最後の方なんかは半ばやっつけ仕事に近いですね。

感想＆ご意見＆アドバイスはいつでも受け付けております。ではでは、次回もよろしくお願いします

第十六幕　気がついて（前書き）

長々と更新を止めてしまってスミマセンでした！！

それに、そろそろ董卓討伐の話も書かないといけないのに……初めて半年経っているのに未だにそこまで書けていない自分に少し絶望しそうですが、長い目で見て頂けると幸いです。

ではでは、準備ＯＫの方はお進みください～

第十六幕　気がついて

や、やべぇんでねえか！？
やぁ、つい先ほどまで関雲長こと、愛紗さんと手合わせをしていた俺だ。

ついノリで、愛紗さんとの手合わせを承諾した俺はその直後から後悔の嵐に見舞われていた。
だって、よりにもよって模擬刀じゃなくてマジな青龍偃月刀で愛紗さんが向かってくるんだぜ？　もう俺としては、逃げるだけで必死だったよ。
本当に自称ゴッドゥさんには感謝してもしきれないな。　身体能力が飛躍的に上がっていて、反射神経的な物も強化されているからこそ、ギリギリで愛紗さんの斬撃を避けたり、三節棍で受け止めたり出来ているのだから。
もう、さっきまで考えていたオリジナル乱舞を作りたいって言う野望なんか持ってしまってゴメンなさい的な位、余裕が無かった。
しかし、そんな余裕の無さも鉄仮面ばりに表情筋が死滅してしまっている俺の顔には出る事が無く、無表情を貫き通している。　そのせいで愛紗さんも気付かないのだろう。
その状態で何合も打ち合っていると、流石に俺も疲れてくる。
寧ろ、頭がくらくらして意識がもうろうとさえしてきている。
これは俺の感覚が正しければ、限りなく限界に近いシグナルだ。

あぁ、本当にヤバい……俺は無意識に三節棍を持った手を自分の頭に当てておうと手を上げた。　その刹那――――

――――俺の三節棍から火花が散った。　一瞬にして朦朧としていた意識が覚醒した。　気がつくと、愛紗さんの顔が俺の間近にあ

って、しかも三節棍と青龍偃月刀が鍔迫り合いのような状態になっているではないか。
もしかしなくても、結構危ない状況だったのではないのかな？
そして突然、愛紗さんが口を開いた。

「柚登殿、もしや手加減をされているのでは？」

……突然この子は一体何を言っているのでしょうか？　手加減とか、そんな物は全くしていないと言いますか、寧ろ必死になって生きている最中ですがナニカ？
寧ろ、未だに負けていない俺を見るに愛紗さんの方が手加減しているんじゃないのかって感じなんですが……

背中に大量の冷や汗をかき、口の中も水分が完全に飛びカラカラな状態で俺は何とか言葉を紡いだ。

「……いや、そう…では」

――――おしい！　ここに『寧ろそっちが手加減してない？』って続ける筈だったのに、舌が上手く回らなくてこれ以上の言葉を出す事が出来ない！？
勿論、愛紗さんに俺が伝えたい言葉は伝わってはおらず……

「ならば！　……ならば、柚登殿も全力で来ていただきたい。　――――武人ならばっ！」

いや、俺ってそもそも武人じゃなくて唯の一般人――――

しかし、そんな俺の心の声は愛紗さんに届くはずもなく、鍔ぜり合っている得物に力を込めて大きく後方へと跳躍した。

多分、次の一撃で勝敗を決めるつもりなんだろう。　……いや、少し待てよ？　もともと愛紗さん達って俺の平穏無事な毎日を応援する為に着いてきたんじゃないのかな？
それが気が付いたら武人同士の模擬戦になっているし。　しかも、結構イッパイイッパイな俺に本気で来いとか言っているし……

――――ハッ！？　そうか、そうだったのか！　きっと愛紗さんは『この危険な世の中で多少の武が無いと生きていけない、だから私が貴方の力量を確かめましょう！』と言ってくれているに違いない！　だからこそ、本気で来いと言ったんだ。
そうだよな、初めて会った時に“それなり”に賊を倒していたんだから、ある程度強いと思われているのかもしれない。
そして、此処で俺の強さのレベルを知って生きていくうえで必要最低限な強さを俺に与えてくれるに違いない！
それなのに俺って奴はぁ……訳がわかんないという理由で逃げてばっかりで……でも、俺の本気と言われても内心チキンな俺が本気を出したって、たかが知れている。
だったら、あえて此処は無様に負けて愛紗さんの保護浴的なモノを掻き立てる事が出来たら『此処まで弱いのか、きっとあの時の事は偶然に違いない。　ならばこれからは、私が守ってあげよう』的な感じになるのではないのでしょうか！？

よ、よ～し。　少し強引な手法ではありますが簡単なシナリオを考えてみよう。

愛紗さん突撃
←
俺突撃
←
俺青龍偃月刀で吹っ飛ばされる

←
愛紗さん勝利！
←
愛紗さん「貴方は私が守りましょう」

ふ、ふふふ……完璧すぎやしませんかこのシナリオ！　よっしゃあ、後はこの通りに動くだけだぜ！
後はこれを、さっさと実行に移すのみ。　どうやら愛紗さんも準備ができたみたいだ。
愛紗さんの眼は先程よりも細まり、今まで以上に迫力を感じる。
具体的に言うと、美人さんだからこそ眼を細めた事によって多少怖くなっている

「――――行きます。　ハアアァァァ！！」

よし、愛紗さんが突っ込んできた！　俺も行動に移すぜ！

「――――こ…い…」

順調そうに見えた俺の作戦。　このまま行けば俺は間違いなく敗北していた――――筈だった。
しかし、次の瞬間俺の予想だにしない事が起きてしまった。　突然俺の脚に力が入らなくなり、地面に膝をついてしまったのだ。
どうやら、愛紗さんの覇気が思っていた以上に恐ろしくて膝が笑ってしまっていたらしい。　……それに気づかない俺もどうかと思うんだが。
だが、そんな状況は俺のシナリオには書いていない。　如何にかして体勢を立て直そうと咄嗟に両手を地面に着いた。
俺の咄嗟の判断により無様な転倒は避ける事が出来た。　しかし、今の俺の姿勢は陸上選手にあるようなクラウチングスタート状態だ。

簡単に言えば『アンタ何やってんの？』レヴェルの体勢だ。　しかも、隙だらけ過ぎる。

流石にこの体勢は不味いと思った俺は、両手片膝を地面につけた状態からバネのように体を伸ばして後方へと跳躍し、突っ込んでくる愛紗さんから距離をとった。

だが、コレで安心できたわけじゃない。　愛紗さんだって色々と考えながら突撃をかましているんだ。　だったら俺もいち早く体勢を立て直す必要がある。

そう判断した俺は直ぐ様、顔を正面に向けて愛紗さんの姿を捕捉しようとした。　しかし……

「なぜ……に？」

俺はその瞬間、我が目を疑うような光景を目の当たりにした。

いや、確かに俺は転倒しそうになって咄嗟に両手を地面につけたよ。

そこから三節根を握っていないのには今気が付いたんだけれどさ。

だけれど、毎度毎度これは不味いだろう？　だって、何度同じ事やらかすのさ俺？

勘の良い人は気が付いているかもしれない。　俺がこけた衝撃に

より、何時もの如く手に握られていた三節根は、まるで意思を持ったかのように真っ直ぐに……それでいてかなりの高速で愛紗さんへと飛んでいったのだ。
だが、いつもと違って今回は、幸運な事が三点あった。
まず一点目は、愛紗さんが自身の得物を俺に向けて突貫してきたという事だ。　これにより、一瞬ではあるが俺の三節根が愛紗さんの得物に触れ、少しだが威力が落ちていた事だ。
二点目は、相手が一般人では無くて愛紗さんだったという事。将と一般人は武は勿論の事、身体の耐久性も天と地ほどの差がある。
日々鍛錬し、自身の身体を引き締めている者達は酷く打たれ強く、並大抵のことでは怪我や病気をしない。　昔からよく見ていたが、俺の母なんかは毒蛇を食べても平然としているし、旅の途中で俺と手合わせをしている際、三節根を脳天に喰らっても平然としている程の化物クラスである。
無名の母でさえ、それほどの強度を持っているのだ、将来的に名をはせる関羽がたったこれだけで死ぬ事は無く、傍から見ても意識を失っただけと言う事がわかる。
そして、最後の一つは……

「転倒……見てな…い」

俺がこけた瞬間に意識を失ってくれた御蔭で無様な姿をさらさずに済んで良かったー！
……と、まぁ酷く自分中心的な事ではあったりするのは仕方が無いと思う。
そんな事から始まるとある日であった。

P．S：その後、眼を覚ました愛紗さんは俺と手合わせをしたという記憶自体が吹き飛んでいたみたいだ。　……それはそれで、好都合。

――――　一方、その頃…

ふと、気がつくと見た事がない天井を見た。
おかしいな、俺の記憶が正しければ、しらねぇ女と飲んでいた筈なんだが……しかも

「頭……痛ぇ……」

今まで感じた事がない様な頭の痛みに苛まれた。　なんだこの痛みは？　ある程度の怪我とか頭をうったとかなら我慢出来るのに内側から鈍器で殴られ続けているかのような痛さだ。

俺は寝ながら両手で頭を押さえた。　特に良くなったとは思わないが、そうせずにはいられなかった。　多分、酒のせいだろうな。
っていうか、一杯で意識とぶってどんだけ酒に弱いんだよ俺は！？
少し自己嫌悪に陥った気がするぜ。　これからは柚登の言うとおり、酒は飲まないでおこう。
この場にはいない息子へと土下座をした後、俺は部屋の中を見回した。　其処には見た事が無いような豪華な装飾がされた寝台と机がある。

……困った。　何で俺はこんな知らない部屋でしかも寝台の上で寝てんだ？
路銀も何もねぇから宿だったら最悪なんだがよ……
そんな風に俺はこれからの身の振り方を考えていた。

「（カチャ…）あら？　眼を覚ましたみたいね」

そんな時だ、俺の記憶が確かならば一緒に飲んでいたっぽい露出大好き女が部屋へと入ってきたのだ。
その顔には満面の笑みを浮かべている。　ぶっちゃけ、嫌な予感しかしない状況だぜ。

「……おい、此処は何処だ？」

「何処って……あぁ、あなた酔い潰れちゃったから覚えてないのね？」

……やっぱり、酒は怖ぇぜ。
ケラケラと手を口元にあてがいながら女は笑いはじめた。
何故だ？スゲェイラつくんだが……

俺の不機嫌な様子に感付いたんだろう、女は笑うのを止め、咳払いをした。

「ここは私の城よ。　ん、ん……それで、あなたの処遇だけれど……」

「ちょ、ちょい待ち！　城？処遇？　一体、何の事だよ！？」

「なにって、酒の席でアナタ言ったじゃない『しゃあねぇなぁ～そこまで言うんなら雇われてやんよ～！』……って」

オイオイオイオイ、俺って酔った勢いでそんな事を口走っちまったのか！？
……もう、本当に柚登の言うとおりにしよう。　寧ろ、俺の視界に酒が入る事が無いようにしよう。

しかし、そんな決意は既に遅い。　この女の言う通りならば、俺はコイツの城で兵にならないといけないらしい。

「あ、あのよぉ……酔った勢いだから断るって訳にゃ――――」

「――――却下よ。　って言うか、今更抜けられても困るわよ。もう城のみんなに伝えちゃったしね♪」

……逃げられねぇ状況ってこういう事を言うのか？

「でも、そうねぇ～どうしてもって言うなら――――」

「抜けさせてくれんのか！？」

だが、おてんとさんは俺を見捨てちゃいなかったみたいだ。　女は少し残念そうな顔をしながら、自分の懐に手を入れて何かを探しているようだ。

もうこの際、軍を抜ける事が出来る方法があるなら、ソレに縋るしかねぇぜ！

「――――はい、これ」

そう言って女は一つの竹簡を取り出した。　そこには何やら文字が……

「これ、この部屋を用意した費用と、昨日アナタが酔った勢いで暴れて壊した店の備品の費用なんだけれど……払えるかしら？」

……そこには、今まで見た事が無い程の金額が書かれた竹簡が……って、無理だってのこんな金！

明らかに丸々一年働きっぱなしでも払えるか払えねぇかの金額だぞこれ！？　そもそも、今の俺は鐚一文たりとも持ってねぇんだぞ！？

――――い、いや、あれだな……きっとコイツは俺を騙そうとしているに違いない！

そうじゃなきゃ、店の備品を壊しただけでこんな額になるわけがねぇ！　それに、俺はこんな部屋を用意しろなんて一言も言った覚えはねぇんだ！

「フフフ、疑っている眼ね？　まぁこの部屋は私が勝手に用意した物だから引いてあげても良いんだけれど……壊しちゃったものは流石に弁償しないとイケないわよね？」

「へ、へん！　お、おお俺が壊したなんて証拠でもあんのか？　それにだ！　一体何を壊したらこんな金額になんだよ！」

「そう言うと思ったわ。　それなら私についてきなさい、面白い物を見せてあげるわ」

そう言って女は俺に背を向けて部屋から出て行った。

どういう訳か、冷や汗がとめども無く背中から噴き出てくるのが分かる。　気がつけば、さっきまで感じていた二日酔いの頭の痛さがきれいさっぱり消え去っている。

な、何故だ？　とめども無く嫌な予感しかしねぇんだが……

そして、その後俺は……

「――――あ……足元見たぜこいつ！？」

「フフ、何とでも言いなさい。　そもそも、『店を全壊』させる程大暴れした貴方の借金の肩代わりをしてあげただけでも感謝しなさい！」

有無を言わせずに働かないといけないという状況に陥ってしまったのである。

くぅ～……柚登の為に頑張ろうと思っていただけなのに、何でこんな事になっちまったんだよぉ～！！

でもまぁ、しゃあねぇか。　だって今現在俺の目の前には……

「それにしても、三節棍だけでよくもまぁ店一件破壊させれるわね？」

この女の言葉通り、昨日酒を飲んでいた店の残骸が積まれた状態

になっていたのだから……
だけどよ、俺って一体何でここまで暴れたんだ？　誰でも良いから教えてくれよぉ！！
そんな俺の心の叫びがこだまする日であった。
そうして俺は、気がつけば当初の目的地である馬騰の所から遠く離れた――――
「そういえば、自己紹介がまだだったわね。　私は孫策、字は伯符、宜しく頼むわね」
「くぅ～……はぁ、わぁ～ったよ。　俺の事は雪花と呼べ。　まぁ、成り行きでこうなっちまったが宜しく頼むぜ」
「ソレって真名よね？　ほぼ初対面の私に預けてもいいのかしら？」
「かまわねぇよ、俺は前の名前は捨てたんだからな」
「そう……わかった、私の事も雪蓮で構わないわ。　一方的に真名をもらうのってのも癪だしね」
「あいよ、んじゃまぁ宜しく頼むぜ雪蓮さんよ」
孫策がおさめているこの地、揚州にて雇われる事になった。

第十六幕　気がついて（後書き）

ありがとうございました。

感想＆ご意見は随時お待ちしております。一言でも残して頂く作者の指のスピードが上がるやもしれません…

あと、本日同時刻に『俺はオレ？ここは…異世界！？』と『弱いからこそ強くなれる！』も更新いたしました。興味のある方は覗いてやってください。

ではでは、次回もよろしくお願いしますね～

第十七幕　怖がって

やぁ先日、愛紗さんと摸擬戦をして相手をプチ記憶喪失にしてしまった凌統君だよ。
幸いなことに早朝ということもあってか目撃者がゼロっていうのに救われたぜ。　もし、誰かが見ていたとしたら俺の醜態をさらすところだったぜ……

さてさて、愛紗さんとの摸擬戦から数か月が経過し、俺はさほど変化しない日常を満喫……いや、一つだけ変わったことがあるな。
あの後、なんやかんやしているうちに桃香さんが旗揚げしていたんだ。　そして、彼女について行ったものは愛紗さん、鈴々ちゃん、諸葛亮ちゃん、鳳統ちゃん、凌統君……あり？

まぁ、白蓮さんのところで客将をさせていただいていたんだけれど、なんでも『もっと多くを見てこい』と星さんに言われて気がつくと俺も劉備さんたちについてきていたというのが現状だ。
しかし、それ以外には変割ることのない日々を過ごしていた。
朝は母と旅をしているころから半ば日課になりつつある自主鍛錬をして、昼は街中をパトロール。　夜は副長さんと一緒に事務的な仕事……まぁ、凌統隊の事の関する仕事や白蓮さんからあてがわれた仕事もろもろをこなすという生活だ。
初めのころは俺に事務仕事なんて絶対的にできないと思っていた。
だって、一応大学は出ているけれど、専攻って医療系だし……あ、これは初出か？
兎に角、白蓮さんからもらう事務的な仕事って国の経済とかに関することだから絶対に役に立たないと思うんだ。
それに加えて、凌統隊での給与や隊員一人一人を確認して隊列とかを考えたりするんだぜ？

ひどい時とかは徹夜の作業になる。　っていうか、何が悲しくて副長とはいえ同性と一晩同じ部屋ですごさにゃならんのだ？
まぁ、たまに愛紗さんが竹簡の処理を手伝ってくれたり、桃香さんが差し入れにお菓子を持ってきてくれたり、鈴々ちゃんが遊びに来て場を引っ掻き回したり……あり？　鈴々ちゃんって邪魔しかしていない……だと！？

……まぁいいか。　そう言えば今更なんだけれど、最近仲間になったはわわ&あわわ軍師と会話した事ないんだよなぁ～
って言うか、何度か話してみようとトライしてみたんだけれど、避けられているような……いやいや、こんな人畜無害で将来の夢が平穏無事な生活を送るという、いかにも平和主義者の俺を避けるなんて……気のせいだよな？

――――ムムッ！　噂をすれば二人の登場だ。
二人は俺がいる様子に気付く様子もなく、楽しそうに話をしながら廊下を歩いている。
よ、よ～し……今こそ千載一遇のチャンスだ！
なるべく、フレンドリーな笑顔を浮かべて……表情筋を使うのは久しぶり――――寧ろ、使った覚えがほとんど無い気がするな。

……と、とりあえず俺ができりうる最高の笑みを浮かべて二人に話し掛けてみよう。

「――――でね～雛里ちゃん……はわっ！？」

「どうしたの朱里ちゃ……あわわ～」

そして、二人は遥か彼方へと走り去っていき、気が付けば誰もいなくなって――――

……本当に気のせい…だよね？
ってか折角、いままで作ったことの無い最高の笑みを浮かべていた筈なのに逃げられるなんて……
俺ってそんなに嫌われているのかな？

少し…少しだけ涙が出てきちゃう。

「あ、おに～ちゃ～ん！」

そんな感じで落ち込んでいると、俺の後ろの方から聞きなれた少女の声が聞こえた。
きっと、今の時間帯だとお昼を一緒に食べようという誘いだろう。

同じくらいの年齢の少女だというのに、なんでここまで俺に対する関わり方が違うのかと、内心ため息を吐きながら鈴々ちゃんの声が聞こえた後ろを振り向いた。

「お昼食べに――――にゃわ！？」

ん？　どうしたんだろう？　俺の顔を見た瞬間に鈴々ちゃんの満面の笑みが崩れ去って、すごく引きつった笑いにかわったような……

「お、お兄ちゃん、鈴々とご飯食べに行くのイヤなのか！？」

……は？　この子は一体何を言っているのでしょうか？
寧ろ、俺的には鈴々ちゃんとご飯を食べるとその食べっぷりに癒し効果があるとふんでいるのですが……

「そうでは……ない」

「でも、お兄ちゃんスッゴクここに皺よっているのだ」

そういいながら鈴々ちゃんは眉間を指差した。

釣られて俺は自分の眉間を触ってみると……

――――成る程、確かにこれでもかって言う位に皺がよりまくリングな状況で……はい！？

ちょ、おまっ！　なんで笑顔を作っただけで眉間によるかな！？

触っただけでも不機嫌な顔をしているって実感するんだけれど！？

ま、まてよ……確かさっきの二人って俺の顔を見て逃げていったよな？

つ、つまるところ……避けられているのは事実で、更にその原因を作ったのは……俺自身！？

「どうしたのだお兄ちゃん？」

「いや……自分…の……浅はかさ…を…痛感し…た」

「ん～……鈴々、難しいことはよくわからないけれど、きっとお兄ちゃんなら何とかなると思うのだ！」

そう言いながら鈴々ちゃんはいつもの元気な笑みを浮かべた。

うぅ……鈴々ちゃんの優しい言葉が身にしみやがるゼ……でも、その根拠のない言葉が何よりも心をエグるのは何故だろう？

そんな事を思いながら俺は鈴々ちゃんに手をひかれながら昼食をとるために町へと向かうのであった。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「はわわ～驚いたね雛里ちゃん」

「うん……やっぱり、怖いね朱里ちゃん」

彼女たちは凌統の前から逃げ出したのち、城下町へと来ていた。
彼女たちは凌統を一目見た瞬間から、その何を考えているのかわからない表情に恐怖を覚えていた。
元々、軍師である彼女たちは他国の使者等と腹の探り合いも仕事の一環として行っている。　そのため、かかわる人間の人となりを見抜くことに長けている。

もちろん、この国の太守である劉備、関羽、張飛と関わり、彼女たちの人となりを把握し、彼女たちを信頼し真名を交換していた。
しかし、その中でたった一人だけ彼女たちが把握できない人物がいた。
それが凌統その人である。　別段、彼に何かされたとかそういった部類の事はなかったが彼の内面が見ることができない、まるで彼との間に見えない壁が立ちはだかっているかのように他の人とは違った距離を感じていたのだ。
更には凌統が男性と言うことも、只でさえ近づきにくい状況に拍車をかけている。
彼女達は水境の下で学んできた。　そこは男性はおらず、いわゆる女学校と同じような塾だったのだ。
その為、只でさえ男性に慣れていないのに愛想はなく何を考えてい

るのかわからない凌統は彼女達にとって恐怖の対象でしかないのだ。
勿論、彼女たちはそのことを他の仲間たちにも相談した。
凌統はどんな人物なのか、自分達はどう接すればいいのか？
しかし、皆からは同じような言葉が返ってくるだけなのだ。
『柚登殿か？　うむ……そうだな、見た目は冷淡なお人だが、内に秘めし想いは誰よりも熱く常に誰かを想う事のできる人……うん、そうだな』

『お兄ちゃん？　ん～とね、鈴々と同じくらい沢山食べて鈴々と同じくらい強いのだ！』

『柚登さん？　凄く良い人だよ。　誰かのために涙を流せる心の温かい人だし、それに本気でこの戦乱の世を正そうって考えているみたい。　だから、私も愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも柚登さんの事を信頼しているんだよ』

弱冠一名、あまり参考になりにくい人もいるのだが、他の三人からの評価は上々のようであり、その所為で二人は余計に凌統という人物の人となりが分からなくなってきているのだ。
自分の目を信じればいいのか、それとも皆の意見を信じればいいのか……

もちろん、彼女達も凌統に対して申し訳ない気持ちは持ち合わせている。
今までだって散々、目の前で逃げ出したこともあったし、なるべく視線が合わないようにとあからさまに顔を背けたこともある。
しかし、明らかにこれは失礼過ぎるたいどだ。

「やっぱり……よくないよね？」

「うん……どうしよう朱里ちゃん」

二人は互いの顔を見合いながら深いため息を吐いた。

そんな時だ、遠くの方からたった今、彼女達が噂していた人物が歩いてきたのは。

二人の少女は反射的にその小さな体を路地へと滑り込ませて姿を隠した。

そこから火中の人物を見てみるとその人物の肩には自分達の知っている少女が器用に腰掛けていた。

「お兄ちゃん、鈴々ラーメンがいいのだ！」

「了……解」

肩に座っていたのは張飛こと鈴々だ。

凌統達は隠れた二人の存在に気が付いていないもようである。

二人は安堵の表情を浮かべて息を付いた。よく凌統達を観察しているとどうやら昼食に迎う途中らしい。

「……ねぇ雛里ちゃん、後を付いてみようか？」

「えぇ！？　それって尾行って言うんじゃ……」

「ち、違うよ雛里ちゃん！　後を付けて凌統さんを見極めるために……」

注）人はそれを尾行と呼びます。

そんなこんなで、朱里と雛里の二人は凌統達の後を付ける事にした。
しかし、そこで思わぬ弊害があった。
敢えて言う必要があるかは疑問だが、この付近は建てたばかりとは言え劉備達が善政を行っている町だ。
勿論、外部からは商人や移民達で町中は溢れかえっていると言っても過言ではない。
そんな中の移動は非常に困難である。

そんな中、凌統は一般人と比べて体格が大きい。
少し歩きにくくはあるが、前方を視認することが出来る。
凌統と一緒にいる鈴々に至っては、あまりの人の多さから歩くことを諦めて逸れないようにと凌統の肩にまでよじ登ったので特に息苦しさなどは感じておらず、こちらも問題ない。

そして、一番の問題となるのがチミッ子軍師sだ。
二人の体格は間違いなく一般人のそれと比べて小さい。　寧ろ、小さすぎる。
そんな彼女達が人がごった返している通りを人一人を付けながら歩くのは用意ではなかった。

結果的に――――

「はわわ！？　ひ、雛里ちゃーーーん！」

「しゅ、朱里ちゃーん！」

人の波にもまれてアワや二人とも人通りの多い町の中でモノの数秒も経たないうちに離ればなれになり遭難するところであった。

反射的に孔明が鳳統の手をとり自分の元へと引き寄せたので離ればなれになる事は無かったが、いかんせんこのままでは凌統を追いかけるどころの話ではない。
二人がそんな風に手をこまねいていると、そこに数人の男性が近寄ってきた。

「へへっ嬢ちゃん達、何か困っているようだが俺たちが手を貸してやろうか？」

人数にして五人ほどの集団ではあるが、明らかに一般人というよりも素行の悪そうなニヤついた目付きをしているチンピラ紛いな男達である。　善政が行われるということは、ただ人が集まるだけではなく、彼らのような人物をも引き寄せる事は理解していたが、まさかこんな形で遭遇してしまうとは彼女たちも予想外であった。
もちろん、見た目は幼いとは言え彼女達も一端の軍師をやっている間柄、明らかに害意をもって自分たちへと近づいてきたということを瞬時に理解した。
しかし、ここはかなりの混み合いを見せる大通り。　周りの人間達は困っている彼女達に気づく様子もない、しかも男等と彼女達との距離は近く、逃げることは難しそうである。

「い、いえ！　私たちは大丈夫ですのでどうぞお気遣いなく！」

「ゲヘヘ、そんなつれねぇ事言わずにさぁ、ちょっと俺たちに酌してくれりゃあいいんだよ」

「しゅ、朱里ちゃん……」

気丈にふるまって見せる孔明ではあるが、明らかに語尾が震えており、恐怖心が少なからずあるということが傍から見てもわかる。

鳳統はあまりの恐怖で男たちへ顔を向けることができずに、瞼を固く瞑り親友と繋いでいる手に力を込めた。　その目尻にはジワッと涙も浮かべている。

そんな二人の様子を見て男たちは下賤な笑いを浮かべる。　明らかにその様子は二人が怖がっている様子を楽しんでいるようであった。　そして、そのうちの一人が彼女達へと手をゆっくりと伸ばしてきた。

――――しかし…

「何を…してい…る」

そこに思いもよらぬ人物が登場したのであった。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

いやはや、驚きの光景が目の前に広がっている。　俺は鈴々ちゃ

んと昼食へ行こうとしたのだが、街中を歩いている最中財布を持ってくるのを忘れたことに気がついたんだ。
流石に無銭飲食はいただけないし、自負ともに小市民な俺にツケにするという考えが浮かぶはずもない。　しかも、連れの鈴々ちゃんは俺同様に財布を持ってきていないようだ。
初めは彼女に『ツケにするのだ～』と言われたが、先述のとおり俺にはそんな選択肢はない。
仕方なく、財布を取りに城へと戻るために俺はきびきを帰したんだ。

突然だが、この国の大通りは半端なく混んでいる。　正に乗車率１００％と言ってもいいくらいの混みようだ。
そんな中を流れに逆らって歩くのだ、流石に自称ごっどぅさんによって身体能力を高めてもらった俺といえども、そこいらの民間人を薙ぎ倒しながら歩くのは出来ないことはないが、迷惑極まりないのでやらない。
そのため、大通りの端っこを体を縮こまらせながら歩いていた。
鈴々ちゃんは空腹がキープなのだろう、先ほどまでは俺の肩に座っていたのだが力無いように俺の頭の上でタレ●ンダ並みにへばっている。
一応、俺の視界に入らないように移動させたので特に邪魔ではない。

そのような感じで城に向かって歩いていたのだが、俺の進路上にどこか見知ったマジカルハットがあるのに気がついたんだ。
もう言うまでもなく、見た瞬間に俺を若干避けている鳳統ちゃんの三角帽子だと気がついた。　そして、よく目を凝らすとその横には同じく俺を避けている節のある孔明ちゃんがいる。　二人は通りにある人の流れが少ない所にいるもようだ。
……少しだけ頬を温かい何かが流れたような気がした。

おとと、話がそれちまったな。
兎に角、俺を避けている二人が進路上に居ることを確認した俺は二人に不快な思いをさせないように二人の周りを回るように歩こうと思ったんだ。　だけれど、ここは乗車率１００％並みの混んでいる大通りだ。　流石にそんな無駄すぎる動きができるわけもなく、俺は人の波にはじき出されて再び大通りの端っこまで来てしまった。
……仕方がない、二人に会った時は偶然を装って早々に退散するとしよう。

俺はそう判断して再び前に歩き出した。　しかし、そこで俺は予想外な声を聞いてしまった。

「い、いえ！　私たちは大丈夫ですのでどうぞお気遣いなく！」

何やら孔明ちゃんが叫ぶような感じで誰かに何かを訴えていたのだ。　……なるほど、確かに二人の目の前には見た目が明らかに『私、チンピラッス！』的な主張をされている方達が五名ほど見える。
なんだか明らかに危なさそうな感じがするぜ……うん、二人には悪いけれど、俺は何も見なか……

そう判断した俺は再びきびきを帰して困っていそうな二人を尻目にその場を離れようとしたんだ。　しかし、そこでショッキング的な出来事が起きた。

「はい、今日お持ちしたのは南蛮から取り寄せた果物だ！　このあたりじゃ滅多に手に入らない貴重品だよ！　お、そこの奥さんこれどうだい？」

「凄く……大きいです」

「だろぉ？　こいつを食すには……ほれ、こうやって皮を丁寧に向いて中の実を食べるんだ。　一口食べれば甘酸っぱくて芳醇な香りが口の中を駆け巡るよぉ！！」

……なんで聞こえたのかわからないけれど、孔明ちゃん達を挟んでちょうど俺とは反対側で街頭販売を始めたオッサンがいたんだ。
ってか、その果物ってバナ……まぁいいや。　しかし、人間という生き物は新しいものを目にすると興味がわいてしまう生き物なんだな。

俺。流れに逆らって歩く
←
孔明ちゃん達発見！　俺Uターンして流れに沿って歩き始めようとした。
←
街頭販売開始！　再び流れに逆らうように……

ついさっきまでの流れとは明らかに人の流れが変わっちまったよ。
その所為で再び流れに逆らって歩くことになった。　しかし、今度の流れはいかんせんその勢いが違いすぎた。
気がつくと俺はその人の流れに乗ってしまい、再びUターンする羽目になってしまい、またまた孔明ちゃん達に近づくルートを歩き始めた。

しっかし、困った……明らかにこれはよくないことが起きそうだ。
気がつくと二人との距離は二メートル位まで狭まっている。
だが、流石にここまで近づいてしまった以上、無視することはできないか。　俺は意を決して二人に声をかけた。

「何を…してい…る」

どうやら俺の声は二人だけではなく、そのそばにいた男たちにも聞こえたようで、二人を含めて皆が一斉に俺のほうへと視線を動かした。

……な、なんだよ。　そんなに見つめられたら照れちまうじゃねぇか！！

「りょ、凌統さん……」

「あわわ……」

な、なんでだろう？　二人の少女が男に囲まれたとき以上に怯えた表情で俺のほうを見ているのですが……鬱だｓ――――

「あんだぁ兄ちゃん邪魔すんじゃねぇよ。　俺たちはこの嬢ちゃん達に酌を頼んでいるだけなんだからよぉ～」

いや、俺も出来るならなるべく関わろうとは思わなかったんだけれど……はぁ、なんだか面倒くさくなりそうな予感しかしない。

「……二人を見逃…せ」

「ああん？　あわふいてんじゃねぇぞ！！　んだごだぁきっけるわきゃねんだぁ！！」

お願いですから俺にもわかるような言語で話してくださいな。

しゃあない、ここは誠心誠意お頼み申しあげてみましょうかね。

「もう一度言う……さっさと…消えろ」

あ、あり？　いつもの事ながらいろいろとすっ飛ばしたセリフが俺の口から出てきた気がするのですが気の所為でありんすか？
しかも、今の言葉で激怒してくると思いきや、なんだか男達＋軍師Ｓがめっさ青い顔しているのですが気のせいですか？
いや、それだけじゃなくてさっきまで混んでいたはずの通りで何故か俺たちの周りから人が離れて行っている気がするのですが気のせいですか？

「お、おい……この人ってまさか…！？」

「ま、間違いねぇ……数ヶ月前にたった一人で黄巾党の軍勢を退けたっていう…」

「そうよ、確か凌統っていうこの国の将で…」

「確か先日も黄巾党の残党を捕まえたって…」

なんだか野次馬の方から明らかに俺の噂話をしているのですが？
ってか、最後の人、確かに黄巾党の残党は捕まえたけれど、あれは半ば勝手に自白したってだけで……
しかも、将扱いされてはいるけれど、俺的にはさっさと辞めたい職業で……
そんな俺の心の叫びは当然のことながら周りには聞こえない。
しかし、野次馬の声は間違いなく孔明ちゃん達に絡んでいた男達に聞こえていたわけでして……

「お……おい、まずいんじゃないのか？」

「しかも、凌統って言ったよな？　確か凌統って」

「お、俺知っているぞ！　『戦乱を凌ぎ全てを統べる者』って字が……」

「――――くっ！　きょ、今日のところは勘弁してやる！」

そう言い残して男たちはその場から逃げるように走り去って行った。　最後に『これで勝ったと思うなよーー！！』と言い残していたところをみると、また出てくるのかな？

そして、残されたのは俺と孔明ちゃんと鳳統ちゃんだけになってしまった。

「「……」」

し、しかも、空気が滅茶苦茶重いぃ！！　なんだか二人とも凄く驚いた表情で俺を見上げているし。

そんな重い空気の中救世主が現れた――――

「んにゃあ……お兄ちゃんご飯～」

――――具体的に言うのなら俺の頭の上というしまりのない場所からだけれど。

どうやら、結構限界地まで達したみたいだ。　そう言われれば俺も結構腹が減ってきたな。　さっさとお金を取りに行くとしますかね～

そうだ、折角だしこの子たちも一緒にご飯行こうか聞いてみようかな？

「あ、あの――――」

「飯……」

あ、孔明ちゃんと声が重なった。　声が重なった瞬間、孔明ちゃんは実を少し引いて目を固く瞑った。　その姿はまるで両親に怒られて叩かれるのを待っているかのような雰囲気だ。

別に叩くわけがないんだけれど……そして、雛里ちゃんは俺の顔を見て半分以上泣いているんだが……これって結構、心の内側を抉られる感覚なのですが。

そのままの状態で十秒ほど膠着の状態が続いた。　どうするか考えていると半分死んでいるような状態の鈴々ちゃんが再び口を開いた。

「朱里と雛里も……ご飯……行くのだ……」

なんだか話し方が俺に似ていないかな？　まぁいいや、そして鈴々ちゃんの言葉を受けて孔明ちゃんと雛里ちゃんはキョトンとした顔をして一斉に俺の顔を見た。　明らかに俺の顔色をうかがっているのは明確だ。

別に俺は誰とご飯行くのも構わないからな。　俺は『一緒に行こう』的な返事をした。

「で、でしたら……！」

「わ、私たちがお支払いします！！」

……なんだか半分脅されて仕方なくお金を出します的な印象を受けたのは決して気のせいではないはずだ。

でも、お金がない現状としてはとても嬉しい申し出だ。　俺は断ることなく軽く頭を縦に振った。

俺が頭を振ったことにより頭の上の鈴々ちゃんが盛大に揺られて何かを言っているみたいだったが、あえて放置しておこう。
そして、俺たちは四人で鈴々ちゃんのリクエスト通りラーメンを食べに行くことにしたのだが……流石に四人となるとこの道の混雑様によっては、はぐれる率も高いな。
それに、鈴々ちゃんは俺の頭に乗っているから良いとしても、この二人はほおっておいたら人の波で流されてしまう。
かといって、手を繋いで歩くとこの人通りでは流れを止めてしまって歩きにくくなる事受け合いだし……
しゃあないな、ここは鈴々ちゃんと同じ手法で行こうかな。

「二人……とも…少し…我慢…しろ」

「ふぇ――――はわっ！？」

「あわわっ！？」

俺は少し身をかがめると孔明ちゃんと鳳統ちゃんを担ぎあげて先ほどまで鈴々ちゃんがしていたように左右の肩に二人を座らせた。
うむ、こうすればはぐれる事は無いし、尚且つ人にぶつかって危なくなる事もない最高の形だな。
ただ、一つ難点があるとしたら頭に鈴々ちゃんを乗せて、左右の肩に孔明ちゃんと鳳統ちゃんを乗せているというとてつもなく不可思議な格好をした俺が不審者感満載ってことかな！

……グスン

「あ、あの凌統さん！？」

何かを訴えようと孔明ちゃんが口を開いた。　……そう言えば、

何か違和感があると思ったらこの子たちって俺の事を名前で呼んでいるんだよな～
　同じ城に居るのに……そうか！　これが何か壁を感じる理由の一つかもしれない。　だったら俺の真名を呼んでもらえるようにすればいいんだ！

「柚登……」

「「……え？」」

「柚登で…いい……」

「で、でも私達……」

「り、凌統さんの事を避けて……」

孔明ちゃんと鳳統ちゃんが何かあわてた様子だ。　ってか鳳統ちゃん、やっぱり避けていたのは本当だったんですね？　お兄さん、少しだけ泣きそうになっちまったよ。
　でも、避けるような仕草をしているのは決して君たちだけじゃないから気にしなくていいよ～
　昔から変な目で見られることとかに離れているからさ。

「気に……するな……慣れて…いる」

「慣れているって……」

「今までは……どうされたのですか？」

なんだか、真名を教えただけでここまでおもっ苦しい空気になる

とは予想外だったな。　それと、鳳統ちゃん？　わざわざ俺の傷口を広げるような質問はやめていただきたいんだが……でも、答えるけれどね。

「どうも……しない…俺は俺…だから……しかし…理解される…と嬉しい……のも…また事実」

「「……」」

そして再び黙ってしまうお二人さん。　えっと、これはやはり無理です的なお断りな返事なのでしょうか？

別に、二人の真名を教えてくれと言っているわけではないのだが。

やっぱり、俺の真名は呼びたくないのかな？

「わ、私は朱里です」

「え、えと……ヒナ、雛里…です」

あ、あり？　なんか真名を教えてもらえたのですが？

「私たちは誤解していたみたいです」

「りょう……柚登さんの事を怖い人って……で、でも本当は優しい人ってわかりました」

やっぱり、怖い人って思われていたんだ。　でも、なんだかよくわからないうちに考えを改めてくれたみたいでよかったよ。

うっわ、なんだか無駄にテンションが上がってきたぜ！！　今日の調子でいけばラーメン超徳盛が十杯位をペロリと完食できそうだぜ！！

「……柚登…だ…」

そうして、俺は朱里ちゃんと雛里ちゃんの真名をもらうことができたとさ～

追伸：テンションがＭＡＸの俺と空腹度ＭＡＸの鈴々ちゃんの食欲を見て再び朱里ちゃんと雛里ちゃんが涙目になったのはまた別のお話だったりします。

第十七幕　怖がって（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。　なんだか最後はグダグダになってしまいました。
そして、鈴々がほとんど喋らないというありえない内容となってしまいましたがご了承ください。
さてさて、そろそろ本編を進めないと……その前に劉備との話を書いて母のエピソードを入れて……う～ん、まだ先になるのかな？

『弱いからこそ強くなれる！』を同時刻に更新いたしました。　興味のある方は見ていってください。
感想＆ご意見はいつでもお待ちしております。　お気軽にどうぞ～
ではでは、次回もお楽しみに～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9035r/

Re:俺!?

2011年10月8日08時54分発行